博士論文

自己と内集団の連合が自己防衛に果たす機能
—類似性および概念連合という観点から—

渡辺 匠

目　次

理論編第 1 部 内集団との連合 1

1-1. 集団への所属欲求 1
1-2. 集団所属の肯定的影響 3
1-3. 集団離脱の否定的影響 4
1-4. 類似性と概念連合 6

理論編第 2 部 本論文の視点 8

2-1. 自己防衛機能 8
2-2. 自己脅威に対する防衛方略 15
2-3. 社会的排斥に対する防衛方略 18
2-4. 自己防衛方略の生起条件 19

理論編第 3 部 本論文の貢献 25

3-1. 自己防衛反応の潜在性 25
3-2. 集団地位に応じた自己防衛反応 29
3-3. 幸福感維持のプロセス 32
3-4. 本論文で検討する課題 33

実証編第 1 部 自己と内集団の連合が幸福感維持にもたらす効果 35

4-1. 研究 1 自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の関連 35
4-1-1. 目的 35
4-1-2. 方法 36
4-1-3. 結果 37
4-1-4. 考察 39
4-2. 研究 2 自己と内集団成員の類似性が主観的幸福感に与える影響 40
4-2-1. 目的 40
4-2-2. 方法 40
4-2-3. 結果 42
4-2-4. 考察 43

実証編第 2 部 自己と内集団の連合がもつ自己防衛機能 44

5-1. 研究 3 自尊心脅威が自己と内集団成員の類似性に与える影響 44
5-1-1. 目的 44
5-1-2. 方法 46

5-1-3. 結果 48
5-1-4. 考察 53
5-2. 研究 4 死の顕現性が自己と内集団成員の概念連合に与える影響 56
5-2-1. 目的 56
5-2-2. 方法 58
5-2-3. 結果 60
5-2-4. 考察 64

実証編第 3 部 内集団の地位に応じた自己防衛プロセス 67

6-1. 研究 5 自尊心脅威と集団地位が自己と内集団成員の類似性に与える影響 67
6-1-1. 目的 67
6-1-2. 方法 68
6-1-3. 結果 70
6-1-4. 考察 73
6-2. 研究 6 死の顕現性と集団地位が内集団同一視と概念連合に与える影響 76
6-2-1. 目的 76
6-2-2. 方法 79
6-2-3. 結果 82
6-2-4. 考察 88

総合考察 92

7-1. 研究知見の要約 92
7-2. 本論文の自己防衛モデル 93
7-3. 自己防衛モデルの適用範囲 96
7-4. 自己防衛反応の生起のしやすさ 100
7-5. 自己と内集団の連合の形成過程 103
7-6. 自己防衛反応の適応的価値 106
7-7. 今後の展望 108

引用文献 111

謝辞 130

資料 131

理論編第 1 部 内集団との連合

1-1. 集団への所属欲求

「社会的動物」である人間はほかの個体と集団を形成し、その集団のなかで生活をしてきた。動物が集団に所属して生活することは、その個体の生存や繁殖にとってさまざまな利点をもたらす。この主張は、適応論的な視点をとる現在の社会心理学の各領域においてなされている（Baumeister 2012; Baumeister & Leary, 1995; Caporael, 1997; Caporael & Baron, 1997; Smith, Murphym & Coats, 1999）。たとえば、われわれ人間の祖先を考えると、生活していくうえで必要となるさまざまな資源を得るためには、「群れ」という社会集団を形成することが有用であった。狩猟採集の時代において食料を獲得することは不確実性が高く、内集団（自分が所属する集団）の成員と資源を交換することによって、限られた資源を効率的に得ることができる。さらに、子どもを育てる際には、集団内で共有された食料を与え、保護することで自分の子どもが生き残る確率も高くなるであろう。そのうえ、人間以外の動物や敵対的な外集団（自分が所属しない集団）などの外敵から身を守るためにも、何らかの集団に所属して、良好な関係を形成するほうが生存確率が高くなるのは明白である。このように、人間は社会的動物として集団や社会のなかで生きているのである。一方で、もし集団から締め出された場合は、その個体の生存率は低くなるであろう。したがって、内集団は人間が生活を営むうえで必要であると考えられる（Barash, 1977; Buss, 1990; Moreland, 1987）。

集団所属は人間にとって必要であり、人間は「集団に所属する」という基本的欲求をもっている。このような所属欲求の重要性は、複数の研究者によって度々指摘されてきた（Bowlby, 1973; Fromm, 1955; Maslow, 1968）。たとえば、Maslow は人間の欲求のうち、「所属と愛の欲求」（belongingness and love needs）を 3 番目に重要な欲求として位置づけている（Maslow, 1968）。彼が提唱した欲求階層説によると、人間の欲求は「生理的欲求、安全への欲求、所属と愛の欲求、尊敬と承認の欲求、自己実現の欲求」の 5 つに分類でき、この 5 つの欲求が階層構造をもっている。ここで、生理的欲求をもっとも下位の欲求、自己実現の欲求をもっとも上位の欲求とし、下位の欲求が充足されると上位の欲求が生じると仮定されている。このような階層のなかでは、所属と愛の欲求は、「食料を求める」、「身の危険を守る」などの生理的欲求や安全への欲求、つまり生存そのものにかかわる要求に

次いで重要だとされる。さらに、所属と愛の欲求が満たされないかぎり、尊敬と承認の欲求や自己実現の欲求は生じない。それほどまでに、所属と愛の欲求は人間に根源的なものであると考えられていた。

上記の Maslow の欲求階層説は人間の動機づけのメカニズムを考えるうえで大きな影響を与えてきた。しかし、「所属と愛の欲求が人間の根源的な欲求である」という彼の主張は実験や調査データにもとづいているわけではなく、実証研究に関するレビューもされてはいない。このような状況に対して、集団所属や所属欲求が人間にとって必要であるということを実証的に明らかにしたのが、Baumeister らの論文である（Baumeister & Leary, 1995）。彼らはそれまでにおこなわれた過去の実証研究について体系的なレビューをおこない、「所属欲求」（need to belong）が人間の根源的な欲求であることをあらためて示した。

Baumeister らの主張は冒頭の適応論的な視点にもとづいており、所属欲求は食欲などと同様に、人間が生存のために必要とする欲求であるとされる。つまり、人間は自分 1 人では生きていけない非力な存在であり、身近な他者と集団を形成し、その集団成員との関係性を維持することでさまざまな恩恵を受け、自分の生き残る確率を飛躍的に高めることができる。何らかの要因で集団から離れると、集団に所属している場合よりも生存率が低くなったのはほぼ間違いないであろう。したがって、人間の心は「集団に所属する」という傾向、またそれを支える欲求などの心的メカニズムをもつように、心の進化の過程でデザインされてきたと考えられる。この点について、Baumeister らは次のように主張する(Baumeister & Leary, 1995, p. 499)。

> It seems clear that a desire to form and maintain social bonds would have both survival and reproductive benefits. …The likely result of this evolutionary selection would be a set of internal mechanisms that guide individual human beings into social groups and lasting relationships.
> （「社会的な結びつきを形成し、維持したい」という欲求が生存と繁殖において有利に働いたのはほぼ間違いないであろう。このような有利な特性をもつ結果として（進化的な淘汰の結果として）、人間には集団に所属し関係性を維持するための心的メカニズムがそなわっていると考えられる。）

Baumeister & Leary (1995) にもある通り、集団への所属欲求は昔の狩猟採集時代から、現代のわれわれの心のなかにも継承され、人間の心的メカニズムを構成する中心的な一部として存在するのである。

1-2. 集団所属の肯定的影響

集団への所属欲求は人間の心的メカニズムの中心的な要素であるが、なぜそのようなメカニズムが形成されたのであろうか。その理由として、狩猟採集時代では、集団に所属している人はそうでない人よりも、その後の生存確率が高くなったためであると考えられる。興味深いことに、集団に所属することは現代においても生存確率や健康状態、精神状態を高めている。具体的には、所属集団の数が多く、集団での活動頻度が多い人ほど、死亡率が低い（Eng, Rimm, Fitzmaurice, & Kawachi, 2002）、脳卒中の再発頻度が低い（Boden-Albala, Litwak, Elkind, Rundek, & Sacco, 2005）、心臓血管系疾患の発症リスクが低い（Ford, Loucks, & Berkman, 2006）、記憶力が低下しにくい（Ertel, Glymour, & Berkman, 2008）、風邪にかかりにくい（Cohen, Doyle, Turner, Alper, & Skoner, 2003）、主観的幸福感が高く抑うつ傾向が低い（Argyle, 1987; Myers, 1992）、ということがそれぞれ示されている。たとえば、Eng らの研究はアメリカの男性 28,369 名を対象として調査研究をおこなっている。主要な質問項目は社会的な結びつき（social ties）の程度であり、これには以下の 4 種類がふくまれる。

1. 結婚の有無
2. 友達や親類の数および接触頻度の多さ
3. 宗教行事への参加頻度
4. そのほかの集団での活動時間

上記の 4 種類の質問に対する回答をもとに、社会的な結びつきの強さをあらわす指標が算出される（1：弱い、2：やや弱い、3：やや強い、4：強い）。結婚している、友達と親類の数や接触頻度が多い、宗教行事に参加している、そのほかの集団での活動時間が長い、という特徴をそなえた人ほど、社会的な結びつきが強いと判断される。Eng らは 10 年間のフォローアップ調査を実施した結果、社会的な結びつきが強い人はそうでない人よりも、突然死、自殺やそのほかの死亡率が有意に低いことを明らかにした。そのうえ、「社会的な

結びつきの程度が強い人は死亡リスクが低い」という結果は、年齢や職業、健康行動、健康状態、食習慣を統制しても有意なままであった。たとえば、社会的な結びつきが強いグループ（3：やや強い、4：強い）に分類される人は結びつきが弱いグループ（1：弱い、2：やや弱い）に分類される人とくらべて、上記の変数を統制した死亡率が 0.84 倍に低下することが報告されている。以上のように、集団所属は生存確率をふくめ、人間の健康状態や精神状態を向上させていると結論できるであろう。

ところで、これまでの議論では、「集団に所属している」という実際の集団所属の有無や、内集団での活動頻度の多さが個人の健康状態や精神状態に与える効果をあつかってきた。それに対し、現実に集団に所属しているかどうかにかかわらず、「集団に所属している」という心理的連合の強さも所属欲求を充足して、個人の健康状態や精神状態を向上させることが明らかになっている。具体的には、内集団に対する同一視が強い人ほど、慢性疾患になりにくい（Bailis, Chipperfield, & Helgason, 2008）、がんや感染症のリスクが低い（Cole, Kemeny, Taylor, & Visscher, 1996）、身体的自立度が高い（Levy, Slade, & Kasl, 2002）、痛みの経験が少ない（Platow, Voudouris, Gilford, Jamieson, Najdovski, Papaleo, Pollard, & Terry, 2007）、ということがそれぞれわかっている。また、精神状態との関連からは、内集団同一視が強い人ほど、主観的幸福感が高い（Bizumic, Reynolds, Turner, Bromhead, & Subasic, 2009）、自尊心が高い（Luhtanen & Crocker, 1992）、ストレスが低い（Haslam & Reicher, 2006）、ということが示されている。このように、内集団同一視などの自己と内集団の連合は、実際の集団所属と同様に健康状態と精神状態の両面にとって肯定的に作用すると考えられる。

1-3. 集団離脱の否定的影響

集団所属や内集団との心理的連合が個人にとっていかに重要であるかは、社会的排斥に関する研究からも明らかである。社会的排斥（ostracism）とは、「個人や集団を社会状況から締めだすこと」を意味しており（Williams, 2007, 2009）、研究者によっては社会的排除（social exclusion）や対人拒絶（interpersonal rejection）といった用語を使用している。集団成員のなかにはフリーライダーなど、集団の目標達成のうえで望ましくないものも存在する。この場合、社会的排斥は有効な対処方略の一つであり、特定の成員を排斥することにより、集団がもつ目標達成などの機能を維持することができる（Ouwerkerk, Kerr,

Galluchi, & Van Lange, 2005)。しかし、一方で、排斥を受けた人物は集団所属や集団との心理的連合の形成が阻害され、「集団に所属したい」という基本的欲求が脅かされる。その結果、健康状態や精神状態に否定的な影響が生じやすい。実際に、社会的排斥に関するこれまでの研究は、所属欲求の阻害が個人の健康状態や精神状態の低下と深い関連があることを示唆している。たとえば、健康状態との関連を示唆する例として、社会的に排斥を受けると、血圧やコルチゾールの値が上昇することが指摘されている（Gunnar, Sebanc, Tout, Donzella, & van Dulmen, 2003; Stround, Tanofsky-Kraff, Wilfley, & Salovey, 2000）。

さらに、社会的に排斥されたり、排斥を受けるという脅威が存在すると、所属欲求をふくめたさまざまな欲求が脅威にさらされる（Baumeister, Brewer, Tice, & Twenge, 2007; Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Twenge, 2005; Gonsalkorale & Williams, 2007; Van Beest & Williams, 2006; Williams, 2007, 2009; Williams, Cheung, & Choi, 2000; Williams & Nida, 2011; Zadro, Williams, & Richardson, 2004）。代表的な研究として、Williams et al.（2000）を次に紹介する。この研究はコンピュータをもちいて社会的排斥の有無（排斥 vs. 統制）を実験的に操作している。どちらの条件の参加者も、「オンライン上で他者とキャッチボールをおこなう」と教示を受ける。ただし、参加者以外のプレイヤーは実際にはコンピュータによって制御されており、排斥条件の参加者は最初の数試行をのぞいて一度もボールが回ってこなかった。それに対して、統制条件の参加者はほかのプレイヤーと同じ程度にボールが回ってくるようにあらかじめプログラミングされていた。その結果、排斥条件の参加者は統制条件とくらべて、所属感や統制感、自尊心、存在価値の評価がそれぞれ低下することが示されている。

また、これらの否定的な影響は、自分を排斥した人物が外集団であっても生じることが確認されている（Williams et al., 2000）。さらに、排斥者が社会的に軽蔑される集団（KKK; クー・クラックス・クラン）であっても（Gonsalkorale & Williams, 2007）、排斥者が実在の人物ではなく、コンピュータによって作成された人工的なプログラムであると告げても（Zadro et al., 2004）、排斥されることで利益を得るような状況であっても（Van Beest & Williams, 2006）、所属感や統制感、自尊心、存在価値の評価はそれぞれ低下する。

このほか、コンピュータによる課題以外でも、社会的排斥による否定的な影響が確認されている（Baumeister et al., 2007, 2005; Williams & Nida, 2011）。たとえば、Baumeister et al.（2005）では、参加者はまず外向性のテストに回答し、それに関する正確なフィードバックを受ける。こうしてフィードバック情報の信憑性を高めたあと、別のテスト結果に

ついて偽のフィードバックを受ける。具体的には、排斥条件の参加者は「将来に孤立する可能性が高い」と告げられる。一方、ほかの 2 つの統制条件では、「将来に良好な人間関係を構築する可能性が高い」、もしくは、「将来に交通事故で怪我をする可能性が高い」というフィードバックを受ける。その結果、排斥条件の参加者は 2 つの統制条件よりも、まずいが健康に良い飲み物を飲もうとしなかった。つまり、社会的に排斥されると、「まずい飲み物を飲みたくない」という衝動的反応を抑制して望ましい行動をとること（自己制御）ができなくなると示唆される。

1-4. 類似性と概念連合

集団所属や集団との心理的連合がもたらす効果について、本論文はこれまでに以下の実証的知見を簡潔に紹介してきた。

1. 集団所属や心理的連合を通じて所属欲求が満たされると、個人の健康状態や精神状態が向上する
2. 集団所属や心理的連合の阻害を通じて所属欲求が満たされないと、個人の健康状態や精神状態が低下する

2 つの実証的知見の背景には、多くの場合、適応論的な考え方がある。すなわち、過去の狩猟採集時代から、内集団は人間の生存にとって多様な恩恵をもたらしており、実際の集団所属や連合が健康状態や精神状態にもたらす効果は現代においても当てはまる。これらのなかでも、本論文は自己と内集団の連合が果たす機能について、「類似性」（similarity）と「概念連合」（overlap）という 2 つの指標から検証をおこなう。以下では 2 つの指標の定義、および、関連する知見について述べる。

自己と内集団成員の類似性とは、「自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか」という主観的判断を意味している。類似性に関するこれまでの研究は、自己と内集団成員の類似性は高い一方で、自己と外集団成員の類似性は低いことが明らかになっている（Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow & Gaertner, 2005; Gramzow, Gaertner, & Sedikides, 2001; Krueger, 1998, 2007; Krueger, Acevedo, & Robbins, 2006; Otten & Bar-Tal, 2002; Otten & Wentura, 2001; Robbins & Krueger, 2005; Vanhoomissen, & Van Overwalle, 2010）。さらに、他者や内集団成員との類似性が高いほ

ど、その人物に対する魅力が上昇する傾向がある（AhYun, 2002; Byrne, 1961; Byrne & Nelson, 1965; Chen, & Kenrick, 2002; Levinger & Breedlove, 1966; Montoya, Horton, & Kirchner, 2008; Michinov & Monteil, 2002; Murray, Holmes, Bellavia, & Griffin, 2002）。

このほか、自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、外集団に対するステレオタイプや集団間バイアスが強くなる（Allen & Wilder, 1975; Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow & Gaertner, 2005; Gramzow et al., 2001; Otten & Wentura, 2001; Robbins & Krueger, 2005; Vanhoomissen, & Van Overwalle, 2010）。したがって、自己と内集団成員の類似性は対人魅力やステレオタイプ、集団間バイアスの源泉となる重要な要因であることがうかがえる。また、精神状態との関係からは、自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感と関連することがわかっており（Acitelli, Douvan, & Veroff, 1993）、類似性は個人の心理的安寧を維持していると示唆される。

本論文で検証する 2 つめの指標である概念連合は、「非意識的な心理的連合の強さ」を意味している。この指標について、Smith らの研究グループは自己と内集団・外集団の間の概念連合の強さを比較検討するために、Aron, Aron, Tudor, & Nelson（1991）で提唱された反応時間パラダイムを使用した（Smith, 2002; Smith, Coats, & Walling, 1999; Smith & Henry, 1996）。実験ではまず、自己と内集団成員、外集団成員について特性語の評定課題をおこなう。つづけて、反応時間課題を実施し、評定課題と同一の特性語が内集団成員と外集団成員に当てはまるかどうかを参加者は再び判断する。

分析の結果、自己概念と内集団成員の概念で一致した特性語に対する反応時間は、自己概念と内集団成員の概念で一致していない特性語よりも速くなることが明らかになった。それに対し、自己概念と外集団成員の概念で一致した特性語に対する反応時間は、自己概念と外集団成員の概念で一致していない特性語よりも速くはならなかった。これらの結果から、自己と内集団成員の概念連合は強い一方で、自己と外集団成員の概念連合は弱いと示唆される（Cadinu, & De Amicis, 1999; Coats, Smith, Claypool, & Banner, 2000; Otten, 2002a, 2002b; Otten & Epstude, 2006）。同様に、Devos らは Implicit Association Test（IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003）をもちいて、自己と内集団の概念連合は自己と外集団の概念連合よりも強いことを示している（Devos & Banaji, 2003, 2005; Farnham, Greenwald, & Banaji, 1999; Greenwald & Farnham, 2000; Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002）。以上の類似性と概念連合という 2 つの観点から、本論文は自己と内集団の連合がもたらす機能を検討することとする。

理論編第 2 部 本論文の視点

2-1. 自己防衛機能

前節では、自己と内集団成員の類似性は外集団成員よりも高く、同様に、自己と内集団成員の概念連合は外集団成員よりも強いことを指摘した。それでは、そもそもなぜ自己と内集団の連合は自己と外集団の連合よりも強く認知されるのであろうか。この点について、自己と内集団の連合が個人の精神状態を向上させているという知見をふまえると、自己と内集団の連合は「自己防衛」（self-defense）のために強く認知されているのではないかと考えられる。自己防衛とは、自己脅威（自己の全体的価値への疑念や損傷）による否定的影響を低減することを意味している。

自己脅威は少なくとも一時的に自己概念や自尊心を損傷・低下させ（Alicke & Sedikides, 2011）、主観的幸福感を低下させることがわかっている（Routledge, Ostafin, Juhl, Sedikides, Cathey, & Liao, 2010）。こうした精神状態の低下によって、脅威を受けた人は適応障害が生じやすくなる。しかし、脅威に対して自己を防衛することで、自己脅威が精神状態に与える重大な否定的影響を緩和することが可能になる（Taylor & Brown, 1988, 1994）。われわれの日常生活ではテストで低い点数をとったり、仕事で失敗するなど、さまざまな自己への脅威が存在する。一方で、自己脅威の生起を制御したり、自己脅威をつねに回避することはほぼ不可能である。そのような状況のなかでは、自己脅威に対して迅速に反応し、脅威による否定的影響を低減することが求められよう。自己と内集団の連合は、まさにこの自己防衛のために存在しているのである。

先述したように、自己と内集団の連合は所属欲求を満たし、個人の精神状態を向上させる効果をもつ。内集団との連合を通じたこれらの肯定的な効果は、自己脅威状況においても適用できるであろう。すなわち、自己と内集団の連合が精神状態を向上させることをふまえると、自己が脅威にさらされたときに自己と内集団の連合を強めることで、精神状態を維持することができると考えられる。たとえば、われわれは日常生活で仕事に失敗したときに、家族や仲間の写真をみることで心理的安寧を保つことがある。また、自分が試験に落ちてしまったときに、友人も落ちていると安心するであろう。さらに、2011 年の東日本大震災のあとに日本人の「絆」や「連帯」という側面が強調されたことも、内集団との連合を通じた自己防衛反応の 1 種として理解することができるかもしれない。このように、

本論文は自己と内集団の連合がもたらす自己防衛の機能に着目し、自己脅威が類似性や概念連合などの内集団との連合に与える影響を検討する。もし自己と内集団の連合が自己を防衛する機能をもつならば、自己脅威を受けた人はそうでない人とくらべて、類似性や概念連合などの心理的連合が強くなると予測される。

以上の予測について、社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1979）や自己カテゴリー化理論（Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987）、自己肯定化理論（Sherman & Cohen, 2006; Steele, 1988）は、本論文と同様に集団との関係性が自己防衛機能をもつと仮定している。しかし、実際にこれらの仮定を検証した実証的データはほとんど存在していない。また、社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論、自己肯定化理論は集団との関係性が自己防衛機能をもつと仮定しているが、仮定しているプロセスは本論文と同一ではない。ここでは、代表的な理論として社会的アイデンティティ理論を取りあげ、本論文の視点との関連を記述する。

社会的アイデンティティ理論とは、人々は自己概念の一部を集団への所属や集団成員性を通じて確立するという理論である。同時に、人々は「自尊心を高揚したい」という基本的な欲求をもっており、内集団を外集団よりも優位な立場に置くことで、自尊心を高揚していると仮定する。これらの仮定から、自己が脅威にさらされると、内集団にとって有利な集団間バイアスが増加するという予測が導かれる（Hogg & Abrams, 1990）。それゆえ、社会的アイデンティティ理論は自己脅威を受けると内集団との関係性を強化する、つまり内集団との関係性が自己防衛機能をもつと仮定するが、次の点で本論文の考えやモデルとは異なる。

まず、社会的アイデンティティ理論は内集団と外集団の比較にもとづく集団間バイアスが自己防衛機能をもつとするが、本論文は集団間バイアスではなく、内集団との連合を通じた自己防衛機能に焦点を当てている。また、本論文は自尊心高揚の欲求だけでなく、集団所属の欲求を社会的判断や行動の根本的な原因としてとらえている。さらに、後述するように、本論文は自己脅威を自尊心脅威だけではなく、死の脅威をふくむ自己の全体的価値への脅威として位置づけている。したがって、本論文の考えは社会的アイデンティティ理論やほかの理論と弁別できると考えられよう。

一方で、本論文と同様に、自己と内集団の心理的連合が自己防衛機能をもつことを示した研究も存在する。たとえば、自己脅威状況において、自己と内集団成員の合意性は高くなる（Alicke & Largo, 1995; Sherman, Presson, & Chassin, 1984）。同様に、自己脅威を

受けると、内集団への同一視が強くなることが確認されている（Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Sloan, 1976）。このように、自己脅威状況において自己と内集団の連合は強くなることから、自己と内集団の連合は自己防衛機能をもつと推測される。以下では、それらのなかでも本論文と関連が深い合意性の研究についてレビューをおこなう。

合意性（social consensus）とは、「自分の態度・意見が内集団成員に支持されていると思う程度」を意味しており、類似性（自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか）と概念的に近接している。合意性と類似性は、「自分がもつ特徴をほかの人々に投影する」という点で共通しており、実際に、これらの指標は「社会的投影」（social projection）として一括りにされることもある（e.g., Robbins & Krueger, 2005）。ただし、合意性は自分の態度や意見が他者に共有されている程度を直接尋ねるのに対して、類似性は自己と他者の性格特性を連続変量としてそれぞれ尋ね、研究者が事後的に類似性という指標を作成する。たとえば、類似性の測定では、参加者は複数の性格特性語が自己と内集団の成員についてどの程度当てはまるかをそれぞれ判断する。これらの判断にもとづき、参加者ごとに「自己の特性判断」と「内集団成員の特性判断」の相関を算出することで、自己と内集団成員の類似性の指標が作成される。

このように、類似性は自己と内集団成員の性格特性に対する認知を測定しており、それぞれの特性認知がどのように変化するかを分析できるという点で有用であると考えられる。本論文でも自己と内集団成員の合意性ではなく類似性を使用することで、自己が脅威にさらされたときに、自己と内集団成員の類似性だけでなく、自己と内集団成員に対する性格認知が変化しているかどうかを調べることが可能になる。さらに、外集団成員に対する性格特性の認知もあわせて測定することで、自己脅威状況において自己と外集団成員の類似性が変化するか、外集団成員に対する特性認知が変化するか、内集団成員と外集団成員の集団間バイアスが変化するか、についてそれぞれ分析できることになる。

類似性の測定に対して、合意性の測定では通常、参加者はある態度項目について「賛成」か「反対」のどちらかを選択する。そのあと、自分の選択した態度が何%程度の他者に支持されているかを答える（自分の態度選択と他者の合意性推定の順番が逆の研究もある）。この場合、自分が選択した態度は他者に支持されていると過大に推定する傾向があり、このような現象はフォールス・コンセンサス効果とよばれる（Marks & Miller, 1987; Ross, Greene, & House, 1977）。たとえば、黒パンの好きな人は、「自分と同じ黒パンの好きな人が白パンの好きな人よりも多い」と推定するが、白パンの好きな人は、「自分と同じ白パン

の好きな人が黒パンの好きな人よりも多い」と推定しやすい。

なぜフォールス・コンセンサス効果が生じるかについては、複数の説明が提唱されている（Krueger, 1998; Marks & Miller, 1987）。具体的には、人は自分と似た人と選択的に接触しており、この偏った接触の結果として類似した態度や意見を想起しやすくなる（選択的接触）。また、自分の態度や意見は意識のなかで目立っており、この顕現性の高さが利用される場合もある（顕現性の高さ）。さらに、自分の態度の原因が外的に帰属されることで、ほかの人も似たような態度をもつと論理的に推論されるかもしれない（論理的情報処理）。このように、選択的接触や顕現性の高さ、論理的情報処理など、認知的要因がフォールス・コンセンサス効果を促進しているという説明が存在する。その一方で、本論文の考えと一致して、フォールス・コンセンサス効果は動機的要因によって生じることも指摘されている（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。すなわち、自己が脅威にさらされたときに、自分の態度や意見が一般的で適切なものであると知覚することで、自尊心を維持・向上させることができるのである。以上のように、内集団成員との合意性が脅威状況において自己防衛機能をもつことを示した研究について以下で述べる。

まず、合意性と自己防衛の関連を示唆する研究として、自己と内集団成員の合意性が高い人ほど、主観的幸福感が高いということがわかっている（Bliese & Halverson, 1998; Campbell, 1986）。この知見にある通り、内集団成員との合意性は精神状態を向上させていることから、脅威状況において自己を防衛する機能をもつと推測される。実際に、自己防衛機能をより直接的に検討した研究では、自己が脅威にさらされると、自己と内集団成員の合意性が高くなることが示されている（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。

代表的な研究として、Sherman et al.（1984）を次に紹介する。彼らは自尊心脅威が自己と内集団成員の合意性に与える影響を検証している。実験には 2 つの要因があり、課題の遂行者（自己 vs. 内集団）と遂行結果（失敗 vs. 成功）をそれぞれ操作している（実際の研究ではこのほかに別の条件が存在するが、本論文との関連に焦点を絞って議論をするため、ここでは省略する）。参加者はまず複数の遺書を読む。その際、自己遂行条件ではどの遺書が本物かを自分で判断し、その判断が外れていた（失敗条件）、もしくは、当たっていた（成功条件）というフィードバックを受ける。それに対し、内集団遂行条件ではどの遺書が本物かを内集団成員（同じ大学の学生）が判断し、その判断が外れていた（失敗条件）、あるいは、当たっていた（成功条件）というフィードバックを受ける。最後に、いずれの条件の参加者も、ほかの内集団成員が同じ遺書を選ぶ割合（%）を回答した。つまり、

この従属変数は、失敗条件ではほかの内集団成員の判断も外れる確率、成功条件ではほかの内集団成員の判断も当たる確率を意味している。

実験の結果、失敗条件の参加者は、内集団成員が失敗するとほかの内集団成員は同じ遺書を選ばない（成功する）と答えるが、自分が失敗するとほかの内集団成員も同じ遺書を選ぶ（失敗する）と答えていた（図 1）。したがって、自尊心に脅威が与えられると自己と内集団成員の合意性は高くなると考えられる。それに対し、成功条件の参加者は、自分が成功するか内集団成員が成功するかにかかわらず、ほかの内集団成員も同じ遺書を選ぶ（成功する）と回答していた。すなわち、自尊心が向上しても内集団成員との合意性は高くはならず、自己脅威状況においてのみ自己と内集団成員の合意性が高くなる。よって、内集団成員との合意性は自己防衛機能をもつと示唆される。

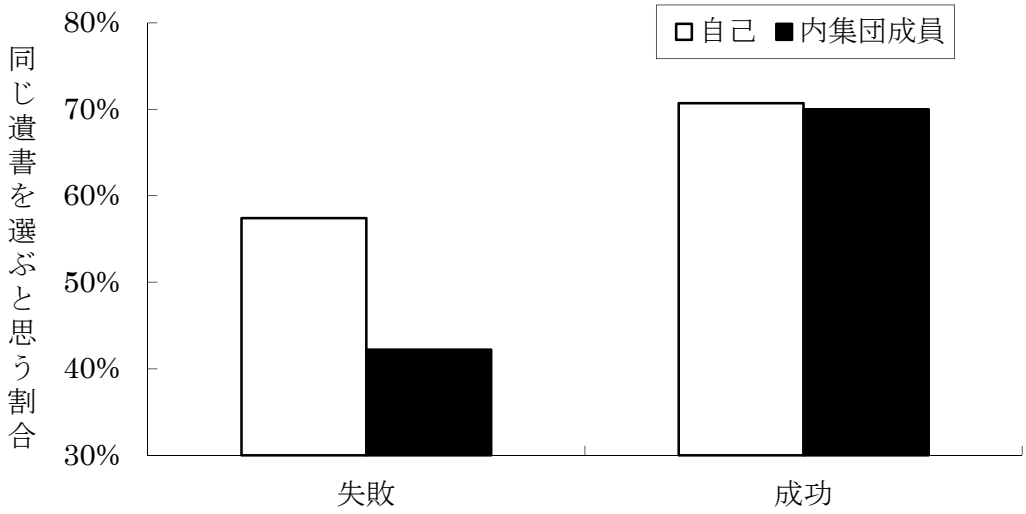


図 1. 課題遂行者×遂行結果の各条件における自己と内集団成員の合意性
（Sherman, Presson, & Chassin（1984; Study1）から作成）

以上の Sherman te al.（1984）らの研究では、自尊心脅威が自己と内集団の連合に与える影響について分析している。その一方、死の顕現性をあつかう存在脅威管理理論（Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986; Terror Management Theory）に関する研究も自己と内集団の連合を通じた自己防衛機能について検証をおこなっている。自尊心脅威と死の顕現性という 2 つの脅威を比較すると、自尊心脅威は自己の評価的感情に対する脅威であるのに対して、死の顕現性は「自分はいつか死んでしまう」という死の不可避性か

ら生まれる存在論的脅威である。また、自己評価維持の動機づけは存在論的脅威を低減しようという動機づけにもとづくことが主張されており（Greenberg et al., 1986）、自尊心脅威と死の顕現性の脅威は別々のものととらえることもできよう。

しかし、両者はどちらも自己の全体的価値に対する脅威として理解することが可能であり、実際に自尊心脅威と死の顕現性は同様の脅威を与えていることが確認されている（Hart, Shaver, & Goldenberg, 2005; Hayes, Schimel, & Williams, 2008; Heine, Proulx, & Vohs, 2006; Routledge, 2012）。また、少なくとも自己と内集団の連合に関して、自尊心脅威と死の顕現性が導く仮説は同一であり、いずれの脅威も自己と内集団の連合を強化させると予測できる。そこで、本論文は自己脅威の操作として自尊心脅威と死の顕現性の 2 つをもちい、それぞれの脅威に対する防衛反応を検証する。その結果、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応について、複数の脅威状況に適用できる一般化可能性の高いモデルを構築することができるであろう。なお、以下では存在脅威管理理論の基本的仮定や自己防衛機能に関する研究について紹介する。

この理論によると、人間はほかの動物と同様に、「死を回避して生存する」という本能的な自己保存欲求をもっている。しかし、人間は自己保存欲求をもつだけではなく、ほかの動物とは異なり、将来の展望や社会的に学習した知識にもとづき「自分はいつか死んでしまう」という死の不可避性を認識している。この認識の結果として、人間には耐えがたい恐怖が生まれる。これはほかの動物にはみられない人間に特徴的なものであり、根本的に解決することが不可能な脅威であると考えられる。そして、死がすべての人間に対して運命づけられている以上、通常の認識能力を持つ人間であれば誰もが死の脅威を経験するであろう。

一方、このようなすべての人間に共通する根源的な脅威に対して、人間はそれに対処する心的システム、すなわち、死の脅威を緩和するための心的機能を保持しているとされる。具体的には、「文化的世界観」と「自尊心」という 2 つの機能である。文化的世界観とは文化内で共有された価値観や信念体系を意味しており、世界に意味や秩序をもたらし、その価値基準を満たすことで個人に直接的・象徴的な不死概念を提供する。たとえば、文化的世界観の一つである宗教は、それを信じる人々に対して「死後の世界」という直接的な不死概念を与えることによって、死の脅威を緩和する役割を果たしている。もう一つの死の脅威の緩和システムである自尊心は、自らが所属する社会のなかでの価値ある一員であるという感覚を意味しており、「価値ある自分」という信念の維持を通じて、死の脅威から自

己を防衛する機能をもつと仮定される。

以上の 2 つの機能によってわれわれは死の脅威に対処しているというのが、存在脅威管理理論の主張である。これらの主張は、死の顕現性仮説（mortality salience hypothesis）と不安緩衝仮説（anxiety-buffer hypothesis）という 2 つの仮説で検証されている。第 1 の死の顕現性仮説は、死の脅威が高まると文化的世界観に依拠した防衛反応や自尊心の獲得反応が生じると予測するものである。この予測を検証した研究では、死の脅威が高まると文化的世界観の価値基準にそった行動が増加することや（Greenberg, Simon, Porteus, Pyszczynski, & Solomon, 1995; Taubman Ben-Ari, Florian, & Mikulincer, 1999）、文化的世界観を支持する人に対して評価が高くなり、批判する人に対して評価が低くなることが示されている（Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Rosenblatt, Veeder, Kirkland, & Lyon, 1990; McGregor, Lieberman, Greenberg, Solomon, Arndt, Simon, & Pyszczynski, 1998）。

第 2 の不安緩衝仮説は、文化的世界観を強固に保持している場合や自尊心が高まっている場合、死の脅威が高まっても防衛反応が生じにくくなると予測するものである。過去の研究では、自尊心が向上した人は自己防衛がすでに果たされているため、死の脅威が高まっても防衛反応が抑制されることが報告されている（Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Pinel, Simon, & Jordan, 1993; Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, Simon, & Pinel, 1992）。

存在脅威管理理論で検証される主要な仮説は以上の 2 つであり、それぞれの仮説を支持する知見が数多く提出されている。なかでも、本論文と特に関連する知見として、死の顕現性は内集団への同一視にも影響をおよぼすことが知られている（Castano, Yzerbyt, Paladino, & Sacchi, 2002; Wisman & Koole, 2003）。たとえば、Castano et al.（2002）は死の脅威が高まると所属する国への同一視が強くなることを示しおり、この研究について次に紹介する。

参加者は全員がイタリア人の学生であり、死の脅威が与えられる条件（Mortality Salient Condition; 以下では MS 条件と略す）、もしくは統制条件のどちらかに割り当てられる。MS 条件では死の脅威を喚起させるために、死に関する一連の質問に回答させる。一方、統制条件では死とは無関連な読書に関する質問に回答させる。つづけて、いずれの条件の参加者もイタリアへの同一視の程度を答えた。その結果、死について回答した MS 条件の参加者は統制条件よりも、イタリアへの同一視が強くなることが明らかになった。よって、死の脅威が与えられると、集団同一視が強くなると示唆される。Castano et al.（2002）ら

の知見をふまえると、自己と内集団の連合は自尊心脅威だけでなく、死の脅威の低減にも寄与すると考えられよう。

2-2. 自己脅威に対する防衛方略

以上述べたように、これまでの研究は合意性や集団同一視を手がかりとして、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応を検証してきた。ただし、自己防衛反応には自己と内集団の連合を通じたものだけではなく、さまざまな方略が存在している。そこで、これからは自己と内集団の連合以外の方略をもちいた自己防衛反応について概観し、それらの自己防衛反応の生起を規定する要因についてレビューをおこなう。

自己脅威への防衛方略として、まず、脅威そのものに対する解釈や認知を変化させることが挙げられる。このような脅威となる情報自体に対する認知的・行動的な防衛方略を直接的自己防衛と定義する。たとえば、「テストの課題成績が悪い」というフィードバックが与えられた人はそうでない人よりも、そのテストの重要性や価値を低く判断する（Campbell, Sedikides, Reeder, & Elliot, 2000）。そのうえ、課題遂行に失敗した参加者は成功した参加者とくらべて、その課題がつまらないものであり、自分の能力を正確に反映していないとみなしやすい（Kay, Jimenez, & Jost, 2002）。さらに、知能テストに関する否定的なフィードバックを受けると、テストを批判する情報をより好む（Frey, 1981）。くわえて、自己脅威状況では、原因帰属における自己奉仕的バイアスが促進されることがわかっている（Campbell & Sedikides, 1999）。つまり、自己脅威を受けると、失敗した原因を自分の能力や努力などの内的要因でなく、課題の難しさや運といった外的要因に帰属しやすくなる。

同様に、直接的自己防衛の方略として、ある課題で否定的なフィードバックを受けると、その課題をより昔のことであると感じやすい（Sanna, Chang, & Carter, 2004）。これは、否定的な出来事を忘れ、肯定的な出来事を長く記憶することで、自尊心を維持しているからであると解釈できる。ただし、同じ否定的情報であっても、そのフィードバックが自分にとって改善可能なものであれば、出来事を覚えている確率が高くなる（Green, Pinter, & Sedikides, 2005）。反対に、否定的情報が自分にとって改善不可能なときは、脅威から注意をそらすことで自尊心の低下を防いでいると示唆される。以上のように、課題遂行について否定的フィードバックが与えられると、課題そのものや課題成績に対する認知や記憶プロセスを変化させることで、自己脅威が与える否定的な効果を軽減しているのである。

上記のような直接的自己防衛ではなく、脅威以外の領域における認知的・行動的な防衛方略も存在する。本論文はこの方略を間接的自己防衛と定義する。間接的自己防衛は、「親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加」という 3 つの方略に大きく分類することができる。第 1 に、親和性を通じた間接的自己防衛として、自己と内集団の連合をもちいた防衛方略が挙げられる。これは本論文の考えと一致しており、自己脅威状況で自己と内集団の連合を強めることで、脅威による否定的影響を緩和できると示唆される。なお、これらの自己と内集団の連合を通じた防衛反応は、先行研究でも確認されている。具体的には、自己が脅威にさらされると、自己と内集団成員の合意性が高くなる（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。さらに、自己脅威を受けると、内集団に対する同一視が強くなる（Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; Wisman & Koole, 2003）。このほか、自己への脅威を受けると、内集団成員に対する評価が肯定的になることが示されている（Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon, 1996; Hogg & Sunderland, 1991）。以上のように、自己と内集団成員の合意性や内集団同一視、肯定的評価など、親和性の増加は脅威に対して自己を防衛していると示唆される。

第 2 に、自己脅威を受けると親和性が増加するだけではなく、攻撃性が増加することもある。たとえば、「テストで失敗した」というフィードバックを受けると、他者への評価が否定的になる（Beauregard & Dunning, 1998）。また、自分が書いたエッセイについて否定的フィードバックを受けると、他者に聞かせる雑音の音量を大きく設定するようになる（DeWall, Baumeister, Stillman, & Gailliot, 2007）。一方で、ステレオタイプや偏見という観点からは、知能テストで失敗フィードバックを受けると、外集団成員に対する否定的なステレオタイプが増加してしまう（Fein & Spencer, 1997）。さらに、自己脅威状況におけるステレオタイプ的判断の促進は、認知的に負荷がかかっていても生じることが示唆されている（Spencer, Fein, Wolfe, Fong, & Dunn, 1998）。したがって、攻撃性が増加することも、親和性の増加と同様に自己脅威の効果を低減できると考えられる。

第 3 に、間接的自己防衛方略として、親和性・攻撃性の増加にくわえて、社会的関係や他者との相互作用を避ける回避傾向が増加することがある。その例として、自分にとって重要な領域において自分より他者が優れている場合は、その人を友達として選択せず、心理的な距離を置きやすい（Tesser, Campbell, & Smith, 1984）。くわえて、自尊心が低い人はパートナーとの確執や自分の軽率な行動を回想すると、パートナーとの心理的距離を置くようになる（Murray, Holmes, MacDonald, & Ellsworth, 1998; Park & Maner, 2009）。

以上のことから、他者との関係性を避けることも自己防衛機能をもつと示唆される。

これまでの研究知見を概観すると、自己脅威状況における防衛反応には、直接的自己防衛と 3 種類の間接的自己防衛（親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加）が存在している。これらの自己防衛方略について要約したものを次に記載する（表 1）。それぞれの間接的な自己防衛方略は相互に代替可能であり、自己脅威状況では、いずれかの自己防衛反応が生じると仮定される（Sherman & Cohen, 2006; Tesser, 2000）。さらに、ある特定の自己防衛反応が生じると、別の種類の自己防衛反応は生じなくなる（Fein & Spencer, 1997; Hart et al., 2005; McGregor et al., 1998; Tesser & Cornell, 1991）。これは、一つの防衛方略を通じて脅威による効果を低減すると、それ以外の防衛反応は必要でなくなると想定されるためである。

表 1　自己防衛反応の分類

1.	直接的自己防衛
	a.　（脅威となる）課題の重要性や価値を低く判断する
	b.　課題の面白さや妥当性を低く判断する
	c.　課題を批判する情報を好む
	d.　失敗した課題遂行の原因を外的要因に求める
	e.　失敗した課題との時間的距離を長く推定する
2.	間接的自己防衛：親和性の増加
	a.　自己と内集団成員の合意性が高くなる
	b.　内集団に対する同一視が強くなる
	c.　内集団成員に対する評価が肯定的になる
3.	間接的自己防衛：攻撃性の増加
	a.　他者に対する評価が否定的になる
	b.　他者への攻撃行動が促進される
	c.　外集団へのステレオタイプが促進する
4.	間接的自己防衛：回避傾向の増加
	a.　自分より優れた人物との心理的距離を置く
	b.　パートナーとの心理的距離を置く

2-3. 社会的排斥に対する防衛方略

本論文は自己脅威に対する防衛方略を検討しており、社会的排斥に対する防衛方略はあつかってはいない。これは、本論文が「集団とは離れた文脈で脅威にさらされたときに、身近にいる内集団との連合を戦略的に強めるか」という点に焦点をあてているからである。しかし、社会的排斥の脅威も所属欲求や自尊心欲求という人間の基本的欲求に対して脅威を与えており、それに対する防衛方略は存在する（Smart Richman & Leary, 2009; Williams, 2007, 2009）。そこで、以下では社会的排斥に対する防衛方略についてレビューをおこない、表 1 で提示した自己防衛反応の分類について、その妥当性を確認する。

社会的排斥に対する多様な防衛方略を概観すると、自己脅威に対する防衛方略と同様に、直接的自己防衛と間接的自己防衛（親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加）に分類できることが示唆される。まず、直接的自己防衛として、集団から排斥されると、排斥した人に対して否定的にふるまうことがある（Bourgeois & Leary, 2001; MacDonald & Leary, 2005）。例として、Bourgeois & Leary（2001）は集団成員が選ばれる際の教示を通じて、社会的排斥を実験的に操作している。具体的には、排斥条件では「集団の代表が参加者を一番最後に選んだ」と告げるが、統制（受容）条件では「集団の代表が参加者を一番最初に選んだ」と告げる。その結果、排斥条件の参加者は、成員を選ぶ立場にあった集団の代表を好ましくないと評定することが示されている。このように、集団からの排斥そのものの妥当性を否定することで、社会的排斥による影響を低減できるのである。

次に、親和性の増加を通じた間接的自己防衛として、社会的排斥を受けると、ほかの集団との連合を強化しようと動機づけられることが報告されている。人は同時に複数の集団に所属しており、ある集団から排斥された場合でも、ほかの集団との連合を強めることができる。このように新たな集団との連合を強めることで所属欲求をふたたび満たし、社会的排斥がもたらす脅威を低減することができるであろう。たとえば、ある集団から排斥されると、排斥した当事者との関係を維持しようとはしないが、新たな対人関係を構築しようと動機づけられることが示されている（Maner, De Wall, Baumeister, & Schaller, 2000）。

また、コンピュータのキャッチボール課題で排斥を受けると、別の内集団成員に対して模倣行動が増加する（Lakin, Chartrand, & Arkin, 2008）。さらに、孤独感を喚起されると、ほかの人との関連を強めるだけでなく、人間でない物や動物を人のように知覚することで、

代替的につながりの感覚を維持することが示唆されている（Epley, Akalis, Waytz, & Cacioppo, 2008; Gardner, Pickett, & Knowles, 2005）。以上のように、集団から排斥されると新たな集団との連合を再構築する、もしくは、代替方略をもちいて他者とのつながりを回復しようという行動が生じやすくなる。

その一方で、社会的排斥は心理的連合の再構築という親和的な行動だけではなく、攻撃的な行動を促進することが示されている。たとえば、集団での相互作用で誰からも選ばれなかったと告げられると、その集団とは別の人物に聞かせる雑音が大きくなる（Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke, 2001）。このほか、辛口ソースパラダイムをもちいて社会的排斥と攻撃行動の関連を調べた研究もある。このパラダイムでは、「辛いものが嫌いと分かっているパートナーのチップスに、サルサ（辛口）ソースをどの程度入れるか」が攻撃行動の指標となる。実験の結果、集団から排斥された参加者はほかの条件の参加者とくらべて、パートナーにより多くのサルサソースを与えていた（Warburton, Williams, & Cairns, 2006）。このように、社会的排斥を受けたあとに攻撃的な行動をとることにより、排斥条件の参加者は自己を防衛していたと解釈できる。

最後に、社会的排斥を受けると、親和性や攻撃性が増加するだけではなく、社会的関係や相互作用を避けるなど、回避傾向が増加することもわかっている（Predmore & Williams, 1983; Williams et al., 2000）。以上の知見を要約すると、社会的排斥に対する防衛方略には自己脅威に対する防衛方略と同様に、直接的自己防衛と 3 つの間接的自己防衛（親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加）が存在することが指摘できる。したがって、社会的排斥に関する防衛方略の知見は、本論文が提示した自己防衛反応の分類の妥当性を示しているといえよう。

2-4. 自己防衛方略の生起条件

これまでの議論において、自己防衛方略には直接的自己防衛と 3 つの間接的自己防衛（親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加）があることを示してきた。それでは、どのような人がどの自己防衛方略を使用しているのであろうか。当然ながら、脅威に対して自己防衛以外の方略がとられることもある。具体的には、脅威となる情報や失敗を受け入れ、態度や行動の変化が起こる場合もある（Green et al., 2005; Nussbaum & Dweck, 2008）。このような対処方略は自己向上（self-improvement）とよばれる。自己向上は自己防衛と

は異なり、望ましい態度や行動変化を通じて、脅威に順応するための方略である。しかし、自己向上がそもそも不可能な場合や脅威が自分にとって重要な領域では、自己向上よりも自己防衛の方略がとられやすい。

たとえば、Nussbaum & Dweck（2008）は、知能テストで失敗フィードバックを与えられた場合、「知能が変化するものである」という文章を読んだ参加者は優れた他者との上方比較をおこなうが、「知能が遺伝的・環境的に決定されている」という文章を読んだ参加者は劣った他者との下方比較をおこなうことを示している。したがって、自己脅威が自分にとって対処可能なものであれば自己向上を選択するが、対処できない場合は自己防衛をすると考えられる。

ただし、自己向上や自己防衛方略の選択は、文化に応じて変化するかもしれない。その例として、「個人主義-集団主義」という次元や文化的自己観のモデルにもとづくと、日本をふくむ東アジアでは自分の望ましくない側面を発見し修正しようとする自己批判の傾向が強いため（Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; 北山, 1988）、自己向上の方略が使用されやすい可能性がある。一方、「自己評価を維持しよう」という目標が東アジアでは強調されていないため、脅威を受けても自己評価を保持するための自己防衛反応が弱くなるかもしれない。しかし、これまでの研究では、中国などの東アジアでは欧米と少なくとも同じ程度に自己防衛反応が生じることが指摘されている（Hepper, Gramzow, & Sedikides, 2010; Hepper, Sedikides, & Cai, 2013）。さらに、東アジアでは自己と内集団の関係性や調和の維持が強調されていることをふまえると、内集団との連合を通じた防衛方略はそのほかの防衛方略よりも優先して生じやすくなると示唆される。したがって、内集団との心理的連合を通じた自己防衛方略は、日本人を対象とした本論文にも適用できると考えられよう。

次に、自己防衛反応が生じる場合、自尊心の高さや愛着スタイルという個人特性が「どの方略を使用するか」という生起条件を規定することがわかっている。なお、本論文では自尊心の高さや愛着スタイルといった個人差の影響は実験で検討しないが、以下では自己防衛反応を規定する個人差の影響について簡潔に紹介する。まず、自尊心が高い人は低い人とくらべて、直接的な自己防衛が生じやすい（Blaine & Crocker, 1993; Shrauger & Lund, 1975）、親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい（Murray et al., 1998; Park & Maner, 2009）、攻撃性を通じた間接的自己防衛が生じやすい（Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Beauregard & Dunning, 1998）、回避傾向を通じた間接的自己防衛が生じにくい（Murray

et al., 1998)、ということがそれぞれ明らかになっている。

反対に、自尊心が低い人は直接的自己防衛や親和性や攻撃性の増加を通じた間接的自己防衛が生起しにくく、回避傾向を通じた間接的自己防衛が生起する傾向がある。たとえば、Park & Maner（2009）は、自己が脅威にさらされると、自尊心が高い人は所属欲求が強くなるが、自尊心が低い人は所属欲求が弱くなることを示している。同様に、自尊心が高い人はパートナーとの確執や自分の軽率な行動を回想すると、自分とパートナーの関係性を強く認識するが、自尊心が低い人はそのような脅威状況において、パートナーとの関係性を弱く認識する（Murray et al., 1998）。

上記のように、回避傾向の増加をのぞいて、直接的自己防衛や間接的自己防衛は自尊心が高い人において強くなると予測される。ただし、これらの効果は顕在的自尊心が高く、かつ、潜在的自尊心が低い人に限定されることが示唆されている。Jordan らによると、顕在的自尊心が高くても、潜在的自尊心も高い人は防衛的な反応を示さない。反対に、顕在的自尊心と潜在的自尊心が一致しておらず、両面的な態度をもつ人は防衛的な反応が特に強くなる（Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003）。たとえば、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い参加者は、課題遂行について否定的フィードバックを受けると外集団に対する行動が敵対的になるなど（Jordan, Spencer, & Zanna, 2005）、顕在的・潜在的自尊心の組み合わせが防衛反応の強さを規定することがわかっている。

このほか、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人は、不確実性に関する脅威を受けると自己概念や自身の態度を確証しようと動機づけられる（McGregor & Marigold, 2003）。さらに、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人は、課題遂行に失敗したときに自己と他者の合意性を高く推定することが確認されている（McGregor, Nail, Marigold, & Kang, 2005）。合意性の高まりは親和性の増加と対応しているため、自尊心が高い人、なかでも顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人は、親和性の増加を通じた間接的自己防衛方略が生起しやすいと考えられる。つまり、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人は、脅威状況では自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が強くなるであろう。くわえて、抑うつ傾向の高い人は脅威状況でも内集団成員との合意性が高まりにくく、親和性を通じた間接的自己防衛は生じにくいと示唆される（Agostinelli, Sherman, Presson, & Chassin, 1992; Pinkley, Laprelle, Pyszczynski, & Greeenberg, 1988）。

自己防衛反応の生起には、特性的な自尊心や抑うつ傾向だけでなく、愛着スタイルも関連していることが指摘されている（Park, 2010）。愛着スタイルとは幼少期の経験に応じた

他者への行動パターンを意味しており、「安定型」、「回避型」、「アンビバレント型」の 3 種類が存在すると仮定されている。安定型の人は他者に対する信頼度が高く、恋愛においてパートナーと親密な関係を築きやすい。一方で、回避型の人は他者に対する信頼度が低く、恋愛においてパートナーと親密な関係を築くことが相対的に困難になる。また、アンビバレント型の人は他者について両面的な感情をもっており、恋愛において葛藤が生じやすい。

以上の枠組みにもとづき、安定型の女性は不安が増加してもパートナーからの情緒的サポートを求めるが、回避型の女性はパートナーとの心理的距離を置くことが示されている（Simpson, Rholes, & Nelligan, 1992）。さらに、安定型の男性はパートナーの女性の不安が増加すると情緒的サポートを提供するが、回避型の男性は情緒的サポートを控えるようになる。この知見にもとづくと、安定型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすいことになる。それに対し、回避型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じにくく、回避傾向を通じた間接的自己防衛が生じやすいと思われる。

しかし一方で、これとは異なる見解も存在する。たとえば、Mikulincer らの研究では、安定型の人ではなく、アンビバレント型の人において親和性を通じた間接的自己防衛が生起していた（Mikulincer, Orbach, & Iavnieli, 1998）。すなわち、アンビバレント型の愛着スタイルをもつ人は、ネガティブな感情が喚起されると自己と他者の類似性を高く推定することが示されている。それに対して、回避型の愛着スタイルをもつ人は、ネガティブな感情が喚起されても自己と他者の類似性が高くはならない。つまり、回避型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じにくいと考えられよう。

ただし、同じ回避型の愛着スタイルをもつ人でも、そのなかで「拒絶型」に分類される人は親和性にもとづく間接的自己防衛を示すとする研究もある（McGregor et al., 2005）。拒絶型の人は他者からの回避傾向が強いものの、関係性への不安が低い人を意味している。McGregor らはこの拒絶型の人が自己脅威状況において他者との合意性を高く推定することを実証している。このように、自己防衛反応に対する愛着スタイルの調整効果を検討した研究では、そこで使用されている愛着スタイルの分類がかならずしも一貫しておらず、研究間で異なる見解が提出されている。以上、過去の研究で示された自己防衛方略の生起条件を要約すると、表 2 の通りとなる。

表 2　自己防衛反応の生起条件

1.	自尊心が高い人
	a.　直接的自己防衛が生じやすい
	b.　親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	c.　攻撃性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	d.　回避傾向を通じた間接的自己防衛が生じにくい
2.	顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人
	a.　直接的自己防衛が生じやすい
	b.　親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	c.　攻撃性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
3.	抑うつ傾向が高い人
	a.　親和性を通じた間接的自己防衛が生じにくい
4.	愛着スタイル
	a.　安定型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	b.　回避型の人は回避傾向を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	c.　回避型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じにくい
	d.　アンビバレント型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい
	e.　拒絶型の人は親和性を通じた間接的自己防衛が生じやすい

これまでの議論では、「どのような人がどの自己防衛方略を使用するか」という生起条件について概観した。一方で、本論文であつかう親和性を通じた自己防衛方略に限定しても、「どのような人が親和性を通じた自己防衛方略を使用するか」という個人差の影響があることが確認されている。まず、先述したように、自尊心が高い人や顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人、安定型の人、アンビバレント型の人、拒絶型の人は親和性を通じた自己防衛方略が生起しやすい（Jordan et al., 2003; McGregor et al., 2005; Mikulincer et al., 1998; Murray et al., 1998; Park & Maner, 2009; Simpson et al., 1992）。それに対し、抑うつ傾向が高い人や回避型の人は親和性を通じた間接的自己防衛を使用しにくいことが示唆されている（Agostinelli et al., 1992; Mikulincer et al., 1998; Pinkley et al., 1988;

Simpson et al., 1992)。

以上の先行研究のなかには、合意性や類似性をもちいた研究も含まれる。具体的には、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人やアンビバレント型の人、拒絶型の人は自己脅威を受けると自己と他者の合意性（もしくは類似性）を高く推定する傾向がある（McGregor et al., 2005; Mikulincer et al., 1998）。それに対して、抑うつ傾向の強い人や回避型の人は自尊心に脅威が与えられても自己と内集団成員の合意性（もしくは自己と他者の類似性）が高まりにくい（Agostinelli et al., 1992; Mikulincer et al., 1998; Pinkley et al., 1988）。これらの研究知見をふまえると、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応の強さには、特性的な自尊心や抑うつ傾向、愛着スタイルが影響すると推測される。

その一方、本論文はこれらの個人差の影響を検討の対象外とし、特性的な個人差変数を統制しなくても、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は生起すると仮説を立てる。その理由は次の通りである。まず、先行研究では個人差が自己防衛反応を規定することを指摘しているが、多くの研究は自己防衛反応が弱くなることを示しており、自己防衛反応自体が消失しているわけではない。たとえば、抑うつ傾向の強い人は自己防衛反応が生起しにくいが、それでも自己脅威を受ける前と比較すると自己と内集団成員の合意性は高くなる（Agostinelli et al., 1992）。つまり、自己防衛反応の強さは個人差によって規定されるものの、自己防衛反応自体は生起することが示唆される。

他方で、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応そのものが生起していない研究結果も存在する（e.g., Pinkley et al., 1988）。しかし、これらの研究では事前調査で抑うつ傾向や回避傾向の強い人をあらかじめ選別しており、サンプル全体から考慮するとこうした基準に該当する人の比率は高くはない。よって、本論文では個人差を事前に測定しなくても、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が生起すると予測される。実際に、自尊心や抑うつ傾向、愛着スタイルなどの個人差を考慮しなくても、自己脅威を受けると自己と内集団の合意性が高くなることが実証されている（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。そのため、本論文では個人差の影響を除外しても、大きな問題はないと考えられる。

理論編第 3 部 本論文の貢献

3-1. 自己防衛反応の潜在性

理論編第 2 部で述べたように、これまでの研究は合意性や集団同一視を手がかりとして、自己と内集団の連合が自己防衛機能をもつことを議論してきた（Alicke & Largo, 1995; Agostinelli et al., 1992; Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; McGregor & Marigold, 2003; McGregor et al., 2005; Pinkley et al., 1988; Sherman et al., 1984; Wisman & Koole, 2003）。しかし、先行研究では自己防衛機能に関する心的プロセスのモデル化や、重要な関連要因の効果の検討がおこなわれていない。この点について、具体的には次のような問題が挙げられる。

1. 顕在的プロセスのみに焦点をあてている
2. 自己防衛反応の規定要因の検討が不十分である
3. 自己防衛反応による肯定的影響を示していない

上記の問題をふまえ、本論文は自己と内集団の連合をもちいた自己防衛反応について、より包括的なモデルを構築することを目的とする。以降の理論編第 3 部では、それぞれの問題点やそれに対する本論文の貢献について記述する。

第 1 に、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応に関する研究は、顕在的プロセスのみを検討対象としてきた。しかし、一方で、内集団との連合を通じた自己防衛反応が潜在的に生じるかどうかは明らかにされてはいない。それに対し、本論文は顕在指標と潜在指標を比較検討することで、自己防衛反応における顕在的プロセスと潜在的プロセスの関連やそれぞれの生起条件について分析をおこなう。自己と内集団の連合をもちいた自己防衛反応の指標として、本論文は類似性と概念連合の 2 つを使用しており、類似性は顕在指標、概念連合は潜在指標と位置づけられる。

顕在指標と潜在指標は相互に関連しているものの、異なる 2 つのプロセスを反映していると考えられる（Banaji, 2001; Dovidio, Kawakami, Johnson, Johnson, & Howard, 1997）。社会心理学の領域では、人間の心理的プロセスには 2 種類の処理様式があることが指摘されており（Banaji & Heiphetz, 2010; Chaiken & Trope 1999）、一つは顕在的（explicit）・意識的（conscious）・意図的（intended）・統制的（controlled）・自覚的（aware）・熟慮的

（deliberate）なプロセス、もう一つは潜在的（implicit）・非意識的（unconscious）・非意図的（unintended）・自動的（automatic）・非自覚的（unaware）・非熟慮的（mindless）なプロセスとよばれる。顕在指標は前者、潜在指標は後者のプロセスを反映している。

Greenwald & Banaji（1995）によると、潜在的態度は、「内省的に識別できない（もしくは正確には識別できない）過去の経験の痕跡で、社会的対象への好意的・非好意的な感情・思考・行動のもととなるもの」であると定義される。同様に、Bargh は自動的プロセスの特徴として、非意識的（行動生起に意識的に関与していない、もしくは行動の原因に気づいていない）、非意図的（行動を意図して生起してはいない）、統制不可能（行動を中止したり変更できない）、効率的（認知的努力や注意資源を必要としていない）、という 4 つを挙げている（Bargh, 1989, 1994）。以上の用語や定義は区別せずに使用されることもあるが、本論文は用語として「顕在的」（explicit）と「潜在的」（implicit）、定義として顕在的プロセスを「相対的に意識的・統制できる心理過程」、潜在的プロセスを「相対的に非意識的・統制できない心理過程」と定め、論文中で使用する。

潜在的プロセスを測定する方法には、さまざまな種類が存在する。代表的なものとして、評価的プライミング（Fazio et al., 1995; Fazio, Sanbonmatsu, Powell, & Kardes, 1986）や感情ストループ課題（Pratto & John, 1991）、IAT（Greenwald et al., 1998; Greenwald et al., 2003）、Go/No-go Association Task（GNAT; Nosek & Banaji, 2001）、Extrinsic Affective Simon Task（EAST; De Houwer, 2003）、Affect Misattribution Procedure（AMP; Payne, Cheng, Govorun, & Stewart, 2005）、Evaluative Movement Assessment（EMA; Brendl, Markman, & Messner, 2005）、などが挙げられる。多くの場合、複数のターゲット判断における参加者の反応時間を分析することで、特定の概念間の非意識的な連合の強さを推定することが可能になる。

自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、顕在的だけでなく潜在的にも生じるのであろうか。まず、自己と内集団の連合に関する心理的プロセスには非意識的な側面があり、自己と内集団成員の概念連合は強い一方で、自己と外集団成員の概念連合は弱い傾向がある（Cadinu, & De Amicis, 1999; Coats et al., 2000; Otten, 2002a, 2002b; Otten & Epstude, 2006; Smith, 2002; Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996）。さらに、自己と内集団および自己と外集団の間で連合の強さを直接比較すると、自己と内集団の概念連合は自己と外集団の概念連合よりも強いことが示されている（Devos & Banaji, 2003, 2005; Farnham et al., 1999; Greenwald & Farnham, 2000; Nosek et al., 2002）。

以上のように、自己と内集団の連合には非意識的な側面がある。それにくわえて、自己防衛反応は参加者の自覚をともなわず、迅速に生じることが示されている（De Hart, Pelham, & Murray, 2004; Dodgson & Wood, 1998; Mikulincer, Gillath, & Shaver, 2002; Tesser, 2000）。たとえば、Dodgson & Wood（1998）では、自尊心の高い人が「テストの成績が低い」というフィードバックを受けると、自分の長所に対する判断の反応時間が短所に対する判断の反応時間よりも短くなっていた。すなわち、自己脅威を受けると、非意識的に自己の肯定的な側面に注目し、自己の否定的な概念の活性を抑制する傾向がある。この知見にもとづくと、自尊心の高い人は自己脅威状況において、「自己の否定的な側面から非意識的に目を背ける」という潜在的な方略で自己を防衛していると解釈できる。一方、自尊心の低い人は失敗フィードバックを受けると、自分の短所に対する反応時間が長所に対する判断の反応時間よりも相対的に短くなっていた。したがって、自尊心の低い人が脅威にさらされると、自己の肯定的側面ではなく、否定的側面に関する概念が活性化していたと考えられる。

また、Mikulincer らは、「失敗」（failure）などの脅威に関連した単語プライムを閾下で呈示すると、自分が愛着をもった人の概念表象が活性化することを示している（Mikulincer et al., 2002）。くわえて、自己防衛プロセスは意識の外で生じている場合が多く、「自分の反応は自己脅威の効果を低減するためにおこなっている」ということに参加者は概して気づいていない（Sherman & Cohen, 2006; Tesser, 2000）。そのうえ、自身の反応が脅威の低減に関与することを参加者に明示的に告げると、自己防衛反応は低減する（Sherman, Cohen, Nelson, Bastardi, Nussbaum, & Ross, 2009）。

また、自尊心に関する研究では、潜在的レベルにおける自尊心が自己への脅威を低減することが明らかになっている（Dijksterhuis, 2004; Greenwald & Farnham 2000; Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007; Schmeichel, Gailliot, Filardo, McGregor, Gitter, & Baumeister, 2009）。その例として、潜在的自尊心が低い人は、困難な課題を通じて自己脅威を受けると、課題の重要性や成績の予測を低く判断していた（Greenwald & Farnham 2000）。しかし、潜在的自尊心が高い人は、困難な課題を受けても課題の重要性や成績予測が低下していなかった。これらの結果から、潜在的自尊心は脅威に対する緩衝装置として働いており、潜在的自尊心の高い人は自己が脅威にさられても防衛する必要性が低いと考えられる。さらに、潜在的自尊心を実験的に操作した研究は、自己脅威を受けると気分や後続の課題遂行が低下するが、評価的条件づけを通じて潜在的自尊心を高めると自己脅威による効果が消

失することを示している（Dijksterhuis, 2004）。

これまでに、自己と内集団の連合には潜在的な側面があること、および、自己防衛反応は参加者の自覚をともなわず迅速に生じており、実際に潜在的自尊心が自己脅威を低減することを示してきた。以上の議論から、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は潜在的に生じると仮定できるであろう。この仮定について検証するため、本論文は自己脅威が自己と内集団の概念連合に与える影響を検証する。実験仮説として、自己が脅威にさらされると、自己と内集団の概念連合は強くなると予測される。

それでは、質問項目などの従来の顕在的プロセスだけでなく、これらの潜在的プロセスを検討することにはどのような意義があるであろうか。まず、自己報告法による顕在的な質問項目では、参加者が実験者の意図や目的を推測して、そのために行動が変化したり（要求特性）、参加者が実験者に評価されていると感じ、そのために行動が変わってしまうことがある（評価懸念）。特に態度表明が社会的に問題のある場合は、他者に対して望ましい自己イメージを呈示するために、反応を統制する可能性が高い（Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995）。さらに、他者に対する自己イメージの統制だけでなく、自身のもつ態度が不適切であるという理由から、反応を統制することもありうる（Nosek, 2005, 2007）。これらの参加者の反応バイアスを抑制するためには、潜在指標をもちいることが求められる。

実際に、人種やステレオタイプなどの領域では、顕在的測定法と比較して潜在的測定法にもとづく指標得点のほうが現実の行動との相関が高いことが示されている（Greenwald, Poehlman, Uhlmann, & Banaji 2009）。本論文であつかう自己と内集団の連合は人種やステレオタイプの問題ほど、意図的な反応統制の動機づけは強くはないであろう。しかし、自己と内集団の連合に対する自己回答をゆがめる可能性は十分に指摘できる。たとえば、社会的に望ましくない集団に対して、「所属意識が強い」と他者に明示的には答えないであろう。また、内集団が自分にとって重要であっても、その内集団の規模が大きい場合は、自己と内集団の心理的連合の強さに気づいていないこともありうる（Coats et al., 2000）。よって、潜在的測定法は反応バイアスを抑制し、内省がおよばない自己と内集団の連合の強さを測定するために有用であると思われる。

ただし、一方で、上記の潜在的測定法にも複数の問題点が指摘されている。例として、潜在指標の得点では絶対的な基準点が定まらず（Blanton & Jaccard, 2006）、異なる潜在的測定法にもとづいて算出した得点の間には相関がほとんど認められていない（Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000; Cunningham, Preacher, & Banaji, 2001）。また、潜在的測

定法による得点は文化内で学習された連合や顕現性の強さとも解釈することができる（Karpinski & Hilton, 2001; Rothermund & Wentura, 2004）。しかし、指標間の相関の低さにもかかわらず、異なる測定法をもちいて共通の知見が再現されている（Baccus, Baldwin, & Packer, 2004）。さらに、神経科学的アプローチを使用した研究では、潜在指標による得点は脳の神経活動パターンと相関していることが報告されている（Phelps, O'Connor, Cunningham, Funayama, Gatenby, Gore, & Banaji, 2000）。そのうえ、人種やステレオタイプの領域では潜在指標の得点と実際の行動との関連が強いことをふまえると（Greenwald et al., 2009）、潜在的測定法は一定の妥当性をもっていると結論づけることができるであろう。そこで、本論文は顕在指標と潜在指標の両面から検討することによって、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応をより包括的に理解することを目指す。

3-2. 集団地位に応じた自己防衛反応

先行研究の第 2 の問題は、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応の規定要因の検討が不十分であることである。これまでの研究は、内集団との連合を通じた自己防衛反応は自尊心（Baumeister et al., 1996; Beauregard & Dunning, 1998; Blaine & Crocker, 1993; Jordan et al., 2003; Jordan et al., 2005; McGregor & Marigold, 2003; McGregor et al., 2005; Murray et al., 1998; Park & Maner, 2009; Shrauger & Lund, 1975）や抑うつ傾向（Agostinelli et al., 1992; Pinkley et al., 1988）、愛着スタイル（McGregor et al., 2005; Mikulincer et al., 1998; Park, 2010; Simpson et al., 1992）という要因によって規定されることがわかっている。たとえば、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人は、脅威を受けると他者との合意性を高く推定する傾向がある（McGregor et al., 2005）。それに対し、本論文は集団地位という関連要因を取りあげ、内集団の地位の高さに応じた顕在的・潜在的な防衛反応について検討をする。

集団地位とは、「ある価値にそって決められる集団の序列関係」を意味している。集団地位は内集団との連合を通じた自己防衛反応においてどのような役割を果たすのであろうか。先行研究によると、自己と内集団の連合は所属欲求を満たすだけでなく、「自尊心を向上する」という人間の基本的な欲求も充足している（Castano & Deschesne, 2005; Correll & Park, 2005; Williams, 2007, 2009）。つまり、脅威状況において内集団との連合を強めると、集団所属と自尊心向上の 2 つの欲求を満たし、個人の精神状態を維持することができるの

である。この知見をふまえると、自己が脅威にさらされると、自尊心を向上させる効果が小さい内集団に対して自己防衛反応は弱くなると予測される。なぜなら、自尊心を向上させる効果がなければ精神状態の維持に失敗し、自己脅威が個人の精神状態に与える否定的影響を緩和できない可能性があるためである。集団地位はこのような「自尊心を向上させる効果の大きさ」を反映しているために、本論文の自己防衛モデルにおいて検討する必要性は高いと思われる。

以下では集団地位と自己防衛反応の関連について述べるが、その前に集団地位に関する代表的な先行研究について概説する。集団間（内）関係の分野において、集団地位は社会的判断や行動の大きな規定因となることが指摘されている（Ellemers & Barreto, 2001）。たとえば、集団地位の高低は集団間バイアスに影響を与えており、高地位集団の成員は低地位集団の成員よりも、集団間バイアスが強くなりやすい（Bettencourt, Dorr, Charlton, & Hume, 2001; Mullen, Brown, & Smith, 1992; Sachdev & Bourhis, 1987; Turner & Brown, 1978）。高地位の集団成員は集団間バイアスを通じてほかの集団成員と比較した優越性を確保し、肯定的な社会的アイデンティティを維持することで、自尊心を向上させることができると考えられる。

集団間バイアスの研究では、高地位の集団成員は特に地位と関連した領域において、内集団に対して肯定的にふるまい、同時に、外集団に対して否定的にふるまうことが示されている。また、このような集団間バイアスは集団間の透過性（移動のしやすさ）が低く、地位の差が正当な理由であるときに強くなる傾向がある（Bettencourt & Bartholow, 1998; Sachdev & Bourhis, 1991）。反対に、低地位の集団成員は地位とは無関連な領域において、内集団に対する肯定的な集団間バイアスが生起し、このバイアスは地位の差が正当な理由でないときに強化される（Ellemers, Wilke, & Van Knippenberg, 1993; Reichl, 1997）。ただし、低地位の集団成員は内集団を好ましく評価するだけではなく、場合によっては外集団を内集団よりも好ましく評価することもある。これらの外集団に対する肯定的なバイアスは、地位に関連した領域において生じやすいことが指摘されている（Mlicki & Ellemers, 1996; Sachdev & Bourhis, 1987）。

このように、集団地位は集団間バイアスに影響をおよぼすことが明らかになっている。それでは、集団地位は自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応にどのような影響を与えるのであろうか。これまでの研究は、内集団の地位が高いほど自尊心が向上することを示している（Crocker, Major, & Steele, 1998; Ellemers & Barreto, 2001; Ellemers, Van

Knippenberg, De Vries, & Wilke, 1988; Sachdev & Bourhis, 1987)。したがって、集団地位が高いほど自尊心を向上させる効果が大きく、脅威状況において自己の精神状態を維持できるであろう。反対に、内集団の地位が低い場合は自尊心を低下させる恐れがあるため、低地位の集団成員は肯定的な社会的アイデンティティを求めて低地位集団との関係性を避けると考えられる。よって、低地位集団では自己と内集団の連合が弱く、内集団との連合を通じた自己防衛反応が生起しにくいと示唆される。

実際に、集団地位は自己と内集団の連合や主観的幸福感を規定することがわかっている。具体的には、集団地位が高いほど、その集団への同一視は強くなる傾向がある (Bettencourt et al., 2001; Ellemers, 1993; Ellemers, Doosje, Van Knippenberg, & Wilke, 1992; Ellemers et al., 1988; Ellemers, Van Knippenberg, & Wilke, 1990; Sachdev & Bourhis, 1987)。なかでも、Sachdev & Bourhis (1987) は集団地位が同一視やその集団への満足度、感情に与える影響を検証しているという点で着目に値する。そこで、この研究について次に紹介する。

Sachdev & Bourhis（1987）では、集団地位の操作として 3 つの条件を設定しており、高地位条件、中立条件、低地位条件のいずれかに参加者を割りあてている。高地位条件はほかの集団と比較して創造性が高い集団であり、中立条件は創造性がほかの集団と同程度の集団、低地位条件はほかの集団よりも創造性が低い集団であった。最後に、それぞれの集団に対する同一視の程度を尋ねた。分析の結果、高地位条件の参加者は中立条件よりも集団同一視が強く、同時に、中立条件の参加者は低地位条件よりも集団同一視が強かった。つまり、地位の高さと集団同一視の強さは正の相関関係をもっており、地位が高いほど集団同一視は強くなると示唆される。さらに、精神状態との関連からは、内集団の地位が高いほど、その集団への満足度やポジティブ感情が高くなることが明らかになっている。

以上のように、人は自己と内集団の連合を通じて自尊心を向上しようと動機づけられており、集団同一視の程度はその集団の地位によって規定されることになる。集団地位が低い場合に集団同一視や主観的幸福感が低くなることは、低地位の集団では肯定的な社会的アイデンティティを達成できないということを反映しているといえよう。これまでの知見を要約すると、地位が高いほど自尊心を向上できるために、集団同一視が強く、主観的幸福感が高くなる傾向がある。反対に、内集団の地位が低いほど自尊心の向上には役立たないために、集団同一視は弱く、主観的幸福感は低くなる。

このように、集団地位は自己と内集団の連合の強さに影響しており、この影響は自己脅

威状況においても適用できると考えられる。つまり、低地位の内集団は自尊心を向上させる効果が小さいために、自己脅威を受けても内集団との連合を通じた自己防衛反応が抑制されると考えられる。以上の議論をふまえ、本論文は集団地位という観点から、自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的な自己防衛反応の生起プロセスを明らかにする。

3-3. 幸福感維持のプロセス

先行研究の第 3 の問題点として、自己防衛反応による肯定的影響を直接的に示していないことが挙げられる。これまでの研究では、自己と内集団の連合と自己防衛機能の関連について、以下のことがわかっている。

1. 自己と内集団の連合は個人の精神状態を向上させる
2. 自己脅威を受けると個人の精神状態が低下する
3. 自己脅威を受けると自己と内集団の連合が強くなる

上記のように、自己脅威を受けた場合、自己防衛反応なしでは精神状態が低下するが、自己と内集団の連合を強くすることで自己脅威が与える否定的影響を緩和できるのである。これらの研究では、自己脅威を受けると内集団との連合の強化を通じて精神状態の低下を防ぐと想定されているが、実際に精神状態の低下を防げているかは明らかではない。つまり、自己脅威状況で自己と内集団の連合を強めた結果として、個人の精神状態が維持されているかどうかを検証する必要がある。そこで、本論文は精神状態の指標として主観的幸福感を測定し、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応について、精神状態の維持もふくめた一連の心的プロセスを分析する。

主観的幸福感（subjective well-being）とは、「自己の精神状態が全体としてよい状態にあるかどうか」という個人の主観的な総合評価を意味している。精神状態の指標には、生活満足度などの認知的側面と、ポジティブ・ネガティブ感情などの感情的側面という 2 つの側面があるが、主観的幸福感は 2 つの側面もあわせもつという点で特徴がある（Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999; 伊藤・相良・池田・川浦, 2003）。たとえば、伊藤らは主観的幸福感が精神状態の認知的側面と感情的側面のどちらの指標とも関連することを報告している。彼らは WHO が開発した SUBI（subjective well-being inventory）にもとづき、日本語版の主観的幸福感尺度をまず作成した。この尺度をもちいた調査研究の結果、主観的

幸福感の得点は夫婦関係満足度や職場満足度、家計収入満足度などの認知的側面をあらわす指標と高い相関が観察された（$r = .34$~$.56$, $ps < .01$）。同時に、主観的幸福感は感情的側面をあらわす自尊心の尺度とも高い相関がみられている（$r = .71$, $p < .01$）。

主観的幸福感と自己防衛反応の関連について、これまでの研究は、自己脅威を受けると主観的幸福感が低下することを示している（Alicke & Sedikides, 2011; Routledge et al., 2010）。その一方、自己と内集団成員の類似性や合意性、集団同一視は主観的幸福感を促進することが指摘されている（Acitelli et al., 1993; Bizumic et al., 2009; Bliese & Halverson, 1998; Campbell, 1986）。これらの知見をふまえると、自己脅威の実験操作は主観的幸福感を低下させるが、自己脅威を受けたときに内集団成員との類似性や概念連合を強めることで、主観的幸福感を維持できるのではないかと予測される。以上のように、本論文は自己脅威状況における幸福感維持のプロセスについて検討をおこなうこととする。

3-4. 本論文で検討する課題

以上、本論文に関連する先行研究の知見や問題、それに対する本論文の貢献を述べた。これらの理論編で記述した枠組みをふまえ、本論文の実証編で検証する課題を要約する。最初に、実証編第 1 部「自己と内集団の連合が幸福感維持にもたらす効果」では、自己と内集団の連合が個人の精神状態を向上させているかどうかを分析する。過去の研究は自己と内集団成員の類似性や合意性、集団同一視が主観的幸福感と正の相関関係をもつことを示しているが（Acitelli et al., 1993; Bizumic et al., 2009; Bliese & Halverson, 1998; Campbell, 1986）、研究 1 は類似性と主観的幸福感の相関関係について先行研究を追試する。つづいて、研究 2 は相関関係にとどまらず、自己と内集団成員の類似性が主観的幸福感に与える因果的な影響を検討する。各研究の仮説は以下の通りである。

1-1. 自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、主観的幸福感が高い

2-1. 自己と内集団成員の類似性が高まると、主観的幸福感は高くなる

次に、実証編第 2 部「自己と内集団の連合がもつ自己防衛機能」では、自己と内集団成員の類似性や概念連合が自己脅威に対する防衛反応として作用するかどうかを検証する。まず研究 3 は、自己脅威が内集団成員・外集団成員との類似性に与える影響をそれぞれ分析し、自己脅威状況において自己と内集団成員の類似性が高くなるかどうかを検討する。

さらに、研究 4 は自己脅威が自己と内集団および自己と外集団の概念連合におよぼす効果を解析し、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が潜在的に生じるかどうかを調べる。各研究において検討する仮説は以下の通りである。

3-1. 自尊心に脅威が与えられると、自己と内集団成員の類似性は高くなる

3-2. 自尊心に脅威が与えられても、自己と外集団成員の類似性は高くならない

4-1. 死の脅威が高まると、自己と内集団成員の概念連合は強くなる

4-2. 死の脅威が高まっても、自己と外集団成員の概念連合は強くならない

最後に、実証編第 3 部「内集団の地位に応じた自己防衛プロセス」では、内集団の地位に応じた自己防衛反応や、主観的幸福感が維持される一連のプロセスについて検証する。まず研究 5 は、自尊心を向上させる効果が小さい内集団であっても、その内集団成員との類似性を通じた自己防衛反応が生起するかどうかを分析する。具体的には、内集団の地位が低い条件と中立の条件の 2 つを設定し、自己脅威状況における集団地位の影響について検討をおこなう。つづけて、研究 6 では集団地位の高低の要因を操作し、高地位条件と低地位条件における顕在的・潜在的な自己防衛反応について分析する。さらに、研究 6 は主観的幸福感を測定し、自己脅威状況において自己と内集団の連合を強めた結果として、主観的幸福感が維持されるかどうかを明らかにする。それぞれの研究において、検討する仮説は以下の通りである。

5-1. 自尊心に脅威が与えられたときに、内集団の地位が低いと類似性は低くなる

5-2. 自尊心への脅威が存在しないときは、内集団の地位が低くても類似性は低くならない

6-1. 内集団の地位が高い場合は、死の脅威が高まると内集団同一視が強くなる

6-2. 内集団の地位が低い場合は、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合が強くなる

6-3. 地位が高い場合は内集団同一視、低い場合は概念連合を通じて幸福感を維持する

以上の課題検討にもとづき、本論文は類似性および概念連合という観点から、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応の包括的なモデルを構築する。この包括的なモデル構築のために、本論文で新たに検討する点をあらためて要約すると次の通りとなる。

1. （自己と内集団の連合にもとづく）自己防衛反応の潜在性の検討
2. 集団地位に応じた顕在的・潜在的な自己防衛反応の検討
3. 自己防衛反応を通じた幸福感維持のプロセスの検討

実証編第 1 部 自己と内集団の連合が幸福感維持にもたらす効果

4-1. 研究 1 自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の関連

4-1-1. 目的

本論文は自己と内集団成員の類似性や概念連合に焦点をあて、これらの自己と内集団の連合が脅威状況において自己を防衛する役割を果たしているかどうかを検証する。もし内集団との連合が自己を防衛しているならば、自己脅威を受けると類似性や概念連合は強くなると予測される。ただし、脅威状況で自己防衛機能をもつためには、内集団との連合が脅威の有無にかかわらず精神状態を向上させていることが必要であろう。そこで、実証編第 1 部は自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応を直接的に分析するのではなく、脅威を受けていない状況において自己と内集団の連合が精神状態を向上させていることを確証する。そして、次の実証編第 2 部において、第 1 部の知見をふまえた自己防衛反応の検証をおこなう。このように、実証編第 1 部の目的は自己と内集団の連合が個人の精神状態を向上させているかどうかを分析することである。研究 1 と研究 2 はともに、内集団との連合をあらわす指標として類似性、精神状態の指標として主観的幸福感を測定し、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の相関・因果関係を検証する。

理論編で紹介したように、先行研究は自己と内集団の連合が強い人ほど、健康状態や精神状態が向上することを明らかにしている。たとえば、健康状態との関連からは、内集団に対する同一視が強い人ほど、慢性疾患になりにくい（Bailis et al., 2008）、がんや感染症のリスクが低い（Cole et al., 1996）、身体的自立度が高い（Levy et al., 2002）、痛みの経験が少ない（Platow et al., 2007）、ということがそれぞれ示されている。同様に、精神状態との関連では、内集団への同一視が強い人ほど、主観的幸福感が高い（Bizumic al., 2009）、自尊心が高い（Luhtanen & Crocker, 1992）、ストレスが低い（Haslam & Reicher, 2006）、ということが示されている。

本論文であつかう類似性に着目すると、過去の研究では自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、主観的幸福感が高くなることがわかっている（Acitelli et al., 1993）。また、類似性に近似する概念である合意性に関しても、自己と内集団成員の合意性が高い人ほど、主観的幸福感が高いということが確認されている（Bliese & Halverson, 1998; Campbell,

1986)。これらの研究では類似性や合意性を測定するために、態度や意見項目、能力が自分と内集団成員でどの程度似ているか（もしくは支持されているか）を尋ねている。それに対し、本論文は性格特性に関する認知をあつかっており、「自分と内集団成員の性格は似ていると思う」という性格特性の認知にもとづく類似性が自己防衛機能をもつかどうかを検証する。そこで、研究 1 は性格特性の認知という観点から、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の関連について、先行研究の追試をおこなう。研究仮説は以下の通りである。

1-1. 自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、主観的幸福感が高い

もし自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感との間に正の相関関係が観察され、類似性が高い人ほど主観的幸福感が高いという結果が得られれば、内集団成員との類似性は自己脅威がもたらす否定的影響を緩和する効果をもつと推測できるであろう。

4-1-2. 方法

調査方法

東京大学の学生に個別に質問紙を配布し、後日に回収した。有効回答者は 90 名であった。調査項目として、類似性と主観的幸福感の質問項目を使用した。

類似性の測定

自己と内集団成員の類似性を測定するために、「自分自身と東京大学の学生（内集団）がどのような性格をしているか」を推定するよう求めた。性格特性語は、ポジティブな評価次元をあらわす特性語、および、ネガティブな評価次元をあらわす特性語を工藤（2004）より選定してもちいた（資料 A)。ポジティブ特性語は、「明るい」、「まじめ」、「良心的」、「意欲的」、「思いやりがある」の 5 語であり、ネガティブ特性語は、「でしゃばり」、「いじわる」、「感じがわるい」、「なまいき」、「軽率」の 5 語であった。参加者は各特性語が自己と東京大学の一般的な学生（内集団成員）にどの程度当てはまるかについて、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で回答をおこなった。

主観的幸福感の測定

参加者の主観的幸福感を Kahneman, Krueger, Schkade, Schwarz, & Stone（2004）にもとづき測定した。主観的幸福感の質問項目として、目を覚ましている間に、幸福な気分

でいる時間の割合はどのくらいであるかを尋ねた（資料 B)。具体的には、「あなたが目を覚ましている時、どのように感じ、どのような気分でいるのかについてお尋ねします。目を覚ましている全ての時間のうち、次の気分でいる時間は何パーセントですか」と回答を求めた。参加者はこの質問について、「嫌な気分」、「少し沈んだ または いらいらした」、「穏やかな楽しさ」、「非常に良い気分」の合計が 100 パーセントになるように値を振りわけた。

4-1-3. 結果

類似性と主観的幸福感

参加者の特性評定にもとづき、自己と内集団成員の類似性の得点を算出した。具体的には、性格評定における「自己の特性判断」と「内集団成員の特性判断」の参加者内の相関を算出したあと、フィッシャーの Z 変換により正規化した値を自己と内集団成員の類似性と定義した。さらに、主観的幸福感の質問項目における 4 つのパーセントのうち、「穏やかな楽しさ」と「非常に良い気分」のパーセントを合算した値を主観的幸福感の指標として使用した。

類似性と主観的幸福感の各指標について得点を算出したあと、類似性の平均値について解析をおこなった。具体的には、自己脅威が存在しない状況において自己と内集団成員が似ていると認知されているかを調べるために、自己と内集団成員の類似性得点が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定によって分析した。その結果、類似性得点（$M = 0.27$; $SD = 0.54$）は 0 よりも有意に大きいという結果が得られた（$t(89) = 4.80$, $p < .01$）。したがって、自己脅威を受けていなくても、自己と内集団成員は似ていると認知されていたと解釈できる。次に、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の得点について、ピアソンの積率相関係数をもちいて相関関係を分析した。その結果、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の間には、有意な正の相関関係が観察された（$r = .27$, $p < .05$; 図 2)。よって、本研究の仮説の通りに、自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、主観的幸福感が高いことが確認された。

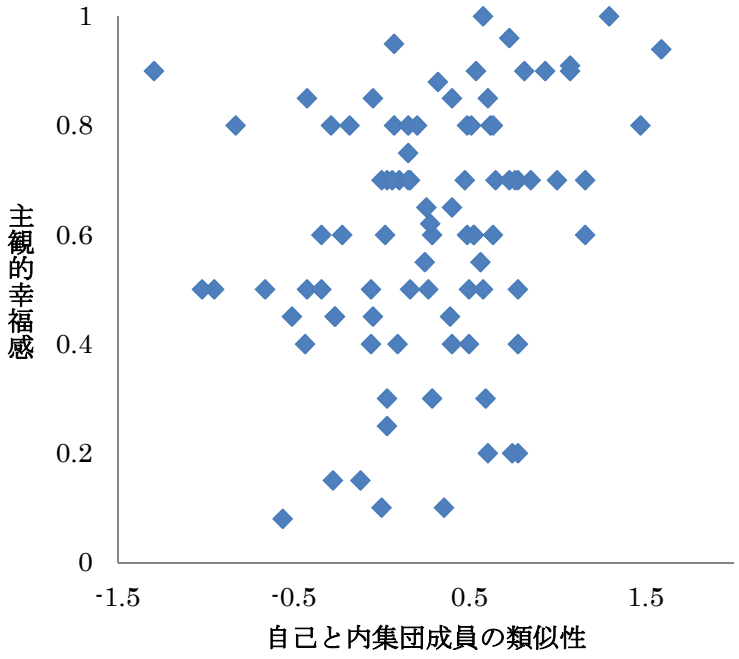


図 2. 類似性と主観的幸福感の散布図

なお、参加者内相関にもとづく類似性だけでなく、評定値差の絶対値にもとづく類似性（e.g., Harmon-Jones et al., 1996）をもちいて同様の分析をおこなった。この場合、評定値差の絶対値の平均が小さいほど、つまり自己と内集団成員の評定値が似通っているほど、内集団成員との類似性が高いことを示している。追加分析の結果、評定値差の絶対値が小さく、自己と内集団成員の類似性が高い人ほど、主観的幸福感が高いことが明らかになった（$r = -.26$, $p < .05$）。したがって、類似性に関する研究 1 の知見は、指標の性質に依存していないことが示唆される。

このほか、自己評定が主観的幸福感に与える影響について追加分析をおこなった。分析に際し、「ネガティブな評価次元について数値を逆転したうえでの平均値」を自己評定の値として定義した。すなわち、自己評定の値が大きいほど、自己を望ましく認知していることになる。この値をもちいて分析した結果、自己評定の値が大きく、自己を望ましく認知している人ほど、主観的幸福感が高いことが示された（$r = .21$, $p < .05$）。また、自己と内集団成員の類似性および自己評定の関連について、各変数を標準化したうえで一般線形モデルによる分析を実施した。しかし、自己と内集団成員の類似性および自己評定の交互作用効果は有意ではなかった（$t = 1.37$, *n.s.*）。よって、自己評定の高さにかかわらず、自己と内集団成員の類似性は個人の主観的幸福感を向上させていると考えられよう。

4-1-4. 考察

研究 1 の目的は、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の相関関係を検証することであった。分析の結果、研究 1 の仮説は支持され、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の間には正の相関関係がみられた。このように、自己と内集団成員の類似性が高い人ほど主観的幸福感が高いことから、内集団成員との類似性は個人の主観的幸福感を向上させており、脅威状況において自己を防衛する機能をもつと示唆される。さらに、研究 1 では内集団成員との類似性を測定するために、自己と内集団成員に対する性格特性の認知をあつかっていた。したがって、「自分と内集団成員の性格は似ていると思う」という性格特性の認知にもとづく類似性は主観的幸福感の向上や自己防衛機能と関連すると考えられる。

くわえて、類似性の平均値の検定結果から、自己と内集団成員の類似性は高く認知されていることが明らかになった。これは先行研究の知見とも一貫しており（Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow & Gaertner, 2005; Gramzow et al., 2001; Krueger, 1998, 2007; Krueger et al., 2006; Otten & Bar-Tal, 2002; Otten & Wentura, 2001; Robbins & Krueger, 2005; Vanhoomissen, & Van Overwalle, 2010）、自己と内集団成員の性格認知は自己脅威が存在しなくても相互に関連していると考えられる。

4-2. 研究 2 自己と内集団成員の類似性が主観的幸福感に与える影響

4-2-1. 目的

研究 1 は自己と内集団成員の類似性が個人の主観的幸福感の向上と関連することを明らかにした。したがって、自己と内集団成員の特性認知にもとづく類似性は自己防衛機能をもつことが示唆される。しかし、一方で、研究 1 の知見は相関関係にとどまっており、自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感の正の相関関係を示したにすぎない。すなわち、本論文が予測するように、自己と内集団成員の類似性の高さが主観的幸福感を促進しているのではなく、主観的幸福感が高いことによって自己と内集団成員の類似性が高く認知されるという逆方向の因果関係も想定できる。

このように、仮に主観的幸福感が自己と内集団成員の類似性を高めるように作用しており、類似性から主観的幸福感への因果的影響が存在しないのであれば、自己と内集団成員の類似性が自己防衛機能をもつという予測は成立しなくなる。自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感は相互に影響をおよぼしていることも十分想定できるが、自己と内集団成員の類似性が主観的幸福感に対して確かに影響を与えていることを検証するために、研究 2 は自己と内集団成員の類似性が主観的幸福感に与える因果関係について分析をおこなう。具体的には、自己と内集団成員の類似性を実験的に操作し、主観的幸福感がどのように変化するかを調べる。研究 2 の仮説は以下の通りである。

2-1. 自己と内集団成員の類似性が高まると、主観的幸福感は高くなる

自己と内集団成員の類似性が高い条件が類似性の低い条件よりも主観的幸福感が高くなれば、自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感を促進していると判断できるであろう。

4-2-2. 方法

参加者

東京大学の学生 46 名（男性 33 名、女性 13 名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は、20.39 歳（*SD* = 0.86）であった。参加者は類似条件、もしくは、非類似条件にランダムに割りあてられた。

実験手続き

実験はコンピュータをもちいて実施された。課題は、類似性の実験操作、主観的幸福感の測定、の順序でおこなわれた。すべての課題の終了後にディブリーフィングをおこない、実験を終了した。

類似性の操作

自己と内集団成員の類似性を操作するために、「意見項目に対する内集団成員の態度が自分とどの程度似ているか」という情報をフィードバックした（Ames, 2004; Bryne, 1971）。まず、参加者は 10 個の意見項目に対する態度を回答した（資料 C）。それぞれの意見項目は 2 つの選択肢から構成されており、「テレビでスポーツ観戦をするのが好きだ－テレビでスポーツ観戦をするのが嫌いだ」や「結婚した後は、共働きをしたほうが良いと思う－結婚した後は、共働きをしなくても良いと思う」などの項目について、参加者の意見に当てはまるほうをマウスで選択するよう求めた。

そのあと、同じ実験をおこなった内集団成員（東京大学の学生）のなかからコンピュータがランダムに 1 人を選択し、その選択された人（A さん）の回答を表示すると教示した。ただし、実際には、内集団成員の回答ではなく、参加者の条件（類似条件もしくは非類似条件）にもとづいたフィードバック情報が提示された。具体的には、類似条件では、10 個の意見項目のうち 9 個の意見項目で、参加者と A さんが同じ回答をしていることが画面上に表示された。その一方、非類似条件では、10 個の意見項目のうち 1 個の意見項目で、参加者と A さんが同じ回答をしていることが画面上に表示された。

つづけて、類似性の操作チェックとして、参加者と A さんの類似性、および、共通点を測定した。類似性の項目は「あなたと A さんの意見はどの程度似ていると思いますか」であり、参加者は自己と内集団成員の類似性の程度を、「1：異なる、2：やや異なる、3：どちらでもない、4：やや似ている、5：似ている」の 5 件法で回答した。また、共通点の項目は「あなたと A さんはどの程度共通点があると思いますか」であり、参加者は自己と内集団の共通点の多さを、「1：少ない、2：やや少ない、3：どちらでもない、4：やや多い、5：多い」の 5 件法で回答した。

主観的幸福感の測定

研究 2 では、主観的幸福感の指標として伊藤ら（2003）をもちいた。主観的幸福感の質問項目は、「あなたは人生が面白いと思いますか」、「自分がやろうとしたことはやりとげていますか」など、12 項目から構成されていた（資料 D）。参加者は自分の考えが各項目にど

の程度当てはまるかを、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で回答した。

4-2-3. 結果

操作チェック

実験操作の有効性を確認するために、操作チェックの回答を分析した。まず、類似性の項目の平均値について、t 検定をおこなった。その結果、類似条件（$M = 4.33$; $SD = 0.64$）は非類似条件（$M = 1.41$; $SD = 0.73$）よりも類似性の得点が有意に高かった（$t(44) = 14.46$, $p < .01$）。さらに、共通性の項目の平均値について t 検定をおこなったところ、類似条件（$M = 4.50$; $SD = 0.51$）は非類似条件（$M = 1.32$; $SD = 0.47$）よりも共通性が有意に高かった（$t(44) = 21.79$, $p < .01$）。このように、自己と内集団成員の類似性が高まると共通点や類似性が高く認知されており、本研究における類似性の操作は有効であったと解釈できる。

主観的幸福感

主観的幸福感を測定した 12 項目の信頼性を検討するため、クローンバックの α 係数を算出した。その結果、$\alpha = .84$ という高い内的整合性がみられたため、12 項目の平均値を算出した。これらの主観的幸福感の得点について、t 検定をおこなった。その結果、本研究の仮説と一致して、類似条件（$M = 3.64$; $SD = 0.72$）は非類似条件（$M = 3.25$; $SD = 0.78$）よりも主観的幸福感が高い傾向がみられた（$t(44) = 1.75$, $p < .10$；図 3）。また、操作チェックで使用した類似性と共通性をあわせた合成得点も、主観的幸福感と正の相関関係をもっていた（$r = .27$, $p < .10$）。したがって、「自分と内集団成員がどの程度似ているか」という実際の類似性だけでなく、「自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか」という主観的認知にもとづく類似性も主観的幸福感を向上させると考えられる。

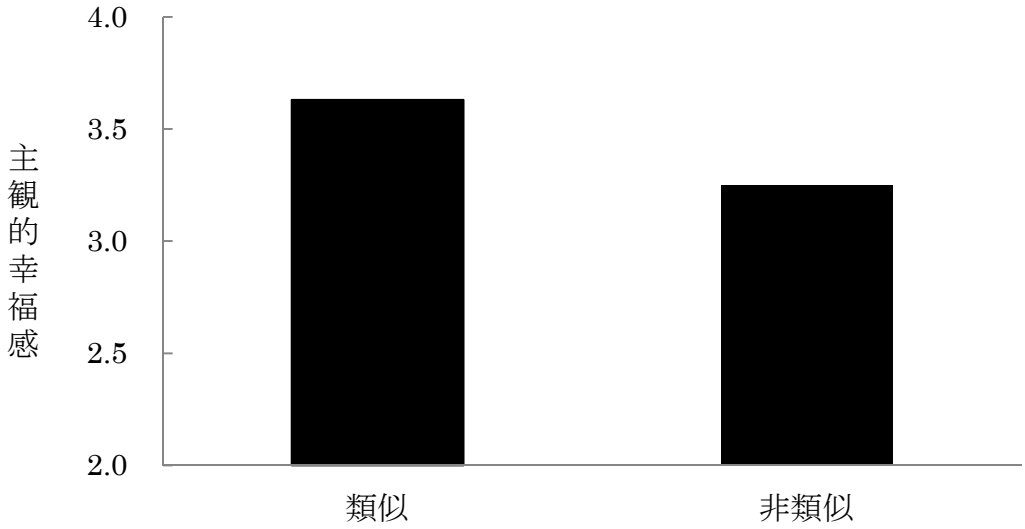


図 3. 類似性の各条件における主観的幸福感

4-2-4. 考察

研究 2 の目的は、自己と内集団成員の類似性から主観的幸福感への因果関係を検証することであった。その結果、研究 2 の仮説の通りに、類似条件は非類似条件よりも主観的幸福感が高く、自己と内集団成員の類似性が高まると主観的幸福感は高くなることが明らかになった。よって、内集団成員との類似性は個人の主観的幸福感を実際に向上させていると解釈できる。

実証編第 1 部要約

研究 1 の結果とあわせて、実証編第 1 部は自己と内集団成員の類似性と主観的幸福感との間にある相関・因果関係を示してきた。これらの知見にもとづくと、自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感を向上させており、類似性は脅威状況における自己防衛反応の指標として検討に値すると考えられる。つまり、内集団成員との類似性は個人の主観的幸福感に影響をおよぼしており、脅威状況において自己を防衛する役割をもつであろう。以上の議論をふまえ、実証編第 1 部の研究知見は次の 2 点に要約することができる。

1. 自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感と関連している
2. 自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感を向上させる

実証編第 2 部 自己と内集団の連合がもつ自己防衛機能

5-1. 研究 3 自尊心脅威が自己と内集団成員の類似性に与える影響

5-1-1. 目的

実証編第 1 部は、類似性と主観的幸福感という観点から、自己と内集団の連合が個人の主観的幸福感を向上させていることを示した。第 2 部はこれらの知見をふまえて、自己と内集団の連合が脅威状況において自己を防衛する役割を果たしているかどうかを検討する。自己と内集団の連合をあらわす指標として、研究 3 では研究 1 や研究 2 と同様に類似性、研究 4 は潜在指標である概念連合を新たに測定する。また、自己脅威状況として、研究 3 は自尊心脅威、研究 4 は死の顕現性を使用し、これらの自己に対する脅威が類似性や概念連合におよぼす効果を分析する。

まず研究 3 では、「テストの成績が低い」というフィードバックを通じて自尊心脅威を操作し、脅威を受けた人がそうでない人とくらべて自己と内集団成員の類似性が高まるかどうかを検証する。自己と内集団の連合がもつ自己防衛機能について、過去の研究では、自己が脅威にさらされると、内集団同一視が強くなることが確認されている（Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; Wisman & Koole, 2003）。また、本論文と関連が深い合意性をもちいた研究も、自己脅威を受けると、自己と内集団成員の合意性が高まることを示している（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。

研究 3 は以上の先行研究をふまえ、類似性という観点から、自尊心脅威が自己と内集団の連合に与える影響を検証する。さらに、研究 3 は自己と内集団成員の類似性だけでなく、自己と外集団成員の類似性もあわせて測定し、自己と内集団の連合および自己と外集団の連合がどのように変化するかを比較検討する。その結果として、脅威状況における自己防衛反応が自己と内集団の連合に対して選択的なプロセスであるかどうかを明らかにすることが可能になる。また、集団状況の設定として最小集団状況（Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）を使用し、現実場面での相互作用をふくむ内集団だけでなく、実験場面で作成された新規の内集団においても自己防衛反応が生起するかどうかを分析する。なお、これらの最小集団状況を使用することは、特性評定における参加者の事前知識の影響を統制できるという点でも利点があると思われる。内集団との連合に関する実験仮説として、

自尊心への脅威を受けると、自己と内集団成員の類似性は高く認知されると予測される。

それに対し、自己と外集団成員の類似性に関しては以下の 2 つの仮説が導出される。第 1 に、外集団は自己との関連性が低く（Clement & Krueger, 2002; Krueger, 1998）、精神状態の向上や自己防衛には効果がないと考えられるため、脅威を受けても外集団成員との類似性は変化しないと予測される。第 2 に、自己脅威を受けると、自己と外集団成員の類似性が低くなる可能性もある。これは、外集団成員との類似性を低く推定することで差異化を強め、自己の望ましさや独自性を維持できるためである（Brewer, 1999; Turner et al., 1987）。したがって、自己と内集団成員の類似性を高めるだけではなく、自己と外集団成員の類似性を低くすることも自己防衛反応として機能するかもしれない。

このように、自己と外集団成員の類似性については 2 つの予測が存在する。ただし、研究 3 では競争的な集団状況ではない最小条件集団パラダイムを使用している。その結果、外集団との差異化は生じにくく、自己と外集団成員の類似性は自尊心脅威を受けても変化しないと推測される。以上の議論から、研究 3 で検討する主要な仮説は次の通りとなる。

3-1. 自尊心に脅威が与えられると、自己と内集団成員の類似性は高くなる

3-2. 自尊心に脅威が与えられても、自己と外集団成員の類似性は高くならない

もし脅威条件の参加者が統制条件よりも自己と内集団成員の類似性を高く認知していれば、内集団成員との類似性は自己を脅威から防衛していると解釈できるであろう。一方で、脅威を受けても自己と外集団成員の類似性が高くならなければ、外集団成員との類似性は自己防衛の機能をもたないと推測される。

これまで論じてきたように、研究 3 は自尊心脅威の操作が自己と内集団成員の類似性および自己と外集団成員の類似性に与える影響を検証することを主要な目的としている。ただし、自尊心脅威の操作は類似性だけでなく、集団間バイアスにも影響を与える可能性がある。具体的には、自尊心脅威を受けると、内集団成員に対して肯定的な集団間バイアスを強めるかもしれない。この予測は社会的アイデンティティ理論にもとづいており、自尊心脅威を受けたときに外集団成員よりも内集団成員に対して好ましく振るまうことで、自尊心を維持できると仮定されている（Tajfel & Turner, 1979）。

Hogg & Abrams（1990）は以上の仮定をふまえ、1）内集団成員にとって肯定的な集団間バイアスは自尊心を高める、2）自尊心が低下すると集団間バイアスが強くなる、という 2 つの仮説を導出している。過去の研究のレビューでは、2）の仮説は 1）の仮説と比較し

て支持する知見は少ないが（Aberson, Healy, & Romero, 2000; Rubin & Hewstone, 1998）、自尊心が特性的に低い人においてではなく、一時的に自尊心に対して脅威を与えられた場合に集団間バイアスは生じやすくなることが指摘されている（Harmon-Jones et al., 1996; Hogg & Sunderland, 1991）。この指摘にもとづくと、研究 3 は実験操作として一時的に自尊心に脅威を与えているため、自己脅威状況では内集団成員を外集団成員よりも好ましく評定すると考えられる。つまり、自尊心に脅威が与えられると、集団間バイアスは強くなると予測される。

しかしながら、ポジティブ・ネガティブ非対称の研究知見からは、逆の予測が導かれる（Mummendey & Otten, 1998; Wenzel & Mummendey, 1996）。Mummendey らによると、ポジティブな性格特性にくわえてネガティブな性格特性を評価すると、集団間バイアスは抑制される傾向がある。なぜなら、ネガティブな特性判断では規範意識が働くためである。具体的には、内集団成員を肯定的に評価することは社会規範にそっているが、外集団成員を否定的に評価することは社会規範から外れている。言いかえると、利益の分配とくらべて危害の分配は規範的に望ましくなく、「外集団成員である」という理由だけで否定的に評価・行動することは正当化されないであろう。

その結果、ポジティブな性格特性のみを使用する際は、内集団成員を外集団成員よりも好ましく評価することになる。それに対し、ネガティブな性格特性のみの場合や、ポジティブな性格特性とネガティブな性格特性の両方をもちいる場合は、内集団成員を外集団成員よりも好ましく評価することはない。すなわち、ネガティブな性格特性を使用すると集団間バイアスは生じなくなる。よって、自尊心脅威を受けても、集団間バイアスは強くはならないと予測される。以上のように相反する予測を導く議論がこれまでの研究に存在するため、自尊心脅威が集団間バイアスに影響するかどうかについては探索的に検討する。

5-1-2. 方法

参加者

東京大学の学生 37 名（男性 21 名、女性 16 名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は、20.69 歳（*SD* = 0.44）であった。参加者は脅威条件、もしくは、統制条件にランダムに割りあてられた。

実験手続き

実験はコンピュータをもちいて実施された。課題は、自尊心脅威の実験操作、集団分類手続き、類似性の測定、の順序でおこなわれた。すべての課題の終了後にディブリーフィングをおこない、実験を終了した。

自尊心脅威の操作

参加者は思考力テストと教示を受け、ウィスコンシンカード分類テスト（Berg, 1948）をおこなった。ウィスコンシンカード分類テストは、変化する分類基準に応じて適切なカードを選択するという課題であり、認知症の診断などにもちいられている。参加者はコンピュータ上で、色・形・数がそれぞれ異なる 4 種類のカードのなかから、ターゲットのカードと一致するものを選択する課題をおこなった。一致・不一致の基準（色・形・数のいずれか）は試行によって異なっており、連続して正解すると一致・不一致の分類基準が変更される。課題中に分類基準は明らかにされていないが、正答・誤答のフィードバックを通じて分類基準を推測することが可能である。参加者はこの課題について、できるだけ素早く判断し、できるだけ多くの正答を得るように教示を受けた。

自尊心脅威の実験操作として、脅威条件と統制条件でテストの難易度を変更し、脅威条件ではつづけて正解することが非常に困難な状況を作成した。具体的には、脅威条件では 3 回続けて正解すると分類基準が変化するが、統制条件では 6 回連続で正解すると分類基準が変化するようにプログラミングされていた。さらに、脅威条件では、課題直後にテスト結果に関するフィードバックを提示し、実際の課題遂行にかかわらず同一の成績が表示された。すなわち、脅威条件では、過去に同じ大学で実施したテスト結果と比較して、参加者の偏差値が 43、得点が 35 点であると教示し、ほかの学生と比較した相対得点をグラフで視覚的に表示した（資料 E）。なお、結果提示後の 15 秒間は画面操作が不可能であった。統制条件では、このような結果フィードバックは表示されなかった。

つづけて、操作チェックとして状態自尊心（阿部・今野, 2007）を測定した。状態自尊心の質問項目は、「いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる」、「いま、自分はだめな人間であると感じる」など、9 項目から構成されていた（資料 F）。参加者はこれらの質問項目について、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で評定をおこなった。

集団分類手続き

自尊心脅威の操作のあと、最小条件集団パラダイム（Tajfel et al., 1971）の手続きとして、参加者はコンピュータの画面上に表示される 2 枚の抽象画について、どちらが好きかをマ

ウスで選択する課題を 10 試行おこなった。各試行において、2 枚のうち 1 つは Cooper によって描かれた絵であり、もう 1 つは Thompson によって描かれた絵であると告げた。課題の終了後、見かけ上は絵の判断課題の結果から、参加者は Cooper 集団、 もしくは、Thompson 集団に分類された。Cooper（Thompson）集団の場合、コンピュータの画面に、「あなたは Cooper（Thompson）によって描かれた絵を、Thompson（Cooper）による絵よりも好ましいと評定しています」という説明文が表示された。実際は絵の判断課題の結果にかかわらず、参加者は Cooper 集団と Thompson 集団の 2 つにランダムに分類された。

類似性の測定

次に、自己と内集団成員および外集団成員との類似性を測定するために、性格評定課題を実施した。具体的には、参加者には Cooper と Thompson 集団に所属する人物をイメージしながら、「自分自身や各集団成員がどのような性格をしているか」を推定するよう求めた。性格特性語はポジティブな評価次元をあらわす特性語、また、ネガティブな評価次元をあらわす特性語を工藤（2004）より選定してもちいている。ポジティブ特性語は、「明るい」、「まじめ」、「良心的」、「意欲的」、「思いやりがある」、「親しみやすい」、「がまん強い」、「きちんとしている」、「理性的」、「魅力的」の 10 語であり、ネガティブ特性語は、「でしゃばり」、「いじわる」、「感じがわるい」、「なまいき」、「軽率」、「軽薄」、「心がせまい」、「たよりない」、「意志が弱い」、「自信がない」の 10 語であった。それぞれの特性語が自己や一般的な内集団成員、外集団成員（Cooper もしくは Thompson 集団）に対してどの程度当てはまるかを、「1：全く当てはまらない、2：ほとんど当てはまらない、3：あまり当てはまらない、4：どちらでもない、5：やや当てはまる、6：かなり当てはまる、7：非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。課題後、参加者に Cooper と Thompson のどちらの集団に所属していたかを確認し、ディブリーフィングをおこなったうえで実験を終了した。

5-1-3. 結果

操作チェック

実験操作の有効性を確認するために、操作チェックの回答を分析した。まず、最小条件集団の操作に関して、参加者全員が正しい所属集団の名前（Cooper もしくは Thompson）を選択しており、実験教示が正しく理解されていたことが確認された。さらに、自尊心脅威の操作の効果を検証するために、状態自尊心の項目の平均値について t 検定をおこなった。

その結果、脅威条件（$M = 3.27$; $SD = 0.69$）は統制条件（$M = 3.63$; $SD = 0.58$）よりも状態自尊心が低い傾向がみられた（$t(35) = 1.76$, $p < .10$）。したがって、有意傾向ではあるが、自尊心脅威の実験操作は有効であったと推測される。

類似性

研究 1 と同様に、自己と内集団成員および自己と外集団成員の類似性得点を算出した。具体的には、性格評定課題における「自己の特性判断」と「内集団成員（もしくは外集団成員）の特性判断」の参加者内の相関を算出したあと、フィッシャーの Z 変換をもちいて正規化した値を以下の分析における従属変数として使用した。予備分析として、性別、所属集団の名前（Cooper vs. Thompson）、特性語の感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の効果を検証したところ、それぞれの要因は以下で報告するすべての変数に対して有意な主効果・交互作用効果を持っていなかったため、以降の分析からは除外した。

まず、脅威条件と統制条件のそれぞれにおいて、自己と内集団成員・外集団成員が似ていると認知されているかどうかについて検証をおこなった。具体的には、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）とターゲット（内集団成員 vs. 外集団成員）の各条件における類似性得点が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定によって分析した。その結果、内集団成員に関しては、脅威条件（$M = 0.30$; $SD = 0.37$）において 0 よりも有意に大きいという結果が得られたが、統制条件（$M = 0.05$; $SD = 0.16$）では 0 との差は有意ではなかった（$t(16) = 3.21$, $p < .01$; $t(19) = 1.28$, *n.s.*）。したがって、自尊心脅威を受けたときのみ、自己と内集団成員の類似性が高く認知されていたと示唆される。それに対し、外集団成員については、脅威条件（$M = -0.07$; $SD = 0.46$）と統制条件（$M = 0.04$; $SD = 0.19$）のどちらの条件においても、0 との間に有意差は観察されなかった（$t(16) = 0.63$, *n.s.*; $t(19) = 0.86$, *n.s.*）。つまり、外集団成員との類似性は、自己脅威があるかどうかにかかわらず高く認知されてはいなかったと考えられる。

次に、自己脅威を受けると、内集団成員・外集団成員との類似性が高まるかどうかについて検証をおこなった。具体的には、類似性の得点について、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）を参加者間要因、ターゲット（内集団成員 vs. 外集団成員）を参加者内要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、ターゲットの主効果（$F(1, 35) = 4.76$, $p < .05$）、および、自尊心脅威×ターゲットの交互作用効果（$F(1, 35) = 4.23$, $p < .05$）が有意であった。ターゲットの主効果に関して、自己と内集団成員の類似性（$M = 0.16$; $SD = 0.31$）は外集団成員（$M = -0.01$; $SD = 0.35$）よりも有意に高かった。さらに、自尊心脅威×ターゲットの交

互作用効果に関して下位検定をおこなったところ、内集団成員条件における自尊心脅威の単純主効果、および、脅威条件におけるターゲットの単純主効果が有意であった（図 4）。

まず、自尊心脅威の単純主効果に関して、自己と内集団成員の類似性は、脅威条件の平均値が統制条件よりも有意に高かった（$F(1, 70) = 5.68, p < .05$）。つまり、自己と内集団成員の類似性は、自尊心に脅威が与えられると高くなることが示唆される。それに対し、自己と外集団成員の類似性は、脅威条件と統制条件の間で有意差はみられなかった（$F(1, 70) = 1.05$, *n.s.*）。この結果から、自己と外集団成員の類似性は、自尊心に脅威が与えられても変化しないと考えられる。

また、ターゲットの単純主効果について、脅威条件では自己と内集団成員の類似性が自己と外集団成員の類似性よりも有意に高かった（$F(1, 35) = 8.98, p < .01$）。よって、自尊心への脅威が存在する状況では、自己と内集団成員の類似性が外集団成員よりも高くなることが示唆される。その一方、統制条件では、自己と内集団成員の類似性と自己と外集団成員の類似性の間で有意差はみられなかった（$F(1, 35) = 0.01$, *n.s.*）。すなわち、自尊心脅威が存在しない状況では、内集団成員や外集団成員というカテゴリーは類似性に影響しないと解釈できる。

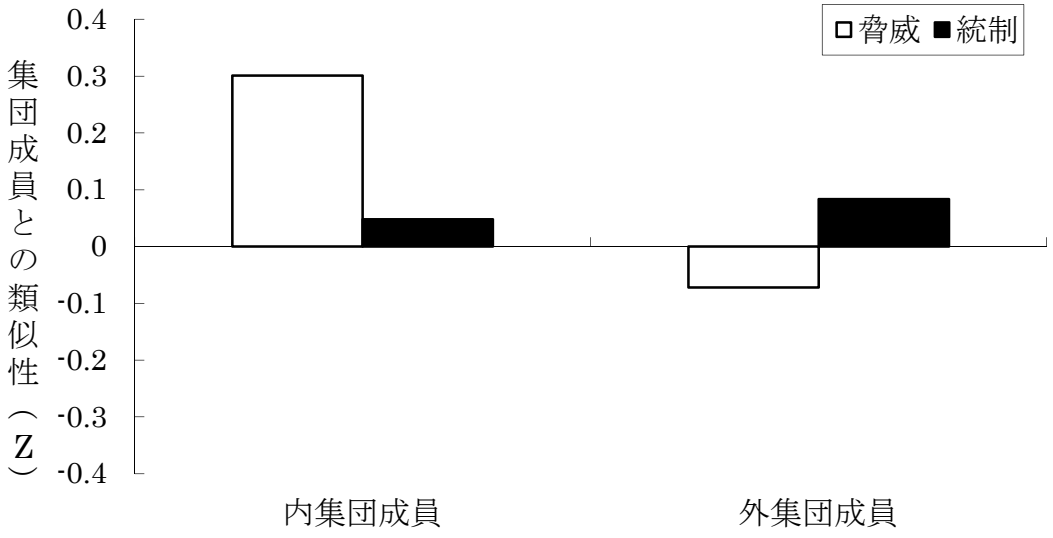


図 4. 自尊心脅威×ターゲットの各条件における集団成員との類似性

つづけて、評定値差の絶対値の平均をもちいて、上記の類似性の結果が再現されるかどうかを分析した。その結果、自己と内集団成員の評定値差の絶対値は、脅威条件（$M = 1.31$; $SD = 0.30$）が統制条件（$M = 1.47$; $SD = 0.26$）よりも小さい傾向が見られた（$F(1, 70) = 2.95$, $p < .10$）。それに対し、自己と外集団成員の評定値差の絶対値は、脅威条件（$M = 1.38$; $SD = 0.32$）と統制条件（$M = 1.48$; $SD = 0.26$）で有意差は観察されなかった（$F(1, 70) = 1.24$, *n.s.*）。したがって、参加者内相関にもとづいて分析をおこなったときと同様に、自己と内集団成員の類似性は自尊心に脅威が与えられると高まること、および、自己と外集団成員の類似性は自尊心に脅威が与えられても変化しないことが示唆される。

さらに、自尊心脅威が自己評定や内集団成員の評定、外集団成員の評定に与える影響を検証した。研究 1 と同様に、「ネガティブな評価次元について数値を逆転したうえでの平均値」を算出し、自己評定や内集団成員の評定、外集団成員の評定として定義した。つまり、自己や内集団成員・外集団成員の評定値が大きいほど、それぞれのターゲットを望ましく認知していることを意味する。各評定値について分散分析を実施した結果、自尊心脅威は有意な影響をおよぼしていないことが示された（Fs ≤ 1.96, *n.s.*）。したがって、自尊心に脅威が与えられても、自己や内集団成員・外集団成員の性格特性に関する望ましさの認知は変化していないと推測される。なお、参加者内相関にもとづく類似性と外集団成員の評定値の間には、有意な相関が認められなかった（$r = .06$, *n.s.*）。この結果から、自己と内集団成員の類似性を高く認知しても、外集団成員への態度は否定的にはならないと示唆される。

集団間バイアス

類似性の分析にくわえて、集団間バイアスについて検討をおこなった。分析に先立ち、内集団成員に対する評定値から外集団成員に対する評定値を差し引いた値を集団間バイアスと定義した。したがって、ポジティブな評価次元では、集団間バイアスの値が高いほど内集団成員に対して望ましい評定をしていることを意味している。それに対し、ネガティブな評価次元では、集団間バイアスの値が高いほど内集団成員に対して望ましくない評定をしていると解釈される。

まず、脅威条件と統制条件のそれぞれにおいて集団間バイアスが生じているか、つまり各条件で内集団成員が外集団成員よりも好ましく評定されているかどうかを検証した。具体的には、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）と感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の各条件において、集団間バイアスの平均値が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定により分析した。その結果、ポジティブな評価次元では、脅威条件（$M = 0.19$; $SD = 0.58$）と統制条件（$M =$

0.06; *SD* = 0.39）の各条件において、0 よりも大きいという結果は得られなかった（$t(16) = 1.31$, *n.s.*; $t(19) = 0.71$, *n.s.*）。また、ネガティブな評価次元でも、脅威条件（$M = 0.16$; $SD = 0.69$）と統制条件（$M = 0.02$; $SD = 0.33$）において、0 との間に有意差は見られなかった（$t(16) = 0.95$, *n.s.*; $t(19) = 0.20$, *n.s.*）。したがって、自尊心脅威の有無や感情価の評価次元にかかわらず、内集団成員は外集団成員よりも好ましく評価されてはいなかったと考えられる。

上記のように、集団間バイアスはいずれの条件でも生じていなかった。しかし、そうであったとしても、集団間バイアスの値は自尊心脅威によって変化している可能性がある。そこで、自尊心脅威を受けると集団間バイアスが強くなるか、すなわち内集団成員と外集団成員の間の評価差が大きくなるかどうかについて分析をおこなった。具体的には、集団間バイアスの値に対して、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）を参加者間要因、感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）を参加者内要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、自尊心脅威と感情価の各主効果、自尊心脅威×感情価の交互作用効果はいずれも有意ではなかった（Fs ≤ 1.34, *n.s.* ; 図 5）したがって、自尊心に脅威が与えられても、集団間バイアスは強くはならないことが示唆される。

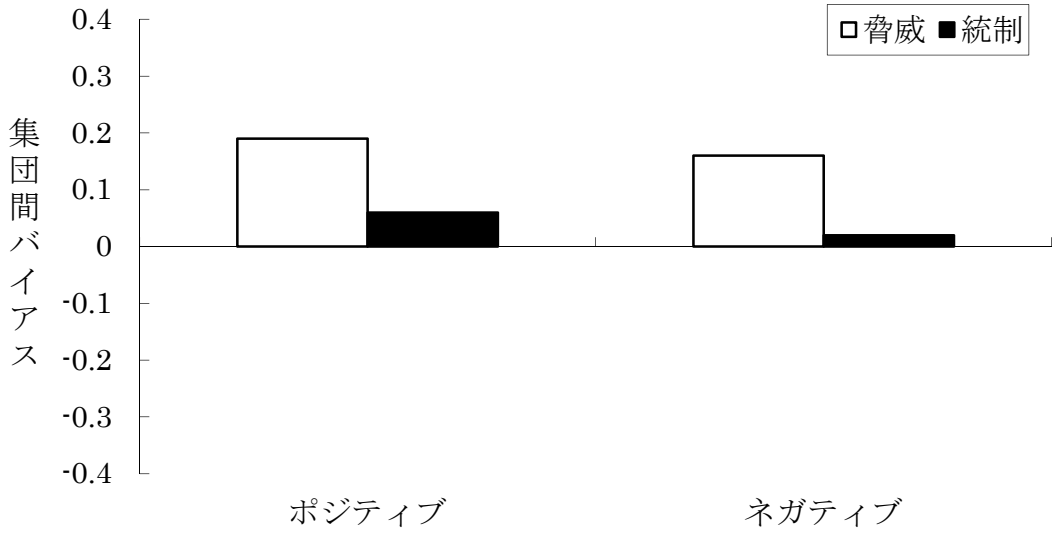


図 5. 自尊心脅威×感情価の各条件における集団間バイアス

5-1-4. 考察

研究 3 は「テストの成績が低い」という自尊心脅威のフィードバックを通じて、自己と内集団成員の類似性が脅威に対する防衛プロセスとして作用するかどうかを検証した。実験の結果、研究 3 の仮説と一致して、自尊心に脅威が与えられると、自己と内集団成員の類似性は高くなっていた。それに対して、自尊心に脅威が与えられても、自己と外集団成員の類似性は高くはならなかった。したがって、自己と内集団成員の合意性や集団同一視の変数と同様に（Alicke & Largo, 1995; Agostinelli et al., 1992; Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; McGregor & Marigold, 2003; McGregor et al., 2005; Pinkley et al., 1988; Sherman et al., 1984; Wisman & Koole, 2003）、自己と内集団成員の類似性も自己防衛機能をもつことが示唆される。

ただし、脅威条件における自己と内集団成員の類似性は高かったが、自己脅威の存在しない統制条件では自己と内集団成員の性格が似ているとは判断されていなかった。それに対し、研究 1 では脅威が存在しない状況でも自己と内集団成員は似た性格を持っていると認知されており、研究知見は一貫していない。その理由として、研究 1 では東京大学という既存の内集団を使用していたため、自己脅威がなくても類似性が高いと判断されていた可能性があげられる。一方で、研究 3 では最小条件集団パラダイムを使用していたことから、統制条件では自己と内集団成員の類似性は低く、自己脅威を受けたときにはじめて内集団成員との類似性が高くなったと解釈できる。

内集団と比較して、外集団との連合については、統制条件と脅威条件の両方の条件において自己と外集団成員は似ているとは認知されていなかった。すなわち、自己の性格特性は内集団成員に反映されるが、外集団成員には反映されないことが示唆される。さらに、自尊心に脅威が与えられても自己と外集団成員の類似性は低くならず、外集団との差異化を通じた自己防衛反応は生じていなかったと解釈できる。この結果から、自己防衛反応は自己と内集団の連合に対して選択的なプロセスであると考えられる。ただし、研究 3 は集団状況として内集団と外集団が対立的でない最小条件集団パラダイムを使用していたため、自己と外集団の差異化が生じにくかった可能性がある。そこで、自己と外集団成員の類似性を低く推定するなど、外集団との差異化も自己防衛反応として作用するかどうかは、ほかの集団状況をもちいたうえで検討する必要があろう。

なお、研究 3 は自己脅威の操作方法として脅威情報の有無を採用していた。このように、

脅威条件と比較して統制条件ではフィードバックが存在しないため、自己能力の不明確さやそれによって生じる不安が結果に影響したかもしれない。しかし、統制条件の参加者の課題正答率は高く（約 76%）、テスト結果に対する不安は低かったと解釈できる。このほか、自己能力の不明確さがもたらす効果として、統制条件の参加者は不確実性を低減しようと動機づけられた可能性が考えられる。しかし、Van den Bos, Poortvliet, Maas, Miedema, & Van den Ham（2005）によると、不確実性の高い状況では内集団との連合を強めることが指摘されている。この知見を本研究に当てはめると、脅威条件だけでなく統制条件でも内集団成員との類似性が高まると予測される。以上の予測は研究 3 の結果と一致していないため、自己能力の不明確さによって不確実性低減の動機が高まった可能性は低いと推測される。

自己能力の不明確さのほかに、脅威条件と統制条件の差異として、脅威条件でのみ自己に関する情報がフィードバックされることが挙げられる。脅威条件の参加者は自己能力が低いという教示を受けることで、自己や内集団成員の性格も否定的に認知したかもしれない。つまり、自己情報を係留点として自己と内集団成員の類似性が低く評価されており、自己防衛という動機的プロセスは生じていない可能性がある。しかし、自尊心脅威の操作と性格評定課題は別々の次元を対象としており（能力次元と性格次元）、思考力テストの結果により自己の能力を低く認知しても、自己と内集団成員の性格特性に関する認知が否定的になるとはかぎらない。実際に、自尊心に脅威が与えられても、自己や内集団成員の評定値は変化してはいなかった。よって、自己情報による影響は限定的であると推測される。

また、研究 3 は自尊心脅威の実験操作として、知的課題の失敗による脅威を与えている。これは、失敗領域とは別の、性格領域での補償的自己高揚が生じる条件となる。しかし、上記のように、自尊心に脅威が与えられても自己評定の値は変化していなかった。つまり、自己脅威を受けても性格領域での自己高揚は生じておらず、自己と内集団の類似性を通じた自己防衛反応が補償的自己高揚を反映している可能性は低いと考えられる。

ところで、集団間バイアスに関する結果では、内集団成員を外集団成員よりも好ましく評価するというバイアスは、いずれの条件においても観察されなかった。さらに、これらの集団間バイアスは自尊心脅威を受けても変化していなかった。したがって、「自尊心が低下すると集団間バイアスが大きくなる」という Hogg & Abrams（1990）の仮説は支持されなかった。しかし、一方で、この結果はポジティブ・ネガティブ非対称の観点からの予測を支持するものである（Mummendey & Otten, 1998; Wenzel & Mummendey, 1996）。研

究 3 では、参加者はポジティブな性格特性にくわえて、ネガティブな性格特性について判断をおこなっている。このように、ネガティブな特性判断を求められたことにより、外集団成員に対して否定的に評価することが望ましくないという規範意識が働いたのではないかと考えられる。

5-2. 研究 4 死の顕現性が自己と内集団成員の概念連合に与える影響

5-2-1. 目的

研究 3 は、自己が脅威にさらされると自己と内集団成員の類似性が高くなることを示した。次に、研究 4 では類似性という顕在指標ではなく、概念連合という潜在指標をもちいて自己と内集団の潜在的な連合が自己防衛の機能をもつかどうかを検証する。具体的には、自己脅威を受けると、自己と内集団成員の概念連合が強くなるかを分析する。さらに、研究 4 では自己脅威の実験操作として死の顕現性を使用し、自己と内集団の連合が死の脅威に対する防衛反応として作用するかどうかを明らかにする。先行研究では、死の脅威が高まると内集団への同一視が強くなることが示されている（Castano et al., 2002; Wisman & Koole, 2003）。したがって、自己と内集団の連合は自尊心脅威だけではなく、死の脅威を緩和する機能をもつと推測される。

また、理論編第 3 部で述べたように、自己と内集団の連合には非意識的な側面があることが示されている（Cadinu, & De Amicis, 1999; Coats et al., 2000; Devos & Banaji, 2003, 2005; Farnham et al., 1999; Greenwald & Farnham, 2000; Nosek et al., 2002; Otten, 2002a, 2002b; Otten & Epstude, 2006; Smith, 2002; Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996）。さらに、自己防衛反応は参加者の自覚をともなわず迅速に生じており（De Hart et al., 2004; Dodgson & Wood, 1998; Mikulincer et al., 2002; Tesser, 2000）、実際に潜在的自尊心が自己脅威を低減することが明らかになっている（Dijksterhuis, 2004; Greenwald & Farnham 2000; Rudman et al., 2007; Schmeichel et al., 2009）。よって、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は潜在的に生じるであろう。

研究 4 はこれらの先行研究をふまえ、自己と内集団成員の概念連合に焦点をあてたうえで、自己と内集団の潜在的な連合が死の脅威への防衛反応として機能するかどうかを検証する。実験仮説として、死の脅威が高まると自己と内集団成員の概念連合は強くなると予測される。その一方、死の脅威が高まっても外集団成員との概念連合は強くはならないであろう。

4-1. 死の脅威が高まると、自己と内集団成員の概念連合は強くなる

4-2. 死の脅威が高まっても、自己と外集団成員の概念連合は強くならない

もし死の脅威が高い MS 条件において統制条件よりも自己と内集団成員の概念連合が強ければ、自己防衛反応は潜在的に生じると解釈される。一方、死の脅威が高まっても自己と外集団成員の概念連合が強くならなければ、潜在的な自己防衛反応は外集団に対しては生起せず、内集団に対してのみ生じる選択的なプロセスであると考えられるであろう。

なお、研究 4 では自己と内集団成員・外集団成員の概念連合の測定法として、Smith らの反応時間パラダイムを使用する（e.g., Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996）。このパラダイムでは最初に事前評定課題を実施し、参加者は自己と内集団成員の性格についてそれぞれ 7 件法で評定をおこなう。つづけて、参加者はコンピュータをもちいて反応時間課題をおこなう。具体的には、コンピュータ画面上に事前評定課題と同一の性格特性語が 1 つずつ呈示され、参加者はその特性語が内集団成員（もしくは外集団成員）に当てはまるかどうかを 2 件法で判断する。この際、参加者にはできるだけ正確に判断し、できるだけ素早く反応キーを押すよう教示する。したがって、反応時間課題は性格評定を 2 件法で判断する、ターゲットが自己をふくまない、時間的制約がある、という 3 つの点で事前評定課題とは異なる。

自己と内集団成員の概念連合の指標は、事前評定課題と反応時間課題の結果から以下のように算出する。まず、事前評定課題における参加者の回答から、性格評定語を「一致語」と「不一致語」の 2 つに分類する。一致語とは、自分と内集団成員の間で判断が一致した単語であり（自分にも内集団成員にも当てはまる、もしくは、自分にも内集団成員にも当てはまらない）、不一致語とは、自分と内集団成員の間で判断が一致しない単語である（自分には当てはまるが内集団成員には当てはまらない、もしくは、自分には当てはまらないが内集団成員には当てはまる）。このときに、反応時間課題において一致語に対する反応時間が不一致語に対する反応時間よりも短ければ、自己と内集団成員の概念連合は強いと解釈できる。

Smith らの概念連合を測定するパラダイムは、どのような考え方にもとづいているのであろうか。彼らのパラダイムの基盤にあるのは、連合ネットワークモデルや活性化拡散の原理である（e.g., Collins & Loftus, 1975）。すなわち、もし自己概念と内集団成員の概念が連合しているならば、内集団成員の特性判断をするときに、内集団成員の概念だけではなく自己概念も活性化すると考えられる。その結果、自己概念が内集団成員の特性判断に影響することになる。具体的には、一致語のときは自己概念が内集団成員の特性判断を促進するが、不一致語のときは自己概念と内集団成員の概念の間で干渉が起き、内集団成員

の特性判断における反応時間が抑制される。そのため、一致語と不一致語の反応時間の差が大きいほど、自己概念と内集団成員の概念間の連合は強いと判断できる。

Smith らは内集団成員と外集団成員の 2 つのターゲットをもちいて実験をおこなった結果、自己と内集団成員の概念連合は強い一方で、自己と外集団成員の概念連合は弱いことを示している（Cadinu, & De Amicis, 1999; Coats et al., 2000; Otten, 2002a, 2002b; Otten & Epstude, 2006; Smith, 2002; Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996）。研究 4 は彼らの研究パラダイムを使用し、死の脅威が高まったときに自己と内集団成員および自己と外集団成員の概念連合がどのように変化するかを新たに検証する。

5-2-2. 方法

参加者

東京大学の学生 39 名（男性 27 名、女性 12 名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は、20.33 歳（*SD* = 0.84）であった。参加者は MS 条件、もしくは、統制条件にそれぞれランダムに割りあてられた。

実験手続き

実験はコンピュータをもちいて実施された。課題は、死の顕現性の実験操作、集団分類手続き、事前評定課題、反応時間課題、の順序でおこなわれた。すべての課題の終了後にディブリーフィングをおこない、実験を終了した。

死の顕現性の操作

野寺・唐沢・沼崎・高林（2007）にもとづき、質問項目をもちいて死の顕現性を操作した（資料 G）。具体的には、MS 条件の参加者は、「死ぬことはとても寂しいことである」、「死んでしまえば、もう人生の意義を追究できなくなる」など、死に関連した 25 の質問項目に回答した。それに対して、統制条件の参加者は、「子供の頃と比較して、味の好みが変化した」、「魚料理よりも肉料理をよく食べる」など、死とは無関連な 25 の質問項目に回答した。どちらの条件でも、自分の考えがそれぞれの項目にどの程度当てはまるかを回答するよう求めた。

なお、死の顕現性を操作した典型的な研究では、死に関する自由記述の質問をもちいている。たとえば、代表的なものとして、「自分の死について考えることがあなたに呼びおこす感情を簡単に書いてください」、「あなたの肉体が死んだあとに、何が起こると思います

か」などの質問が挙げられる。しかし、現在ではこれらの自由記述の質問以外にもさまざまな方法が使用されており、死に関する質問項目の回答も、自由記述と同様に文化的世界観の防衛反応を促進することが確認されている（Florian, Mikulincer, & Hirschberger, 2001; Greenberg, Simon, Harmon-Jones, Solomon, Pyszczynski, & Lyon, 1995）。よって、本研究の質問項目は、死の顕現性の操作として妥当であると考えられる。

集団分類手続き

死の顕現性の操作のあと、最小条件集団パラダイム（Tajfel et al., 1971）をもちいて参加者を 2 つの集団に分類した。課題内容は研究 3 と同一であり、参加者はコンピュータの画面上に表示される 2 枚の抽象画について、どちらが好きかをマウスで選択する課題を 10 試行おこなった。絵の判断課題の終了後、参加者は Cooper 集団と Thompson 集団の 2 つにランダムに分類された。

事前評定課題

次に、参加者は内集団や外集団（Cooper もしくは Thompson）をイメージしながら、「自分自身や各集団成員がどのような性格をしているか」を推定する課題をおこなった。性格特性語は齊藤・中村・遠藤・横山（2001）にもとづき、ポジティブな評価次元をあらわす特性語、および、ネガティブな評価次元をあらわす特性語を選定した（資料 H）。なお、一部の項目は、実験者が独自に作成している。ポジティブ特性語は、「陽気」、「話好き」などの 30 語であり、ネガティブ特性語は、「冷たい」、「弱い」などの 30 語であった。それぞれの特性語が自己や一般的な内集団成員、外集団成員（Cooper もしくは Thompson の集団成員）に対してどの程度当てはまるかを、「1：全く当てはまらない、2：ほとんど当てはまらない、3：あまり当てはまらない、4：どちらでもない、5：やや当てはまる、6：かなり当てはまる、7：非常に当てはまる」の 7 件法により回答を求めた。

反応時間課題

最後に、事前評定課題でもちいた 60 の特性語について、内集団成員と外集団成員に対する判断の反応時間を測定した。具体的には、特性語が一つずつ画面中央に表示され、参加者は表示されたそれぞれの特性語について、Cooper 集団と Thompson 集団の成員に当てはまるかどうかを判断した。事前評定課題では内集団成員と外集団成員に対する判断を 7 件法で求めたが、この課題では「当てはまる」か「当てはまらない」の 2 件法で回答を求めた。表示された特性語がそれぞれの集団成員に当てはまる場合は左手で「F」のキーを、当てはまらない場合は右手で「J」のキーを押すことによって反応をおこなった。また、参加

者は表示された特性語の判断をするときにできるだけ正確に判断し、できるだけ素早くキーを押すよう教示を受けた。試行開始後、表示された特性語に対して「F」か「J」の反応キーが押されると特性語は消え、500ms 後に次の特性語が表示された。特性語の刺激が画面に表示されてから正答のキーが押されるまでの時間を、反応時間として ms 単位で記録した。課題後、参加者に Cooper と Thompson のどちらの集団に所属していたかを確認し、ディブリーフィングをおこなったうえで実験を終了した。

5-2-3. 結果

操作チェック

実験操作の有効性を確認するために、操作チェックの回答を分析した。まず、最小条件集団の操作に関して、参加者全員が正しい所属集団の名前（Cooper もしくは Thompson）を選択しており、実験教示が正しく理解されていたことが確認された。

概念連合の算出

先行研究（Smith, et al., 1999; Smith & Henry, 1996）に準じ、事前評定課題における参加者の回答を分類した。まず自己の特性判断について、「5：やや当てはまる、6：かなり当てはまる、7：非常に当てはまる」の反応を「当てはまる」の反応であると分類し、「1：全く当てはまらない、2：ほとんど当てはまらない、3：あまり当てはまらない」の反応を「当てはまらない」の反応であると分類した。また、中点の「4：どちらでもない」の反応は欠損値として分析からは除外した。同様に、内集団成員（外集団成員）の特性判断について、「5：やや当てはまる、6：かなり当てはまる、7：非常に当てはまる」の反応を「当てはまる」の反応であると分類し、「1：全く当てはまらない、2：ほとんど当てはまらない、3：あまり当てはまらない」の反応を「当てはまらない」の反応であると分類した。さらに、中点の「4：どちらでもない」の反応は欠損値として分析からは除外した。

つづけて、自己と内集団成員（もしくは外集団成員）の間で判断が一致した特性語を一致語、自己と内集団成員（もしくは外集団成員）の間で判断が一致していない特性語を不一致語であると定義した。すなわち、「自己と内集団成員（もしくは外集団成員）のどちらにも当てはまる特性語」、および、「どちらにも当てはまらない特性語」は一致語であり、「自己には当てはまるが内集団成員（もしくは外集団成員）には当てはまらない特性語」、および、「自己には当てはまらないが内集団成員（もしくは外集団成員）には当てはまる特性語」

は不一致語と定義されることになる。以上の手続きにしたがい、60 の特性語はそれぞれの参加者ごとに一致語と不一致語に分類された。最後に、反応時間課題における不一致語の平均反応時間から一致語の平均反応時間を差し引いて、試行全体の標準偏差で除算した。その式を以下に示す。

$$\text{一致効果} = \frac{\text{不一致語反応時間} - \text{一致語反応時間}}{\text{試行全体の標準偏差}}$$

このようにして算出された値を概念連合の指標（一致効果）として使用した。研究 4 において内集団成員に対する一致効果の値が大きいほど、参加者にとって自己と内集団成員の概念連合が強いことを意味する。同様に、外集団成員に対する一致効果の値が大きいほど、参加者にとって自己と外集団成員の概念連合が強いことを意味する。なお、一致効果の分析では、事前評定と反応時間課題で判断が不一致な単語も分析にふくめている。予備分析として、性別と所属集団の名前（Cooper vs. Thompson）、特性語の感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の要因の効果を検証した結果、各要因は以下で報告する変数に対して有意な主効果・交互作用を持っていなかったため、以降の分析からは除外した。

一致効果

まず、MS 条件と統制条件のそれぞれにおいて、自己と内集団成員および自己と外集団成員の概念連合が強いかどうかについて検証をおこなった。具体的には、死の顕現性（MS vs. 統制）とターゲット（内集団成員 vs. 外集団成員）の各条件における一致効果の値が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定によって分析した。その結果、内集団成員については、MS 条件（$M = 0.43$; $SD = 0.42$）において 0 よりも有意に大きいという結果が得られたが、統制条件（$M = 0.12$; $SD = 0.54$）では 0 との差は有意ではなかった（$t(15) = 3.98$, $p < .01$; $t(22) = 1.05$, *n.s.*）。したがって、死の脅威が高まったときのみ、自己と内集団成員の概念連合が強いと解釈できる。それに対し、外集団成員については、MS 条件（$M = -0.01$; $SD = 0.36$）と統制条件（$M = 0.05$; $SD = 0.43$）のどちらの条件においても、0 との間に有意差は観察されなかった（$t(15) = 0.03$, *n.s.*; $t(22) = 0.49$, *n.s.*）。つまり、自己と外集団成員の概念連合は、死の脅威の有無にかかわらず強くはないと推測される。

次に、死の顕現性が内集団成員・外集団成員との概念連合に与える効果について検証をおこなった。具体的には、一致効果の値について、死の顕現性（MS vs. 統制）を参加者間

要因、ターゲット（内集団成員 vs. 外集団成員）を参加者内要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、ターゲットの主効果（$F(1, 37) = 6.91, p < .05$）、および、死の顕現性×ターゲットの交互作用効果（$F(1, 37) = 3.45, p < .10$）が有意であった。まず、ターゲットの主効果に関して、一致効果の値は内集団成員（$M = 0.25; SD = 0.52$）が外集団成員（$M = 0.03; SD = 0.41$）よりも有意に高かった。したがって、自己と内集団成員の概念連合は外集団成員よりも強いと考えられる。さらに、死の顕現性×ターゲットの交互作用効果に関して下位検定をおこなったところ、内集団成員条件における死の顕現性の単純主効果、および、MS 条件におけるターゲットの単純主効果が有意であった（図 6）。

死の顕現性の単純主効果に関して、内集団成員に対する一致効果の平均値は、MS 条件が統制条件よりも有意に高かった（$F(1, 74) = 4.29, p < .05$）。つまり、死の脅威が高まると、自己と内集団成員の概念連合は強くなることが明らかになった。一方で、外集団成員に対する一致効果の値は、MS 条件と統制条件の間で有意差はみられなかった（$F(1, 74) = 0.10$, *n.s.*）。したがって、死の脅威が高まっても、自己と外集団成員の概念連合は強くならないことが示唆される。

また、ターゲットの単純主効果について、MS 条件では内集団成員に対する一致効果が外集団成員に対する一致効果よりも有意に高かった（$F(1, 37) = 10.07, p < .01$）。よって、死の脅威が高まった状況では、自己と内集団成員の概念連合が外集団成員よりも強くなると解釈される。その一方、統制条件では、一致効果の値は内集団成員と外集団成員の間で有意差は観察されなかった（$F(1, 37) = 0.30$, *n.s.*）。すなわち、死の脅威が高まっていない場合、自己と内集団成員の概念連合の強さは自己と外集団成員の概念連合と変わらないことが示唆される。

なお、内集団成員に対する一致効果の値と事前評定課題における外集団成員の評定値の間には、有意な相関関係が観察されなかった（$r = -.05$, *n.s.*）。この結果から、自己と内集団成員の概念連合を強めても、外集団成員への態度は否定的にはならないと考えられる。

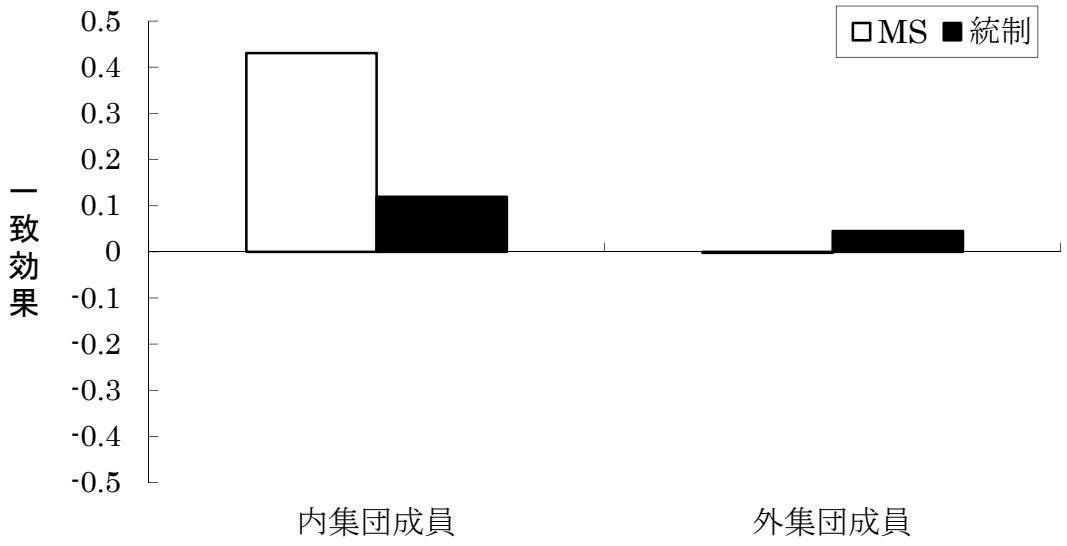


図 6. 死の顕現性×ターゲットの各条件における一致効果

集団間バイアス

くわえて、事前評定課題における集団間バイアスについて検討をおこなった。研究 3 と同様に、内集団成員に対する評定値から外集団成員に対する評定値を差し引いた値を集団間バイアスと定義した。最初に、MS 条件と統制条件のそれぞれにおいて集団間バイアスが生じているか、すなわち内集団成員が外集団成員よりも好ましく評価されているかどうかを検証した。具体的には、死の顕現性（MS vs. 統制）と感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の 4 つの条件において、集団間バイアスの平均値が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定により分析した。その結果、ポジティブな評価次元では、MS 条件（$M = 0.14$; $SD = 0.66$）と統制条件（$M = -0.10$; $SD = 0.47$）の各条件において、0 よりも大きいという結果は得られなかった（$t(15) = 0.86$, *n.s.*; $t(22) = 1.01$, *n.s.*）。また、ネガティブな評価次元でも、MS 条件（$M = -0.15$; $SD = 0.71$）と統制条件（$M = -0.12$; $SD = 0.60$）において、0 との間に有意差は見られなかった（$t(15) = 0.83$, *n.s.*; $t(22) = 1.00$, *n.s.*）。したがって、死の脅威の有無や感情価の評価次元にかかわらず、内集団成員は外集団成員よりも好ましく評定されてはいなかったと考えられる。

平均値に関する分析では、集団間バイアスはいずれの条件においても生じていなかった。ただし、その平均値が死の顕現性の条件間で異なる可能性が指摘できる。そこで、死の脅威が高まると集団間バイアスが強くなるか、つまり内集団成員と外集団成員の間の評価差

が大きくなるかどうかについて検証をおこなった。具体的には、集団間バイアスの値に対して、死の顕現性（MS vs. 統制）を参加者間要因、感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）を参加者内要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、死の顕現性と感情価の各主効果、死の顕現性×感情価の交互作用効果はいずれも有意ではなかった（Fs ≤ 2.30, *n.s.*；図 7）。よって、死の脅威が高まっても、集団間バイアスは強くはならないと示唆される。

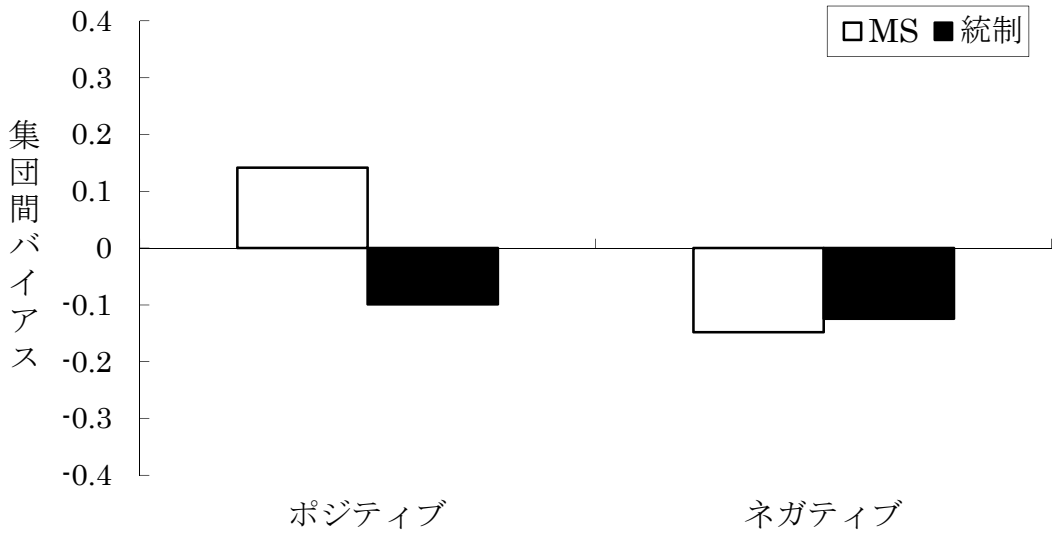


図 7. 死の顕現性×感情価の各条件における集団間バイアス

5-2-4. 考察

研究 4 では死の顕現性という自己脅威をもちいて、自己と内集団の潜在的な連合を通じた自己防衛プロセスの検証をおこなった。Smith らの反応時間パラダイムをもちいた実験の結果、仮説と一致して、死の脅威が高まると自己と内集団成員の概念連合は強くなっていた。よって、自己と内集団の潜在的連合は自己防衛機能をもつと示唆される。それに対し、死の脅威が高まっても、自己と外集団成員の概念連合は強くはならなかった。つまり、自己と外集団の潜在的な連合は、少なくとも最小集団状況では自己防衛機能をもたないと考えられる。先行研究は内集団同一視が死の脅威を低減することを示してきたが（Castano et al., 2002; Wisman & Koole, 2003）、研究 4 は自己と内集団成員の概念連合が死の脅威の低減とかかわっていることを明らかにした。

また、概念連合の平均値の結果からは、MS 条件における自己と内集団成員の概念連合のみが強く、MS 条件における自己と外集団成員の概念連合や、統制条件における自己と内集団成員・外集団成員の概念連合は強くはなかった。先行研究は自己脅威が存在しなくても自己と内集団成員の概念連合が強いことを示しているが（Cadinu, & De Amicis, 1999; Coats et al., 2000; Otten & Epstude, 2006; Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996）、研究 4 では脅威が存在しない統制条件においても自己と内集団成員の概念連合は強くはなかった。したがって、研究知見は一貫してはいない。しかし、研究 4 は研究 3 と同様に、最小条件集団パラダイムを使用しているという点で先行研究とは異なる。このように新規の内集団をもちいた結果として、脅威が存在しない状況では内集団成員との概念連合は弱かったと解釈できる。また、外集団は自己との関連性が低いため、死の脅威の有無にかかわらず概念連合は強くはないと判断できるであろう。

なお、研究 4 の限界として、ポジティブ・ネガティブ感情を測定していなかったために、死の顕現性はネガティブな感情を操作していたのではないかという可能性が指摘できる。すなわち、研究 4 で得られた有意な効果は死の脅威という人間の根源的な恐怖によるものではなく、死の顕現性がネガティブ感情を高めたことによる効果であると解釈できるかもしれない。研究 4 は感情をそもそも測定しておらず、この代替説明を完全に排除することは困難であるが、これまでの先行研究ではネガティブ感情による説明とは矛盾する結果が得られている。

まず、多くの研究者の直観に反して、死の脅威の実験操作がネガティブ感情を引きおこすことは稀であり、場合によってはポジティブ感情を引きおこすこともある（Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, Solomon, Arndt, & Schimel, 2004）。さらに、ネガティブ感情は文化的世界観の防衛反応を抑制する場合もあることや、統制条件として将来の不安などの脅威を実験的に操作しても、死の脅威と同様の効果は生起していないことが確認されている（Greenberg, Simon, Harmon-Jones, Solomon, Pyszczynski, & Lyon, 1995）。よって、研究 4 で得られた有意な効果はネガティブ感情ではなく、死の顕現性の操作によるものであると判断できるであろう。

また、集団間バイアスに関しては、研究 3 と同様の結果が観察されている。すなわち、内集団成員は外集団成員よりも好ましく評価されておらず、集団間バイアスはそれぞれの条件において生じていなかった。くわえて、これらの集団間バイアスは自尊心脅威を受けても変化していなかった。その理由として、ネガティブな性格特性の評価を求められたこ

とにより、外集団成員に対して否定的に評価することが望ましくないと参加者が判断したと考えられる。この結果は、ポジティブ・ネガティブ非対称の観点からの予測を支持しているといえよう（Mummendey & Otten, 1998; Wenzel & Mummendey, 1996）。

実証編第 2 部要約

これまでに、実証編第 2 部は第 1 部の知見をふまえて、自己と内集団の連合がもたらす自己防衛機能について検証をおこなってきた。具体的には、研究 3 は自尊心に脅威が与えられると自己と内集団成員の類似性が高くなるが、自己と外集団成員の類似性は高くはならないことを示している。さらに、研究 4 は死の脅威が高まると自己と内集団成員の概念連合が強くなるが、自己と外集団成員の概念連合は強くはならないことを明らかにした。さらに、これらの研究では参加者にとって事前知識や相互作用が存在しない最小条件集団パラダイムを使用している。したがって、類似性や概念連合を通じた防衛反応は、新規の内集団であっても生起すると解釈できる。実証編第 2 部の 2 つの研究を通じて得られた知見は、次の 3 点に要約することができるであろう。

1. 自己脅威に対する防衛反応は顕在的・潜在的に生じる
2. 自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は生じるが、自己と外集団の連合を通じた自己防衛反応は生起しない
3. 自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的な防衛反応は、実験場面で作成された新規の内集団であっても生じる

実証編第 3 部 内集団の地位に応じた自己防衛プロセス

6-1. 研究 5 自尊心脅威と集団地位が自己と内集団成員の類似性に与える影響

6-1-1. 目的

実証編第 2 部は、自己と内集団の顕在的・潜在的な連合が自己防衛機能をもつことを明らかにした。つづいて、実証編第 3 部では、内集団の地位に応じた顕在的・潜在的な自己防衛反応や、自己防衛反応を通じて主観的幸福感が維持されるプロセスについて検証する。自己と内集団の連合に関する指標として、研究 5 は自己と内集団成員の類似性、研究 6 では内集団同一視（顕在指標）と概念連合（潜在指標）の 2 つの指標をもちいる。また、自己脅威を操作するために、研究 5 は自尊心脅威、研究 6 は死の顕現性をそれぞれ使用する。

まず研究 5 は、自尊心を向上させる効果が小さい内集団の場合に、その内集団成員との類似性を通じた自己防衛反応が抑制されるかどうかを分析する。具体的には、内集団の地位が低い条件と中立の条件を比較し、地位が低い条件の参加者は中立条件よりも自己防衛反応が弱くなるかを検証する。Correll & Park（2005）や Castano & Deschesne（2005）は、内集団との連合が集団所属と自尊心向上の 2 つの欲求を満たすことを指摘している。この指摘をふまえると、内集団との連合は集団所属と自尊心向上の欲求を満たすことで、自己を防衛していると考えられる。一方で、もし自尊心を向上させる効果が小さい場合は、脅威状況において個人の精神状態を維持できない可能性があるために、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は弱くなると予測される。

本論文では、これらの「自尊心を向上させる効果の大きさ」を実験的に操作するために、集団地位の要因を使用する。集団地位に関する過去の研究は、内集団の地位が高いほど自尊心が向上することを示している（Crocker et al., 1998; Ellemers & Barreto, 2001; Ellemers et al., 1988; Sachdev & Bourhis, 1987）。さらに、集団地位が高いほど集団同一視は強く、主観的幸福感は高くなる傾向がある（Bettencourt et al., 2001; Ellemers, 1993; Ellemers et al., 1992; Ellemers et al., 1988; Ellemers et al., 1990; Sachdev & Bourhis, 1987）。つまり、内集団の地位が高いほど自尊心を向上できるために、集団同一視は強く、主観的幸福感は高くなる。反対に、地位が低い場合は自尊心の向上には役に立たないため、集団同一視は弱く、主観的幸福感は低くなる。

以上のように、集団地位は自己と内集団の連合の強さに影響を与えている。この影響は、自己脅威状況においても適用できるであろう。すなわち、自尊心脅威は自己と内集団成員の類似性を通じた自己防衛反応を促進するが、集団の地位が低いと自尊心を向上させる効果が小さいため、類似性を通じた自己防衛反応は弱くなると予測される。その一方で、自己脅威が存在しない統制条件では、次の 2 つの予測が導かれる。第 1 に、集団地位は内集団との連合の強さを規定するという先行研究をふまえると、統制条件でも集団の地位が低いと自己と内集団成員の類似性は低く認知されると考えられる。第 2 に、統制条件では自尊心を向上させる必要性がもともと低いため、集団の地位が低くても類似性の程度は変化しないと予測される。本論文の研究 3 と 4 の統制条件では、最小集団状況という制約はあるものの、自己と内集団の連合は強くはなかった。この結果にもとづくと、集団地位が低くても類似性はそれ以上弱くはならないと推測できる。つまり、自己脅威が存在しない場合は集団地位の効果はみられないであろう。これらの議論から、研究 5 の仮説は以下の通りとなる。

5-1. 自尊心に脅威が与えられたときに、内集団の地位が低いと類似性は低くなる

5-2. 自尊心への脅威が存在しないときは、内集団の地位が低くても類似性は低くならない

もし脅威条件において、内集団の地位が低い条件の参加者がそうでない条件よりも自己と内集団成員の類似性を低く認知していれば、内集団の地位が低い場合に類似性を通じた自己防衛反応は弱くなると解釈できるであろう。

6-1-2. 方法

参加者

東京大学の学生 54 名（男性 31 名、女性 23 名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は 19.72 歳（$SD = 1.02$）であった。参加者は自尊心脅威（脅威 vs. 統制；参加者間）×集団地位（低地位 vs. 中立；参加者間）の 4 条件にランダムに割りあてられた。

実験手続き

実験はコンピュータをもちいて実施された。課題は、自尊心脅威の操作、集団地位の操作、類似性の測定、の順序でおこなわれた。すべての課題の終了後にディブリーフィングをおこない、実験を終了した。

自尊心脅威の操作

ウィスコンシンカード分類テストをもちいて、自尊心に対する脅威の有無を実験的に操作した。手続きは研究 3 と同一ではあるが、あらためて概略を示すと以下の通りである。参加者はコンピュータ上で、色・形・数がそれぞれ異なる 4 種類のカードのなかから、ターゲットのカードと一致するものを選択する課題をおこなった。その際、参加者はできるだけ素早く判断し、できるだけ多くの正答を得るように教示を受けた。

自尊心に対する脅威を与えるために、脅威条件と統制条件でテストの難易度を変更し、脅威条件では 3 回続けて正解すると分類基準が変化するが、統制条件では 6 回連続で正解すると分類基準が変化するようにプログラミングした。さらに、脅威条件では、課題直後にテスト結果に関するフィードバックを提示し、過去に同じ大学で実施したテストの結果と比較して、参加者の偏差値が 43、得点が 35 点であると教示し、ほかの学生と比較した相対得点をグラフにより視覚的に表示した。統制条件では、このような結果フィードバックは表示されなかった。

自尊心脅威の実験操作のあと、操作チェックとして状態自尊心（阿部・今野, 2007）を測定した。状態自尊心の質問項目は、「いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる」、「いま、自分はだめな人間であると感じる」など、9 項目から構成されており、参加者は「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で評定をおこなった。

集団地位の操作

実験は東京大学の学生を対象に実施し、内集団として東京大学、外集団としてアメリカのコーネル大学（Cornell University）を設定した。参加者には、この実験は東京大学とコーネル大学による共同プロジェクトの一環として実施しており、前回は集団成員の創造性に関する課題、今回は自己と所属大学の関係性に関する課題をおこなうと説明した。さらに、内集団の地位を実験的に操作するために、低地位条件では 2 つの大学の創造性に関する情報を参加者に提示した。具体的には、1～5 人のグループで創造性の課題得点を比較した結果、東京大学のグループはコーネル大学のグループよりも創造性がつねに低かったと説明し、仮想の得点結果を棒グラフによって視覚的に表示した（資料 I）。その一方、中立条件では、このような情報は提示しなかった。

類似性の測定

次に、自己と内集団成員の類似性を測定するために、性格評定課題をおこなった。性格

特性語は、ポジティブな評価次元をあらわす特性語、および、ネガティブな評価次元をあらわす特性語を工藤（2004）より選定してもちいた。ポジティブ特性語は、「明るい」、「まじめ」、「良心的」、「意欲的」、「思いやりがある」の 5 語であり、ネガティブ特性語は、「でしゃばり」、「いじわる」、「感じがわるい」、「なまいき」、「軽率」の 5 語であった。それぞれの特性語が自分と一般的な内集団成員（東京大学）に対してどの程度当てはまるかを、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。

6-1-3. 結果

操作チェック

自尊心脅威の操作の効果を検証するために、状態自尊心の項目の平均値について、t 検定をおこなった。その結果、脅威条件（$M = 3.32$; $SD = 0.92$）と統制条件（$M = 3.65$; $SD = 0.85$）の間で、状態自尊心の値に有意差はみられなかった（$t(52) = 1.39$, *n.s.*）。よって、自尊心脅威の操作チェックに関する予測は支持されなかった。

類似性

研究 1・3 と同様に、自己と内集団成員の類似性の得点を算出した。具体的には、性格評定課題における「自己の特性判断」と「内集団成員の特性判断」の参加者内の相関を算出したあと、フィッシャーの Z 変換をもちいて正規化した値を以下の分析における従属変数として使用した。予備分析として、性別と特性語の感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の効果を検証したところ、それぞれの要因は以下で報告するすべての変数に対して有意な主効果・交互作用効果を持っていなかったため、以降の分析からは除外した。

まず、自尊心脅威と集団地位のそれぞれの条件において、自己と内集団成員が似ていると認知されているかどうかについて検証をおこなった。具体的には、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）と集団地位（低地位 vs. 中立）の各条件における自己と内集団成員の類似性得点が 0 と有意に異なるかどうかを t 検定をもちいて分析した。その結果、内集団の地位が低い場合は、脅威条件（$M = -0.16$; $SD = 0.41$）と統制条件（$M = -0.09$; $SD = 0.36$）のどちらの条件においても、0 との間に有意差は観察されなかった（$t(13) = 0.86$, *n.s.*; $t(14) = 0.18$, *n.s.*）。すなわち、自己と低地位の内集団成員の類似性は、自尊心脅威があるかどうかにかかわらず高く認知されてはいなかったと解釈できる。その一方で、内集団の地位が中立の場合は、

脅威条件（$M = 0.21$; $SD = 0.30$）において 0 よりも有意に大きいという結果が得られたが、統制条件（$M = 0.10$; $SD = 0.50$）では 0 との差は有意ではなかった（$t(11) = 2.30$, $p < .05$; $t(12) = 0.71$, *n.s.*）。したがって、自己と中立の内集団成員の類似性は、自尊心に脅威が与えられたときに高く認知されていたと示唆される。

次に、自尊心脅威と集団地位が自己と内集団成員の類似性に与える影響について検証をおこなった。具体的には、自己と内集団成員の類似性得点について、自尊心脅威（脅威 vs. 統制）と集団地位（低地位 vs. 中立）を参加者間要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、集団地位の主効果が有意であり（$F(1, 50) = 5.85$, $p < .05$）、そのほかの主効果・交互作用効果は有意ではなかった（Fs$(1, 50) \leq 0.57$, *n.s.*）。集団地位の主効果に関して、自己と内集団成員の類似性は低地位条件（$M = -0.01$; $SD = 0.35$）が中立条件（$M = 0.16$; $SD = 0.31$）よりも有意に低かった。自尊心脅威×集団地位の交互作用効果は有意ではなかったが、事前仮説にもとづき下位検定をおこなった。その結果、脅威条件における集団地位の単純主効果が有意であった（図 8）。

集団地位の単純主効果に関して、脅威条件では、自己と内集団成員の類似性は低地位条件が中立条件よりも有意に低かった（$F(1, 50) = 5.04$, $p < .05$）。したがって、自尊心への脅威が存在する状況では、内集団の地位が低いと自己と内集団成員の類似性は低くなることが明らかになった。その一方、統制条件では、自己と内集団成員の類似性は低地位条件と中立条件の間で変化がみられなかった（$F(1, 50) = 1.38$, *n.s.*）。つまり、自尊心への脅威が存在しない場合は、内集団の地位が低くても自己と内集団成員の類似性は低くならないと示唆される。

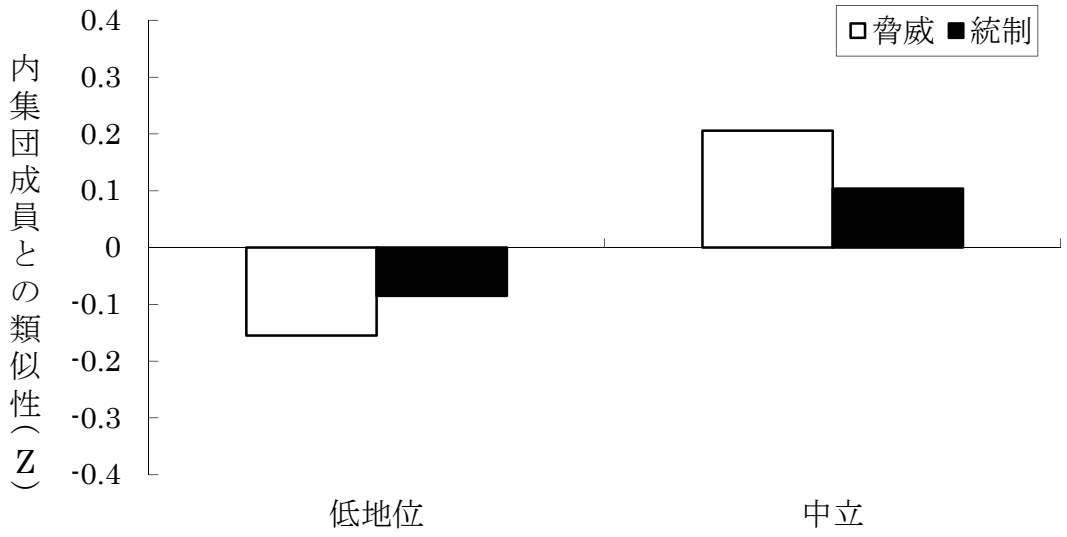


図 8. 自尊心脅威×集団地位の各条件における内集団成員との類似性

このほか、評定値差の絶対値の平均をもちいて、参加者内相関にもとづく類似性の結果が再現されるかどうかを検証した。その結果、脅威条件における自己と内集団成員の評定値差の絶対値は、低地位条件（$M = 1.47$; $SD = 0.54$）と中立条件（$M = 1.10$; $SD = 0.38$）の間で有意差はみられなかった（$F(1, 50) = 2.27$, *n.s.*）。同様に、統制条件でも自己と内集団成員の評定値差の絶対値は、低地位条件（$M = 1.86$; $SD = 0.86$）と中立条件（$M = 1.63$; $SD = 0.60$）で有意差が観察されなかった（$F(1, 50) = 0.93$, *n.s.*）。このように、研究 5 において、参加者内相関で観察された有意な効果は再現されなかった。しかし、そうであっても、平均値は参加者内相関と同様のパターンを示しており、評定値差の絶対値で有意な効果が得られなかったことは、本論文全体の主張に大きな影響を与えるものではないと思われる。

また、自己評定や内集団成員の評定が自尊心脅威によって変化しているかについて、分析をおこなった。これまでの研究と同様に、「ネガティブな評価次元について数値を逆転したうえでの平均値」を算出し、自己評定や内集団成員の評定として定義した。すなわち、自己や内集団成員の評定値が大きいほど、それぞれのターゲットを望ましく認知していることを意味する。各評定値について分散分析を実施した結果、自尊心脅威や集団地位の効果は有意ではなかった（Fs ≤ 1.17, *n.s.*）。よって、自尊心に脅威が与えられても、自己や内集団成員の評定値は変化していないと推測される。

6-1-4. 考察

研究 5 の目的は、内集団の地位が低い場合に自己防衛反応が抑制されるかどうかを調べることであった。その結果、仮説と一致して、内集団の地位が低いと、自己脅威状況において自己と内集団成員の類似性が低く推定されることが示された。地位が低い集団は自尊心を向上させる効果が小さいため、自尊心に脅威が与えられたときに自己防衛反応が弱くなると考えられる。このように、研究 5 は自己と内集団成員の類似性を通じた自己防衛反応が集団地位に応じて変化することを明らかにした。

その一方、自己脅威が存在しない状況では、集団の地位が低くても自己と内集団成員の類似性は低くはならなかった。その理由として、自己脅威が存在しない場合は、自尊心を向上させる必要性がもともと低いからであると考えられる。また、これまでの研究 3・4 では、自己と内集団成員の類似性や概念連合を通じた自己防衛反応は、最小集団状況で生じていた。研究 5 では既存の集団状況を使用しており、類似性を通じた自己防衛反応は新規集団だけでなく既存集団においても生起すると推測される。

なお、分散分析では脅威条件における集団地位の単純主効果が有意であったが、自尊心脅威×集団地位の交互作用効果や、中立条件における自尊心脅威の単純主効果は有意とはならなかった。特に、これまでの研究 3 や 4 をふまえるならば、内集団の地位が中立の場合に、自尊心脅威を受けると自己と内集団成員の類似性は高くなると考えられる。つまり、中立条件における自尊心脅威の単純主効果が有意になると予測されるであろう。しかし、この予測に反し、内集団の地位が言及されていない状況では、自尊心に脅威が与えられても内集団成員との類似性は高くならなかった。この結果はどう解釈できるであろうか。

一つの可能性として、研究 5 では中立条件でも「東京大学とコーネル大学で共同研究を実施している」と参加者に伝えることで、実験者の意図に反して、東京大学の集団地位がコーネル大学と比較して相対的に低下したかもしれない。つまり、参加者はコーネル大学の集団地位をもともと高く認知しており、地位の高低に関する情報を与えていなくても、「東京大学は相対的に地位が低い」という印象が形成された可能性が指摘できる。実際に、参加者の内観報告では、集団地位の条件にかかわらず、「東京大学はコーネル大学よりもレベルが低い」という感想がみられた。

このように、研究 5 の中立条件では、参加者にとって内集団（東京大学）の地位が低下していたと解釈できる。その結果として、中立条件における自尊心脅威の単純主効果が有

意にならなかったのであろう。すなわち、内集団の地位がほかの研究 3 や 4 とくらべて相対的に低下していたために、中立条件では自己脅威を受けても自己と内集団成員の類似性が高まらなかった可能性がある。しかし、そうであったとしても、研究 5 の低地位条件における内集団の地位は、中立条件よりもさらに低いと考えられる。実際に、自己脅威状況では、低地位条件の参加者は中立条件の参加者よりも自己と内集団成員の類似性を低く認知していた。以上のように、低地位条件と中立条件の地位の差が自己防衛反応の強さを規定することを示したという点で、研究 5 の結果は着目に値するであろう。

また、平均値の結果では、脅威条件における自己と中立の内集団成員の類似性が高かった。それに対し、統制条件における自己と中立の内集団成員の類似性や、低地位の内集団成員との類似性は自尊心脅威の有無にかかわらず高くなかった。それでは、なぜ統制条件において自己と中立の内集団成員の類似性は高く認知されていなかったのであろうか。その理由として、上述したように、集団地位の操作による影響があげられる。すなわち、研究 5 の中立条件では、実験教示の段階で内集団と外集団の対比が生じていたため、内集団の地位が相対的に低下した可能性がある。その結果として、自尊心への脅威が存在しない状況では、中立条件でも類似性が高く認知されていなかったと考えられる。その一方で、内集団の地位がより大きく低下した低地位条件では、自尊心脅威のどちらの条件でも自己と内集団成員の類似性は高く認知されておらず、自尊心脅威が存在しても類似性は高まらなかったと解釈できるであろう。

このほか、研究 5 の操作チェックの分析では、自尊心に脅威が与えられても状態自尊心は低下してはいなかった。この結果にもとづくと、自尊心脅威の操作が実験者の意図した通りに作用しているかが明らかではないと思われる。しかし、同一の操作手法をもちいた研究 3 では自尊心脅威によって状態自尊心が低下しており、研究 5 も有意差はないものの、脅威条件における状態自尊心の平均値は統制条件よりも低かった。さらに、先行研究でも自尊心脅威を同様の手法で操作していることから、研究 5 の自尊心脅威の操作は妥当であると考えられる。それでは、なぜ研究 5 では操作チェックで予測を支持する結果が得られなかったのであろうか。

まず、自尊心脅威の操作の直後に状態自尊心を尋ねたことで、脅威条件の参加者にリアクタンスが生起したかもしれない。すなわち、「テスト成績が低い」という否定的フィードバックによって参加者の状態自尊心は低下したものの、同時にそれを認めたくないという否認の心理的プロセスが生じた可能性がある。この場合、自尊心脅威の操作自体は成功し

たといえるが、操作チェックの手続きを改善する必要があろう。具体的には、操作チェックの項目として参加者の心理状態を直接尋ねるのではなく、フィードバック情報の解釈を尋ねるやり方が考えられる。たとえば、「テスト成績は否定的な内容をふくんでいましたか」や「テスト結果が妥当だと思いますか」など、フィードバック情報に関する質問を使用することで、参加者のリアクタンスは相対的に低下するであろう。

一方、自尊心脅威の条件間で、参加者の状態自尊心の程度がもともと等価ではなかった可能性も否めない。つまり、研究 5 では参加者の条件配置が偏っており、もともと自尊心が高い人が脅威条件に多かったため、状態自尊心の値に有意差がなかったかもしれない。本論文はすべての実験で参加者を各条件にランダムに割りあてていることから、この可能性は低いであろう。しかし、バランス化や一定化の手続きを採用することで、条件配置の偏りを防ぐことができると考えられる。たとえば、事前に参加者の状態（もしくは特性）自尊心を測定してから各条件に配置することで、自尊心の程度が条件間で等価であることを保証することができる。また、事前に参加者の自尊心を測定することで、「状態自尊心が自己脅威によって一時的に低下し、自己と内集団の連合の強化によって回復する」という一連のプロセスを示すことも可能になる。

この手続きについては、同一の変数を一度に複数回測定した場合、先行の測定値が後続の測定値に影響をおよぼすと想定できるために、本論文では採用していない。しかし、実験の 1 週間前など、十分な間隔を置いたうえで事前の予備調査を実施することで、事前測定の影響は少なくなる。一方、同一のセッションで従属変数を複数回測定すると事前測定の影響があるため、「状態自尊心が自己脅威によって一時的に低下し、自己と内集団の連合の強化によって回復する」という一連のプロセスを検証することには困難がともなうと思われる。以上の議論をふまえ、今後はバランス化などの手続きをもちいて、参加者の条件配置をより厳密におこなうことが求められるであろう。

6-2. 研究 6 死の顕現性と集団地位が内集団同一視と概念連合に与える影響

6-2-1. 目的

研究 5 は集団地位の要因を組みいれ、自尊心脅威が存在する場合、低地位の内集団に対して自己と内集団成員の類似性が低くなることを明らかにした。したがって、自尊心を向上させる効果が小さい内集団に対して、類似性を通じた自己防衛反応は弱くなると考えられる。それでは、低地位集団との心理的連合は、つねに自己防衛機能をもたないのであろうか。研究 6 では内集団の地位が低い場合でも、潜在的には自己防衛反応が生じる余地があると仮定する。その理由は次の通りである。

理論編第 3 部や研究 5 で記述したように、自己と内集団の連合は集団所属と自尊心向上の 2 つの欲求を満たすことで自己を防衛している。高地位の内集団は自尊心を向上させる効果が高いために、その内集団との連合を通じた自己防衛反応が強くなると仮定される。それに対し、低地位の内集団は自尊心を向上させる効果が小さいため、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は弱くなる。この予測と一致して、研究 5 では低地位集団との類似性を通じた自己防衛反応は弱くなっていた。よって、自己と内集団との連合を通じた自己防衛反応は、自尊心向上のプロセスにもとづいていると考えられる。

しかし、上記の通り、自己と内集団の連合の強化は自尊心を向上させるだけでなく、集団所属の欲求を満たす機能をもっているのである（Castano & Deschesne, 2005; Correll & Park, 2005; Williams, 2007, 2009）。Castano らは所属欲求の効果について、ポジティブやネガティブといった感情価や性質にかかわらず自己を内集団に同化させることで、内集団との関係性そのものが脅威状況において不安を低減すると指摘している（Castano & Deschesne, 2005; Castano et al., 2002）。この指摘をふまえると、低地位の内集団であっても、集団所属の欲求を満たすことにより、自己を防衛できる可能性がある。

本論文では自己と内集団の連合について顕在指標と潜在指標の 2 つを使用しているが、それぞれの指標は自尊心向上と所属欲求のどちらのプロセスを反映しているのであろうか。集団地位に関する先行研究は、内集団の地位が高いほど集団同一視が強くなることを示している（Bettencourt et al., 2001; Ellemers, 1993; Ellemers et al., 1992; Ellemers et al., 1988; Ellemers et al., 1990; Sachdev & Bourhis, 1987）。つまり、集団同一視は集団地位の高さによって規定されており、自尊心を向上させる効果が大きいほど自己と内集団の連

合は強くなる。さらに、研究 5 では、自己脅威状況において低地位の内集団成員との類似性は低くなっていた。このように、集団同一視や類似性など、内集団との連合を通じた顕在的防衛は少なくとも自尊心向上のプロセスをふくむと判断できる。

その一方、概念連合など、自己と内集団の連合を通じた潜在的防衛は自尊心向上でなく、所属欲求を充足するというプロセスを反映しているかもしれない。その理由として、たとえば研究 4 の結果では、自己と内集団成員の概念連合の強さは特性語の感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）によって影響もしくは調整されてはいなかった。すなわち、特性語がポジティブであるかネガティブであるかにかかわらず、自己と内集団の概念は相互に関連することが明らかになっている。この知見にもとづくと、概念連合を通じた潜在的な防衛反応は自尊心向上のプロセスを反映していないと解釈できる。その結果、潜在的防衛は所属欲求を満たすプロセスを反映していると考えられるであろう。

以上の通りに、自己と内集団の概念連合を通じた自己防衛反応が所属欲求充足のプロセスを反映していると仮定すると、自尊心を向上させる効果が小さい内集団であっても、その内集団との連合をもちいた潜在的な防衛反応が生起する可能性がある。つまり、低地位の内集団の場合、自尊心を向上させる効果が小さいために顕在的な防衛反応は抑制されるが、潜在的な防衛反応を通じて集団所属の欲求を満たし、精神状態を維持することができると考えられる。このように、研究 6 では「自尊心を向上させる効果が小さい内集団でも自己防衛機能をもつ」という可能性について検証する。

実験では、自己脅威を操作するために、研究 4 と同一の死の顕現性の手法をもちいる。さらに、研究 5 と同じように集団地位の要因を実験に取りいれる。ただし、研究 5 では中立条件で内集団の地位が相対的に低下したかもしれないという問題点があった。そこで、研究 6 では中立条件の代わりに高地位条件を導入し、内集団の地位が高い条件と低い条件で自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的防衛がどのように変化するかを分析する。その結果、研究 6 は研究 5 よりも、集団地位の効果が検出しやすくなるであろう。なお、研究 6 では自己と内集団の連合に関する顕在指標として内集団同一視、潜在指標として概念連合をそれぞれ使用する。

これらの実験計画にもとづいたときに、どのような予測が導かれるであろうか。まず、内集団の地位が高い場合は、死の脅威が高まると内集団同一視を強めることで自尊心を向上させ、精神状態を維持すると推測される。言いかえると、内集団の地位が高い条件では顕在的防衛が生じるであろう。その一方、内集団の地位が低い場合は内集団同一視を通じ

た顕在的な防衛反応が抑制されるため、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合を強化することで精神状態を維持すると予測される。つまり、内集団の地位が低い条件では潜在的防衛が生じると考えられる。

また、研究 6 では自己と内集団の連合にもとづく顕在的・潜在的な防衛反応を検討するだけではなく、顕在的・潜在的な自己防衛反応を通じて主観的幸福感が維持されるかどうかを分析する。これまでの研究では、自己脅威を受けると主観的幸福感が低下することが示されている（Alicke & Sedikides, 2011; Routledge et al., 2010）。その一方で、自己と内集団成員の類似性や合意性、集団同一視は主観的幸福感を促進させる効果をもっている（Acitelli et al., 1993; Bizumic et al., 2009; Bliese & Halverson, 1998; Campbell, 1986）。これらの知見をふまえると、自己脅威は主観的幸福感を低下させるが、脅威を受けたときに自己と内集団の連合を強めることで、脅威状況において主観的幸福感を維持できるのではないかと考えられる。

研究 6 はこの考えについて実証的に検討し、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応について、精神状態の維持もふくめた一連の心的プロセスを分析する。実験において、内集団の地位が高い条件の参加者は、死の脅威が高まったときに内集団同一視を強めることで、主観的幸福感を維持すると予測される。それに対して、内集団の地位が低い条件の参加者は、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合を強化することで、主観的幸福感を維持すると予測される。以上の議論から、研究 6 の仮説を要約すると次の通りとなる。

6-1. 内集団の地位が高い場合は、死の脅威が高まると内集団同一視が強くなる

6-2. 内集団の地位が低い場合は、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合が強くなる

6-3. 地位が高い場合は内集団同一視、低い場合は概念連合を通じて幸福感を維持する

もし高地位条件において MS 条件の参加者が統制条件よりも内集団同一視が強ければ、集団地位が高い場合は顕在的防衛が生じると推測できる。その一方、低地位条件において MS 条件の概念連合が統制条件よりも強ければ、集団地位が低い場合は潜在的防衛が生じると解釈できるであろう。さらに、主観的幸福感の維持プロセスについては構造方程式モデルをもちいて分析する。具体的には、「死の脅威が高まると、内集団の地位が高い場合は内集団同一視、地位が低い場合は概念連合を通じて主観的幸福感を維持している」という仮説モデルについて分析をおこなう。

なお、研究 6 では、自己と内集団の概念連合の測定法として IAT（Greenwald et al., 1998）

を使用する。IAT はほかの潜在的測定法と比較して信頼性が高く（Bosson et al., 2000）、実際の行動との相関関係が強いという利点があることがこれまでに指摘されている（Greenwald et al., 2009）。実験では、2 種類の対象概念を組み合わせて各刺激のカテゴリー判断をおこなうことにより、カテゴリーに使用した概念間の連合強度を反応時間から推定する。具体的には、コンピュータ画面上に対象概念を表す刺激が 1 つずつ呈示され、参加者はその刺激が左右どちらのカテゴリーに当てはまるかを判断する。同一のカテゴリーに割り当てられた対象概念同士の連合が強いほど、カテゴリー分けが容易になるために反応時間は短くなる。それに対して、同一のカテゴリーに割り当てられた対象概念同士の連合が弱いほど、カテゴリー分けが困難になるために反応時間は長くなる。課題後、2 種類の弁別課題の平均反応時間を算出し、その差得点が概念間の連合強度の指標となる。研究 6 では、「自分―自分でない」、「内集団（東京大学）―外集団（早稲田大学）」という 2 つの対象概念を使用することで、自己と内集団の概念連合の強さを推定する。

6-2-2. 方法

参加者

東京大学の学生 90 名（男性 53 名、女性 37 名）が実験に参加した。参加者の平均年齢は 20.74 歳（$SD = 1.34$）であった。参加者は死の顕現性 2（MS vs. 統制）×集団地位 2（高地位 vs. 低地位）の 4 条件にランダムに割りあてられた。

実験手続き

実験はコンピュータをもちいて実施された。課題は、死の顕現性の操作、集団地位の操作、内集団同一視の測定、概念連合の測定、主観的幸福感の測定、の順序でおこなわれた。すべての課題の終了後にディブリーフィングをおこない、実験を終了した。

死の顕現性の操作

研究 4 と同様に、死の顕現性を操作した。MS 条件の参加者は、「死ぬことはとても寂しいことである」、「死んでしまえば、もう人生の意義を追究できなくなる」など、死に関連した 25 の質問項目に回答した。それに対して、統制条件の参加者は、「子供の頃と比較して、味の好みが変化した」、「魚料理よりも肉料理をよく食べる」など、死とは無関連な 25 の質問項目に回答した。どちらの条件でも、自分の考えが各項目にどの程度当てはまるかを回答するよう求めた。

死の顕現性の操作のあと、参加者は日本語版 PANAS（佐藤・安田, 2001）に回答した。この手続きは、感情が死の顕現性の操作の効果を媒介していないことを確認するためにもちいている。また、死の顕現性の効果は一定の遅延課題後に強くなるため（Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994）、日本語版 PANAS は遅延課題としても使用している。日本語版 PANAS の質問項目は、「活気のある」、「誇らしい」などのポジティブ感情 8 項目と、「びくびくした」、「おびえた」などのネガティブ感情 8 項目から構成されていた（資料 J）。参加者はこれらの計 16 項目について、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で評定をおこなった。

集団地位の操作

実験は東京大学の学生を対象に実施し、内集団として東京大学、外集団として早稲田大学を設定した。研究 6 は研究 5 と同様の手法で集団地位を操作しているが、内集団に東京大学、外集団に早稲田大学を使用し、2 つの大学の創造性に関する情報を参加者に提示した。まず高地位条件では、2 つの大学を対象とした過去の実験において、「東京大学のグループは早稲田大学のグループよりも創造性がつねに高い」という結果が得られたと説明し、仮想の得点結果を棒グラフにより視覚的に表示した。それに対し、低地位条件では、「東京大学のグループは早稲田大学のグループよりも創造性がつねに低い」と教示し、仮想の得点結果を示したグラフを参加者に提示した。高地位条件と低地位条件で使用したグラフは同一のものであり、大学名を記したラベル（東京大学・早稲田大学）のみを入れ替えた。

内集団同一視の測定

内集団同一視を Karasawa (1991) にもとづき測定した。内集団同一視の質問項目は、「あなたの東京大学に対する所属意識は強い方ですか、弱い方ですか」、「あなたは東京大学にプライドを感じますか」など、12 項目から構成されていた（資料 K）。参加者は自分の考えがそれぞれの項目にどの程度当てはまるかを、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で回答した。

概念連合の測定

自己と内集団の概念連合の強さを IAT により測定した。対象概念には、「自分―自分でない」、および、「東京大学―早稲田大学」の 2 つのカテゴリーを使用した。自分の対象概念をあらわす刺激は、「私は」、「私の」、「私に」、「私を」、「私のもの」、の 5 語であり、自分でないの対象概念をあらわす刺激は、「彼らは」、「彼らの」、「彼らに」、「彼らを」、「彼らの

もの」、の 5 語であった。東京大学の対象概念をあらわす刺激は、「とうきょうだいがく」、「トーダイ」、「東大生」、「本郷キャンパス」、「University of Tokyo」、の 5 語であり、早稲田大学の対象概念をあらわす刺激は、「わせだだいがく」、「ワセダ」、「早大生」、「西早稲田キャンパス」、「Waseda University」、の 5 語であった。

参加者がプログラムを開始すると、課題に関する説明がコンピュータ画面に表示された。具体的には、課題が始まると画面中央に対象概念の単語刺激が一つずつ表示され、参加者はそれぞれの単語がどのカテゴリーに属するかを判断するよう求められた。カテゴリーの名前は画面の左上と右上に常に表示され、左上のカテゴリーに属するときは左手で「F」のキーを、右上のカテゴリーに属するときは右手で「J」のキーを押すことによって反応をおこなった。また、参加者は表示された単語をカテゴリー分けするとき、できるだけ正確に判断し、できるだけ素早くキーを押すよう教示を受けた。試行開始後、表示された単語に対して正しいカテゴリーの反応キーが押されると単語は消え、250ms 後に次の単語が表示された。誤反応の場合は刺激の下に赤い「×」印が表示され、反応キーが異なることをフィードバックした。誤反応後にあらためて正しいキーを押すと「×」印は消え、次の単語が表示された。最初の単語刺激が画面に表示されてから正答キーが押されるまでの時間を、反応時間として ms 単位で記録した。

IAT のプログラムは 7 つのブロックから構成されており（表 3)、ブロック 1 は「自分―自分でない」の対象概念を弁別する練習試行、ブロック 2 は「東京大学―早稲田大学」の対象概念を弁別する練習試行、ブロック 3 はブロック 1 とブロック 2 の対象概念を組み合わせ、両者を交互に弁別する練習試行、ブロック 4 はブロック 3 の本試行であった。ブロック 5 はブロック 1 の「自分―自分でない」の対象概念について左右を逆転して弁別する練習試行、ブロック 6 はブロック 5 とブロック 2 の対象概念を組み合わせ、両者を交互に弁別する練習試行、ブロック 7 はブロック 6 の本試行であった。練習試行のブロックは各 20 試行、本試行のブロックは各 40 試行から構成されていた。「自分・東京大学」と「自分でない・早稲田大学」の組み合わせのブロックは一致ブロック、「自分・早稲田大学」と「自分でない・東京大学」の組み合わせのブロックは不一致ブロックと定義し、どちらのブロックを先におこなうかはランダムに決定された。

表 3　IAT のブロック構成（一致ブロック先行条件）

ブロック		試行数	カテゴリー（左）	カテゴリー（右）
1	練習試行	20	自分	自分でない
2	練習試行	20	東京大学	早稲田大学
3	練習試行	20	自分・東京大学	自分でない・早稲田大学
4	本試行	40	自分・東京大学	自分でない・早稲田大学
5	練習試行	20	自分でない	自分
6	練習試行	20	自分でない・東京大学	自分・早稲田大学
7	本試行	40	自分でない・東京大学	自分・早稲田大学

主観的幸福感の測定

研究 2 と同様に、主観的幸福感を測定した（伊藤ら, 2003）。主観的幸福感の質問項目は、「あなたは人生が面白いと思いますか」、「自分がやろうとしたことはやりとげていますか」など、12 項目から構成されていた。参加者は自分の考えが各項目にどの程度当てはまるかを、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の 5 件法で回答した。

実験の最後に、早稲田大学にどの程度親近感を感じるかを、「1：全く感じない、2：あまり感じない、3：どちらともいえない、4：やや感じる、5：強く感じる」の 5 件法で尋ねた。この手続きは概念連合の分析において、実験刺激として使用した外集団（早稲田大学）との関係性を統制するために使用している。

6-2-3. 結果

予備分析

最初に予備的な分析として、性別と IAT のブロック順序（一致ブロック先行 vs. 不一致ブロック先行）の要因の効果を検討した。その結果、各要因は以下で報告する変数に対して有意な主効果・交互作用効果を持っていなかったため、以降の分析からは除外した。また、以下の分散分析ではポジティブ・ネガティブ感情の得点、および、早稲田大学に対する親近感の得点を共変量として投入したが、有意な主効果・交互作用効果に変化はみられ

なかった。したがって、感情や外集団との関係性は死の顕現性の効果を媒介していないと考えられる。

内集団同一視

内集団同一視を測定した 12 項目の信頼性を検討するため、クローンバックの α 係数を算出した。その結果、$\alpha = .73$ という一定の内的整合性がみられたため、12 項目の平均値を算出した。まず、死の顕現性と集団地位のそれぞれの条件において、内集団同一視が強いかどうかについて検証をおこなった。具体的には、死の顕現性（MS vs. 統制）と集団地位（高地位 vs. 低地位）の各条件における内集団同一視の得点が理論的中点である 3 と有意に異なるかどうかを t 検定によって分析した。その結果、内集団の地位が高い場合は、MS 条件（$M = 3.33$; $SD = 0.43$）において 3 よりも有意に大きいという結果が得られたが、統制条件（$M = 2.97$; $SD = 0.58$）では 3 との差は有意ではなかった（$t(22) = 3.68$, $p < .01$; $t(19) = 0.26$, *n.s.*）。したがって、高地位の内集団同一視は、死の脅威が高まった状況において強いと推測される。それに対して、内集団の地位が低い場合は、MS 条件（$M = 3.00$; $SD = 0.50$）と統制条件（$M = 3.12$; $SD = 0.61$）のどちらの条件においても、3 との間に有意差は観察されなかった（$t(23) = 0.03$, *n.s.*; $t(22) = 0.91$, *n.s.*）。つまり、低地位の内集団への同一視は、死の脅威の有無にかかわらず強くはないと示唆される。

次に、死の顕現性と集団地位の高低が内集団同一視に与える影響について検証をおこなった。具体的には、内集団同一視の得点に対して、死の顕現性（MS vs. 統制）と集団地位（高地位 vs. 低地位）を参加者間要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、死の顕現性×集団地位の交互作用効果が有意であり（$F(1, 86) = 4.46$, $p < .05$）、そのほかの主効果は有意ではなかった（Fs$(1, 86) \leq 1.23$, *n.s.*）。つづけて、死の顕現性×集団地位の交互作用効果に関して下位検定をおこなったところ、高地位条件における死の顕現性の単純主効果、および、MS 条件における集団地位の単純主効果が有意であった（図 9）。

まず、死の顕現性の単純主効果に関して、高地位条件では、内集団同一視の値は MS 条件が統制条件よりも有意に高かった（$F(1, 86) = 4.96$, $p < .05$）。したがって、死の脅威が高まると高地位の内集団に対する同一視が強くなることが明らかになった。それに対して、低地位条件では、内集団同一視は MS 条件と統制条件の間で有意差は観察されなかった（$F(1, 86) = 0.53$, *n.s.*）。すなわち、死の脅威が高まっても、低地位の内集団に対する同一視は強くならないことが示唆される。

また、集団地位の単純主効果について、MS 条件では、内集団同一視の得点は高地位条件

が低地位条件よりも有意に高かった（$F(1, 86) = 4.40$, $p < .05$）。よって、死の脅威が高まった状況では、高地位集団への同一視が低地位集団よりも強くなることが確認された。その一方、統制条件では、内集団同一視の値は高地位条件と低地位条件の間で有意差はみられなかった（$F(1, 86) = 0.84$, *n.s.*）。したがって、死の脅威が高まっていない場合、集団地位の高低は内集団同一視に影響を与えないことが示唆される。

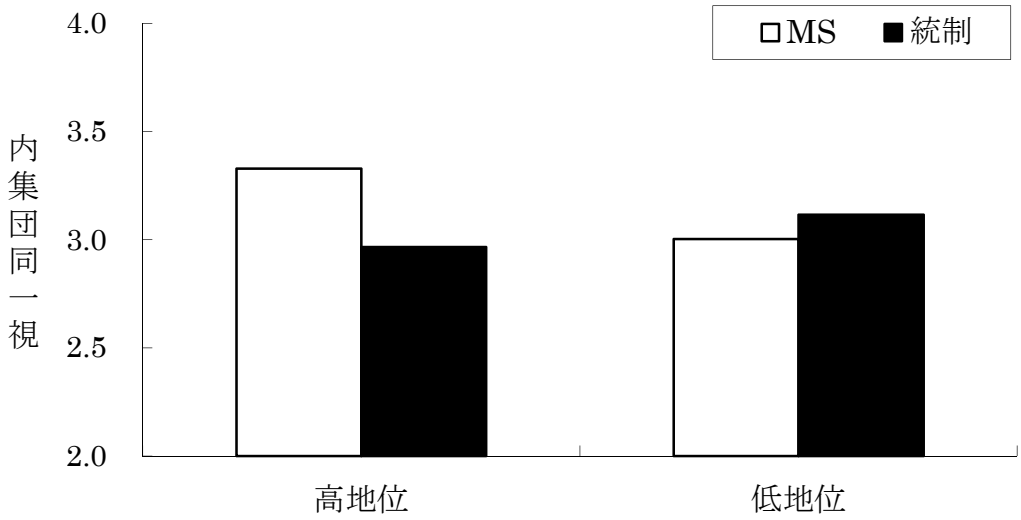


図 9. 死の顕現性×集団地位の各条件における内集団同一視

概念連合の算出

自己と内集団の概念連合の指標は Greenwald et al.（2003）に準じ、IAT D 効果を使用した。IAT D 効果は従来の分析手法よりも顕在指標との相関が高く、平均反応時間の個人差を統制できるなどの利点があることが報告されている（Greenwald et al., 2003）。研究 6 において IAT D 効果の値が大きいほど、参加者にとって内集団（東京大学）との概念連合が外集団（早稲田大学）よりも相対的に強いことを意味する。分析では、最初に 10,000ms 以上の試行を除外した。次に、練習試行における不一致ブロックの平均反応時間から一致ブロックの平均反応時間を差し引いたうえで、練習試行全体の標準偏差で除算した。本試行でも同様に、不一致ブロックの平均反応時間から一致ブロックの平均反応時間を差し引いたうえで、本試行全体の標準偏差で除算した。最後に、練習試行と本試行で算出された 2 つの値の平均値を IAT D 効果の指標とした。その式を次に示す。

$$\text{IAT D 効果} = \frac{\text{不一致ブロック反応時間} - \text{一致ブロック反応時間}}{\text{試行全体の標準偏差}}$$

IAT D 効果

まず、死の顕現性と集団地位のそれぞれの条件において、自己と内集団の概念連合が外集団よりも強いかどうかについて検証をおこなった。具体的には、死の顕現性（MS vs. 統制）と集団地位（高地位 vs. 低地位）の各条件における IAT D 効果の得点が 0 と有意に異なるかどうかを *t* 検定によって分析した。その結果、内集団の地位が高い場合は、MS 条件（$M = 0.63$; $SD = 0.32$）と統制条件（$M = 0.69$; $SD = 0.36$）のどちらの条件においても、IAT D 効果の値は 0 よりも有意に大きかった（$t(22) = 9.46$, $p < .01$; $t(19) = 8.52$, $p < .01$）。よって、内集団の地位が高い場合、自己と内集団の概念連合は外集団との概念連合よりも強いと考えられる。同様に、内集団の地位が低い場合も、MS 条件（$M = 0.92$; $SD = 0.43$）と統制条件（$M = 0.64$; $SD = 0.41$）の 2 つの条件において、IAT D 効果の値は 0 よりも有意に大きいことが明らかになった（$t(23) = 10.57$, $p < .01$; $t(22) = 7.51$, $p < .01$）。したがって、内集団の地位が低い場合でも、自己と内集団の概念連合は外集団との概念連合よりも強いと示唆される。

次に、死の顕現性と集団地位の高低が概念連合に与える影響について検証をおこなった。具体的には、IAT D 効果の値に対して、死の顕現性（MS vs. 統制）と集団地位（高地位 vs. 低地位）を参加者間要因とした 2 要因の分散分析を実施した。その結果、死の顕現性×集団地位の交互作用効果が有意であり（$F(1, 86) = 4.32$, $p < .05$）、そのほかの主効果は有意ではなかった（$F\text{s}(1, 86) \leq 2.23$, *n.s.*）。つづけて、死の顕現性×集団地位の交互作用効果に関して下位検定をおこなったところ、低地位条件における死の顕現性の単純主効果、および、MS 条件における集団地位の単純主効果が有意であった（図 10）。

まず、死の顕現性の単純主効果に関して、低地位条件では、IAT D 効果の値は MS 条件が統制条件よりも有意に高かった（$F(1, 86) = 6.09$, $p < .05$）。したがって、死の脅威が高まると自己と低地位の内集団の概念連合が強くなると考えられる。その一方、高地位条件では、IAT D 効果の値は MS 条件と統制条件の間で有意差はみられなかった（$F(1, 86) = 0.27$, *n.s.*）。つまり、死の脅威が高まっても、自己と高地位の内集団の概念連合は強くならないと示唆される。

また、集団地位の単純主効果について、MS 条件では、IAT D 効果の平均値は低地位条件が高地位条件よりも有意に高かった（$F(1, 86) = 6.69$, $p < .05$）。よって、死の脅威が高まった状況では、自己と低地位の内集団の概念連合が高地位集団よりも強くなることが明らかになった。その一方、統制条件では、IAT D 効果の値は高地位条件と低地位条件の間で有意差が観察されなかった（$F(1, 86) = 0.17$, *n.s.*）。したがって、死の脅威が高まっていない場合、自己と内集団の概念連合の強さは集団地位の高低に応じて変化しないことが示唆される。なお、内集団同一視と IAT D 効果の間には、有意な相関関係が認められなかった（$r = .07$, *n.s.*）。

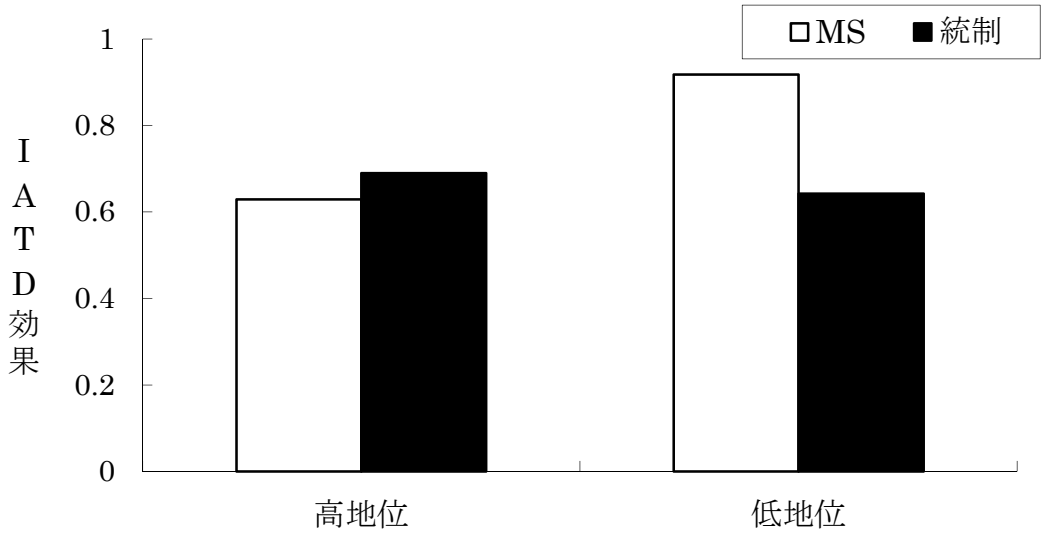


図 10. 死の顕現性×集団地位の各条件における IAT D 効果

構造方程式モデル

自己防衛反応の結果として、主観的幸福感が維持されるプロセスについて検証をした。具体的には、「死の脅威が高まると、内集団の地位が高い場合は内集団同一視、地位が低い場合は概念連合を通じて主観的幸福感を維持している」という仮説モデルをまず構築した。さらに、内集団の地位が高い条件と低い条件の 2 つにわけ、多母集団同時分析を実施した。その結果、仮説モデルはデータと十分に適合していることが明らかになった（$\chi^2(4) = 5.93$, *n.s.*, *GFI* = .97, *RMSEA* = .07, *AIC* = 37.93）。なお、条件間で異なるモデルを設定することが妥当であることを保証するために、高地位条件と低地位条件で同一のパスに等値制約をかけ、モデルの適合度が下がるかどうかを調べた。その結果、等値制約をかけたモデル

は等値制約をかけないモデルよりも、適合度が下がることが示された（χ^2 (8) = 17.46, p < .05, *GFI* = .92, *RMSEA* = .12, *AIC* = 41.46）。つまり、高地位条件と低地位条件では各変数の影響が等価でなく、条件間で異なるモデルを設定することが妥当であると考えられる。

多母集団同時分析の結果について、集団地位が高い条件では、死の脅威が高まると内集団同一視が強くなる一方で、自己と内集団の概念連合は強くはならなかった（図 11）。さらに、内集団同一視が強いほど、主観的幸福感が高くなることが示されている。それに対して、集団地位が低い条件では、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合が強くなる一方で、内集団同一視は強くはならなかった（図 12）。くわえて、自己と内集団の概念連合が強いほど、主観的幸福感が高くなるという傾向が観察されている。これらの結果は、死の脅威が高まると、高地位集団では内集団同一視、低地位集団では概念連合を通じて幸福感を維持することを示している。したがって、自己と内集団の連合を強めた結果として、主観的幸福感が維持されると結論できるであろう。

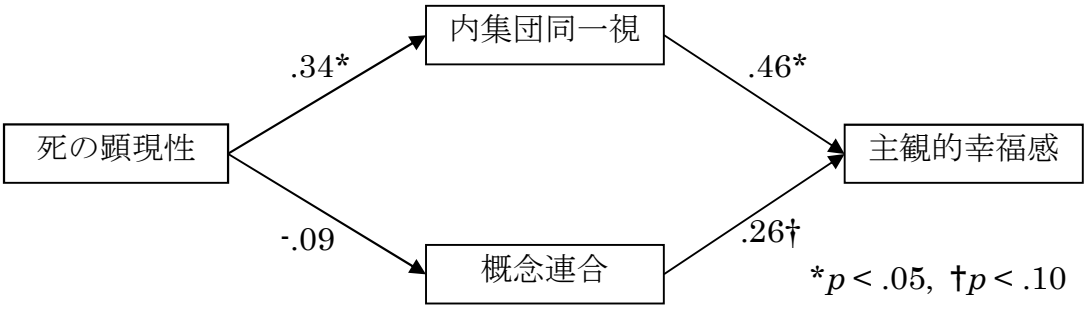


図 11. 高地位条件における構造方程式モデル分析結果（0 = 統制、1 = MS）

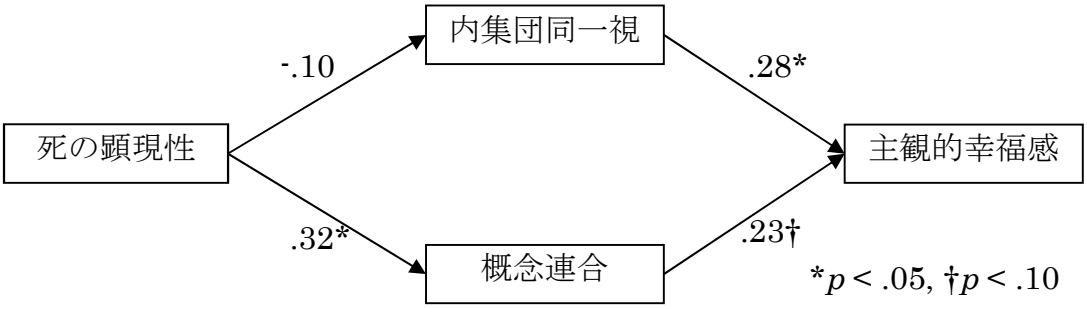


図 12. 低地位条件における構造方程式モデル分析結果（0 = 統制、1 = MS）

6-2-4. 考察

研究 6 は死の顕現性という観点から、集団地位の高低に応じた顕在的・潜在的な自己防衛反応について検討をおこなった。その結果、内集団の地位が高い場合は、死の脅威が高まると内集団同一視が強くなっていた。それに対して、内集団の地位が低い場合は、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合が強化されていた。したがって、研究 6 の仮説の通りに、内集団の地位が高いときは顕在的防衛、地位が低いときは潜在的防衛が生じていたと判断できる。内集団の地位が低い場合は、自尊心を向上させる効果が小さいために顕在的防衛は生じなかったのであろう。しかし、自己と内集団の概念連合を通じて集団所属の欲求を満たすことで、潜在的に自己を防衛していたと解釈できる。このように、研究 6 は低地位の内集団であっても潜在的に自己防衛反応が生じることを明らかにした。

ところで、高地位の内集団の場合は顕在的な防衛反応だけではなく、潜在的な防衛反応も生じると考えられる。なぜなら、自己と高地位の内集団の連合を強めることで所属欲求を充足し、個人の精神状態を維持できるためである。実際に、研究 4 の結果では死の脅威が高まると、内集団の地位が低くなくても自己と内集団の概念連合が強化されていた。そこで、研究 6 の高地位条件でも同様に自己と内集団の概念連合が強くなると予測できる。しかし、この予測に反して、研究 6 の高地位条件では内集団同一視のみが強くなっており、自己と内集団の概念連合は強くはならなかった。それでは、なぜ自己と内集団の概念連合を通じた潜在的防衛は高地位条件において生じなかったのであろうか。

その理由として、高地位条件の参加者は、先に測定した内集団同一視を通じて自己を防衛していたために、後続の自己と内集団の概念連合を通じて自己を防衛する必要がなかったと考えられる。つまり、一つの防衛方略を通じて脅威による効果を低減すると、それ以外の防衛反応は必要でなくなり、生起しにくくなる可能性がある。この現象は先行研究でも確認されており、ある特定の自己防衛反応が生じると、別の種類の自己防衛反応は生じなくなる傾向がある（Fein & Spencer, 1997; Hart et al., 2005; McGregor et al., 1998; Tesser & Cornell, 1991）。

たとえば、McGregor et al.（1998）は存在脅威管理理論の観点から、死の顕現性が攻撃行動と特性評定という 2 つの変数に与える影響を検証している。攻撃行動は辛口ソースパラダイムを使用しており、文化的世界観を批判するターゲットに対してどの程度サルサソースを与えるかを測定した。特性評定では同一のターゲットに対する否定的評価を尋ね、

攻撃行動と特性評定の測定順序はカウンターバランスをとっている。実験の結果、死の脅威が高まると、先に測定した変数のみを通じて防衛反応が生じることが明らかになった。つまり、攻撃行動を特性評定よりも先に測定すると、MS 条件ではサルサソースの量が増加するが、ターゲットへの評価は否定的にはならなかった。その一方、特性評定を先に測定すると、ターゲットへの評価は否定的になるが、サルサソースの量は変化していなかった。したがって、一つの防衛方略を通じて自己を防衛すると、それ以外の防衛反応は生起しにくくなると解釈できる。研究 6 の高地位条件では、先に測定した内集団同一視で防衛反応が生起していたために、後で測定した概念連合では防衛反応が起こらなかったのであろう。

なお、内集団同一視や自己と内集団の概念連合の平均値については、それぞれの指標や条件間で異なる結果が得られている。具体的には、内集団同一視については、死の脅威が高まったときに、高地位の内集団に対してのみ同一視は強かった。その一方、死の脅威が高まっていない状況では、集団地位の高低にかかわらず内集団同一視は強くはなかった。なかでも、統制条件において高地位の内集団同一視が強くないという結果は、事前の予測とは一致していない。本論文は、自己脅威が存在しない状況においても自己と内集団の連合は強く認知されていると仮定している。実際に、研究 1 では自己が脅威にさらされなくても自己と内集団成員の類似性は高いと判断されていた。しかし、一方で、研究 3 と 5 では自己脅威が存在しない統制条件において、自己と内集団成員の類似性は高く認知されてはいなかった。同様に、研究 4 の統制条件においても、自己と内集団成員の概念連合は強くないという知見が得られた。

これらの結果について、研究 3 と 4 では最小条件集団パラダイムを使用しており、集団に関する事前知識や集団間や集団内の相互作用が存在しないために、自己と内集団成員の類似性や概念連合は自己脅威を受けないかぎり強くならなかったと解釈した。また、研究 5 の中立条件では実験教示の段階において内集団と外集団の対比が生じていたため、内集団の地位が相対的に低下したという可能性を提起した。その結果として、自己脅威が存在しない状況では、中立条件でも類似性が高く推定されていなかったと考えられる。一方で、研究 6 は研究 5 で設定した中立条件の地位が参加者にとって曖昧であった懸念を考慮し、中立条件に代えて高地位条件を導入した。このように内集団の地位を高めることで、高地位条件における内集団との連合は強くなると予測される。しかし、この予測に反して、自己脅威が存在しない状況では、高地位の内集団に対する同一視は強くなかった。それでは、この結果はどのように解釈できるであろうか。

一つの可能性として、内集団同一視という指標の問題があげられる。内集団同一視は、類似性と同様に自己と内集団の連合の強さを測定している。ただし、実際の測定の際には、内集団同一視は類似性と比較して、自己と内集団の連合の強さを参加者に対して直接的に尋ねており（e.g.,「あなたの東京大学に対する所属意識は強い方ですか、弱い方ですか」）、評価懸念がより強く生じていたかもしれない。社会関係のなかでは控えめであることが求められているため、自己脅威という促進要因がなければ、「所属意識が強い」と明示的に表明することには抵抗があるであろう。

この点について、研究 1 では自己脅威が存在しなくても自己と内集団成員の類似性が高いという結果が得られている。しかし、類似性の測定では「自己と内集団の連合の強さを回答している」という参加者の気づきが弱いために、自己脅威を受けなくても自己と内集団成員の類似性が高く推定されやすかったと考えられる。それに対し、研究 6 の内集団同一視の測定では、参加者が自己と内集団の連合の強さを明示的に表明することに抵抗があったため、自己脅威を受けないかぎり内集団同一視は強くはならなかったと解釈できる。この解釈については、類似性と内集団同一視の比較を通じてあらためて検証する必要があると考えられる。ただし、研究 6 は自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的な防衛反応が集団地位に応じて変化することを明らかにしたという点で意義があるといえよう。

このほか、研究 6 は自己脅威に対して自己と内集団の連合を強めた結果として、主観的幸福感が維持されることを示した。具体的には、死の脅威が高まったときに、内集団の地位が高いと内集団同一視、地位が低いと自己と内集団の概念連合を通じて主観的幸福感が維持されていた。これまでの研究では、自己脅威を受けると内集団との連合の強化を通じて精神状態の低下を防ぐと想定されていたが、実際に精神状態の低下を防げているかは明らかではなかった。それに対し、研究 6 では内集団との連合をもちいた自己防衛反応を通じて、主観的幸福感が維持されることを新たに示した。

また、研究 1・2 や先行研究は、自己と内集団成員の類似性や合意性が主観的幸福感と関連することを示しているが（Acitelli et al., 1993; Bliese & Halverson, 1998; Campbell, 1986）、研究 6 は自己と内集団の概念連合も主観的幸福感を維持する働きをもつことを明らかにした。このように、自己と内集団の連合は顕在的にだけでなく潜在的にも精神状態を維持しており、脅威にさらされたときに顕在的・潜在的な連合を強めることによって、自己脅威が引きおこす否定的な影響を緩和していると考えられる。

なお、研究 6 の限界として、自己と内集団の連合を測定する手法の問題があげられる。

この研究では概念連合の測定手法として IAT を使用しており、早稲田大学と対比した際の自己と東京大学の概念連合を検証している。よって、潜在指標では内集団との相対的な連合を測定しているが、顕在指標では内集団に対する絶対的な連合の強さを測定している。自己と内集団の概念連合における分析では、外集団に対する連合がベースラインとして働くと仮定しており、さらに外集団への親近感を統制しても同様の結果が得られたことから、参加者は自己と内集団の概念連合を強化することで自己を防衛していたと考えられる。

ただし、IAT では対象概念が存在することにより絶対的な顕在指標との相関が低くなることが指摘されており（Nosek, 2007）、両者の相関については慎重に解釈する必要があろう。また、死の顕現性の操作を使用した研究 4 では、ネガティブ感情による代替説明の可能性を指摘したが、研究 6 ではポジティブ・ネガティブ感情を測定変数として追加した。その結果、参加者の感情状態は死の顕現性の効果を媒介していないことが示された。よって、本論文で得られた有意な効果は死の顕現性によるものであると判断することができる。

実証編第 3 部要約

実証編第 3 部は集団地位の要因を取りいれ、内集団の地位の高さが自己と内集団の連合を通じた防衛反応にどのような影響をおよぼすかを検証した。その結果、まず研究 5 では、自尊心に脅威が与えられたときに、内集団の地位が低いと自己と内集団成員の類似性が低くなることを明らかにした。くわえて、研究 6 では死の脅威が高まると、集団地位が高い場合は内集団同一視が強くなるが、集団地位が低い場合は自己と内集団の概念連合が強くなることを示した。さらに、研究 6 の結果から、集団地位が高いときは内集団同一視、集団地位が低いときは自己と内集団の概念連合を通じて主観的幸福感が維持されると考えられる。実証編第 3 部の研究を通じて得られた知見は、次の 2 点に要約することができる。

1. 内集団の地位が高いと顕在的な防衛反応が生じるが、内集団の地位が低いと潜在的な防衛反応が生じる
2. 集団地位が高いときは顕在的防衛、集団地位が低いときは潜在的防衛を通じて主観的幸福感が維持される

総合考察

7-1. 研究知見の要約

総合考察を述べるにあたって、まず実証編第 1 部から第 3 部の研究において得られた知見を要約しておく。実証編第 1 部は、自己と内集団の連合と個人の精神状態の関連について検証をおこなった。具体的には、研究 1 は自己と内集団成員の類似性が高い人ほど主観的幸福感が高いことを明らかにしている。くわえて、研究 2 では自己と内集団成員の類似性が高まると、主観的幸福感は高くなることが示された。このように、自己と内集団の連合は精神状態を向上させる効果をもつため、脅威状況において自己を防衛する役割を果たしていると考えられる。以上の実証編第 1 部の研究知見は、次の 2 点に要約できる。

1. 自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感と関連している
2. 自己と内集団成員の類似性は主観的幸福感を向上させる

次に、実証編第 2 部は、自己と内集団の連合を通じた自己防衛機能について検討した。最初に、研究 3 は自尊心が脅威にさらされると自己と内集団成員の類似性が高くなることを示した。一方で、自尊心に脅威が与えられても自己と外集団成員の類似性は高くはならなかった。つづけて、研究 4 では、死の脅威が高まると自己と内集団成員の概念連合が強くなることを示した。それに対し、自己と外集団成員の概念連合は死の脅威が高まっても強くはならなかった。以上のように、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は顕在的なレベルにくわえて、潜在的なレベルでも生じることが明らかになっている。また、研究 3 と研究 4 は実験状況として最小条件集団パラダイムを使用している。したがって、自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的な自己防衛反応は、参加者にとって既知の内集団だけでなく、新規の内集団に対しても生起すると考えられよう。以上の実証編第 2 部の研究知見は、次の 3 点に要約することができる。

1. 自己脅威に対する防衛反応は顕在的・潜在的に生じる
2. 自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は生じるが、自己と外集団の連合を通じた自己防衛反応は生起しない
3. 自己と内集団の連合を通じた顕在的・潜在的な防衛反応は、実験場面で作成された新規の内集団であっても生じる

最後に、実証編第 3 部は集団地位の高低に応じた自己防衛反応や、自己防衛反応を通じて主観的幸福感が維持されるプロセスについて分析をおこなった。まず研究 5 では、自尊心に脅威が与えられたときに、内集団の地位が低いと自己と内集団成員の類似性は低くなることが明らかになった。それに対して、自尊心への脅威が存在しない場合は、内集団の地位が低くても自己と内集団成員の類似性は低くはならなかった。すなわち、自己脅威状況では、自尊心を向上させる効果が小さい内集団に対して、自己防衛反応は弱くなると推測される。つづいて、研究 6 では、内集団の地位が高い場合、死の脅威が高まると内集団同一視が強くなることが示された。その一方、内集団の地位が低い場合は、死の脅威が高まると自己と内集団の概念連合が強くなっていた。さらに、地位が高い場合は内集団同一視、低い場合は自己と内集団の概念連合を通じて主観的幸福感が維持されていた。よって、自尊心を向上させる効果が小さい内集団でも潜在的には自己防衛反応が生じると判断できる。また、自己と内集団の連合にもとづく防衛反応を通じて、主観的幸福感が維持されると考えられる。以上の実証編第 3 部の研究知見は、次の 2 点に要約できる。

1. 内集団の地位が高いと顕在的な防衛反応が生じるが、内集団の地位が低いと潜在的な防衛反応が生じる
2. 集団地位が高いときは顕在的防衛、集団地位が低いときは潜在的防衛を通じて主観的幸福感が維持される

7-2. 本論文の自己防衛モデル

これまでの研究知見をふまえて、本論文の自己防衛モデルを要約する（図 13）。自己防衛反応のプロセスとして、自己が脅威にさらされると、顕在的・潜在的な防衛反応を通じて主観的幸福感が維持される。ただし、このプロセスは内集団の地位が高い、もしくは、地位に関する情報が与えられていない場合に限られており、自己脅威を受けると、類似性や概念連合を通じて脅威による否定的影響を低減することが可能になる。実際に、これらの内集団との連合を強めた結果として、主観的幸福感が維持されていた。その一方、内集団の地位が低い場合は概念連合のみが強くなり、自己防衛反応は潜在的に生起していた。集団地位が低いときは自尊心を向上させる効果が小さいため、顕在的な防衛反応は生起しにくくなると解釈できるであろう。さらに、自己脅威状況において低地位の内集団との概念連合を強めることで、主観的幸福感が維持されていた。

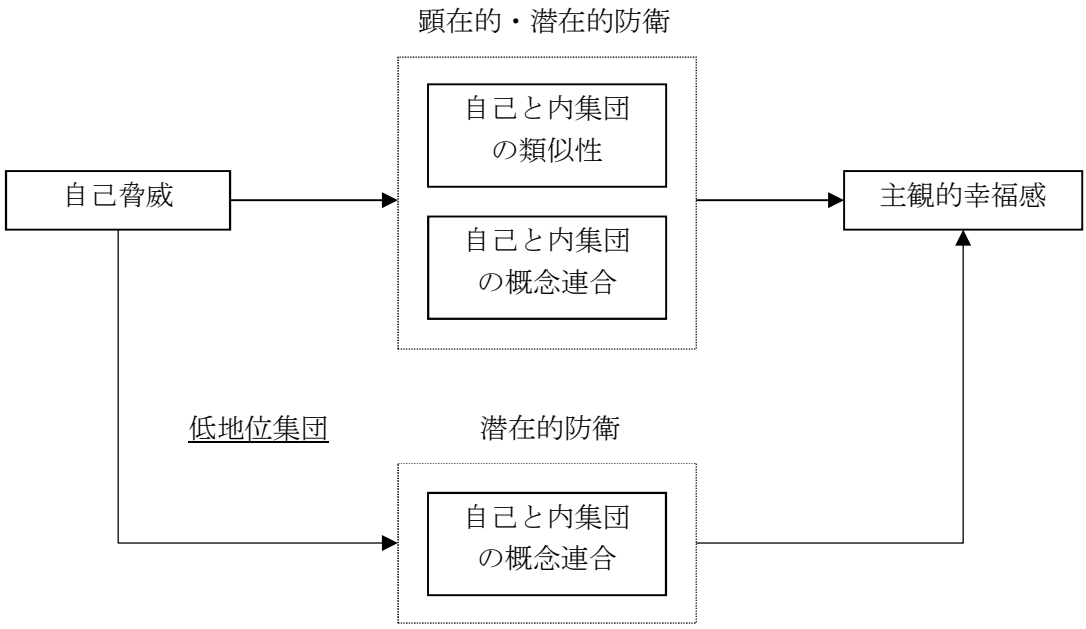


図 13. 本論文の自己防衛モデル

以上の自己防衛モデルについて、先行研究や過去のモデルとは何が異なるのであろうか。過去の研究は、自己が脅威にさらされると、内集団への同一視が強くなることを示している（Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; Wisman & Koole, 2003）。さらに、自己脅威を受けると、自己と内集団成員の合意性が高くなる（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。このように、自己と内集団の連合は脅威状況において強くなり、自己防衛機能をもつという主張はこれまでにもなされていた。ただし、Sherman et al.（1984）などの先行研究は、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応の詳細なプロセスにかならずしも焦点を当てていたわけではない。たとえば、自己と内集団成員の合意性やフォールス・コンセンサス効果に関する研究では、選択的接触や顕現性の高さ、論理的情報処理など、認知的要因が合意性の強さを規定することが主要な説明として取りあげられていた。それに対し、Sherman らは認知的要因と動機的要因を比較し、自己と内集団成員の合意性が自己防衛機能をもつことを実証することで、合意性の推定には動機的要因が関与することを明らかにしている（Alicke & Largo, 1995; Sherman et al., 1984）。

このように、先行研究は認知的要因と比較した際の動機的要因の影響を検証してきた。

先行研究が着目していたことは、「自分の態度・意見が内集団成員に支持されていると思う」（合意性）など、内集団との心理的連合には動機的要因が関与する、ということである。つまり、自己と内集団の心理的連合の強さには認知的要因だけでなく、動機的要因が作用していることを示そうとしていたのである。このような経緯から、先行研究は認知的要因と比較した際の動機的要因の影響を検証してきた。しかし、一方で、自己防衛という動機的要因のなかでの重要な関連要因や、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応のモデル化は不十分であったと考えられる。

そこで、本論文は集団地位という自己防衛反応の規定要因を取りあげ、主観的幸福感の維持もふくめた一連の自己防衛反応のプロセスを検証した。さらに、従来の顕在指標だけでなく潜在指標を使用し、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が潜在的に生じるかどうか、および、集団地位に応じた顕在的・潜在的な自己防衛反応について検証をおこなった。本論文で新たに検証した点をあらためて要約すると、以下の通りとなる。

1. （自己と内集団の連合にもとづく）自己防衛反応の潜在性の検討
2. 集団地位に応じた顕在的・潜在的な自己防衛反応の検討
3. 自己防衛反応を通じた幸福感維持のプロセスの検討

実証編における 6 つの研究の結果、次のことがらが明らかになった。第 1 に、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は潜在的に生じており、概念連合という潜在的な連合は自己防衛機能をもつ。第 2 に、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、集団地位の高さによって変化している。具体的には、集団地位が高い（もしくは地位に関する情報がない）場合は顕在的・潜在的に自己と内集団の連合を通じた防衛反応が生じるが、集団地位が低い場合は潜在的に自己防衛反応が生起する。第 3 に、脅威状況において自己と内集団成員の類似性や概念連合を強めた結果として、主観的幸福感が維持される。つまり、自己防衛反応を通じて精神状態を維持できると示唆される。以上の仮説検証の結果として、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応について、図 13 にあるような包括的なモデルを構築することができたと考えられる。

なお、本論文は自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応を検証しているが、研究 1 から研究 5 では「内集団成員」との類似性や概念連合を測定している。その一方、研究 6 では「内集団」に対する同一視や概念連合を測定しており、測定対象は一貫してはいない。ただし、「内集団成員」をもちいた研究では、一般的な内集団成員に対する連合を測定して

おり、特定の集団成員であるということ以外には、参加者に何も情報を与えていない。そのため、これらの研究では集団成員性のみが問題となり、研究 6 と実質的には同一であると考えられる。

一方、研究 1 から研究 5 の測定で「内集団成員」ではなく、「内集団」との類似性や概念連合を測定することも想定できる。しかし、本論文では性格認知にもとづく類似性を検証しており、研究 5 の概念連合の測定でも自己や内集団成員、外集団成員に対する性格評定をおこなっている。これらの測定で「内集団」に対する性格評定を求めると、各特性が集団そのものに当てはまると判断するか、集団のなかの個々の成員に当てはまると判断するかで、2 通りの解釈が生じてしまう恐れがある。仮に集団そのものへの特性判断に限定しても、「ある特性が集団全体に当てはまるかどうか」という質問自体が不自然な印象を与え、参加者の回答が歪む可能性があろう。以上のように、質問の意図を明確にするためにも、本論文でもちいた測定手法は妥当であると思われる。

また、類似性の測定に関して、本論文は全体を通じて「自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか」という主観的な認知をあつかっているが、研究 2 の実験操作では実際の類似性を操作している。これは、「自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか」という主観的認知にもとづく類似性を直接操作することが困難なためである。しかし、実際の類似性も主観的な類似性の認知に影響をおよぼすと想定できる。この想定と一致して、類似性の操作は「自分と内集団成員がどの程度似ていると思うか」という類似性の認知や「自分と内集団成員がどの程度共通点があると思うか」という共通性の認知を変化させていた。さらに、これらの類似性認知と共通性認知の合成得点も、実際の類似性と同様に主観的幸福感を向上させている。したがって、実際の類似性と類似性認知の影響は一貫しており、研究 2 の結果はほかの研究知見と整合的であると考えられよう。

7-3. 自己防衛モデルの適用範囲

本論文は自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応について、潜在性や集団地位、幸福感維持のプロセスをふくめた包括的なモデルを構築することができた。ただし、本論文の貢献はこれらの点にとどまらない。本論文は内集団との連合を通じた自己防衛反応のモデルを構築するだけでなく、同時にそのモデルがどこまで適用できるかを明らかにしている。具体的には、自尊心脅威と死の顕現性のそれぞれの脅威に対し、自己と内集団の連合を通

じた自己防衛反応が生じるかどうかを検証した。さらに、既存集団と新規集団の集団状況の違いにかかわらず、自己防衛反応が生じるかを分析した。また、自己と内集団の連合だけでなく、自己と外集団の連合を通じた自己防衛反応についても検討をおこなった。以上のように、本論文は自己防衛モデルの適用条件について、次の 3 点を検証している。

1. 自己脅威の状況（自尊心脅威・死の顕現性）
2. 集団状況（既存集団・新規集団）
3. 内集団と外集団の差異

まず、自己脅威の適用範囲について、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、自尊心脅威（研究 3・5）と死の顕現性（研究 4・6）のどちらの脅威に対しても生じていた。一見すると、自尊心脅威と死の顕現性は、共通性をもたない別々の次元の脅威であるととらえられるかもしれない。たとえば、本論文の自尊心脅威の操作ではテストに関する否定的な成績フィードバックを参加者に与えているが、その一方、死の顕現性の操作では死に関連する質問項目への回答を求めている。しかし、2 つの脅威はどちらも自己の全体的価値に対する脅威として位置づけることが可能であり、先行研究でも死の顕現性は自尊心脅威と同様の脅威を与えていることが確認されている（Hart et al., 2005; Hayes et al., 2008; Heine et al., 2006; Routledge, 2012）。

この知見と一致して、本論文でも自尊心脅威と死の顕現性は同一の防衛反応を引きおこしていた。つまり、テスト成績の否定的フィードバックや死に関連する質問項目の回答といった操作手法の違いにかかわらず、自己脅威によって自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が生起することが明らかになっている。したがって、本論文のモデルは自尊心脅威と死の顕現性といった複数の自己脅威状況に対して適用できると考えられる。たとえば、日常生活における自尊心脅威の状況として、テストで否定的フィードバックを受けるだけではなく、仕事で失敗する、スポーツで負ける、他者から非難・攻撃を受けるなど、さまざまな事例が挙げられる。同様に、死の顕現性が高くなる状況として、死に関連する質問項目に答えるだけでなく、頭上から物が落ちてくる、車に危うくひかれそうになるなど、死の脅威が高まる状況は日常生活においてありふれている。

そのうえ、死の脅威は非意識的に行動を規定しうる。つまり、われわれが自覚できない範囲で、死の脅威は人間の社会生活に影響を及ぼしているのである。たとえば、コンピュータ上で「死」という単語を自覚できない速さで提示されると（50 ミリ秒以下）、それに対

する防衛反応が生起する（Arndt, Allen, & Greenberg, 2001; Arndt, Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1997）。また、死そのものではなく死と関連のある情報への接触、たとえば、墓地の前を歩くことや老人の顔写真をみることも死に関する概念を非意識的に活性化させ、それに対する防衛反応を引きおこすことが明らかになっている（Martens, Greenberg, Schimel, & Landau, 2004; Pyszczynski, Wicklund, Floresku, Koch, Gauch, Solomon, & Greenberg, 1996）。このように、ささいな出来事でも死に関連する概念は容易に活性化し、それに対してわれわれは意識的・非意識的に対処するようにプログラミングされているのである。

これらの自己脅威に対して防衛反応をおこなう場合、どのような内集団であっても自己防衛のベースとして作用するのであろうか。つまり、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応のモデルは、どの内集団に対しても適用できるかが疑問として挙げられる。この点について、本論文では顕在的な防衛反応は集団地位が高い、もしくは、地位に関する情報がない場合に限定されるが、潜在的な防衛反応は集団地位にかかわらず適用できることを示した。さらに、これらの集団地位の要因にくわえて、本論文の自己防衛モデルは新規集団（研究 3・4）と既存集団（研究 5・6）の両方に当てはまることが示唆される。過去の研究では、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、所属大学や国家などの既存の内集団に対して生起することが示されている（Agostinelli et al., 1992; Alicke & Largo, 1995; Castano et al., 2002; Cialdini et al., 1976; Pinkley et al., 1988; Sherman et al., 1984; Wisman & Koole, 2003）。それに対し、本論文は最小条件集団パラダイムを使用することで、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が既存の内集団だけではなく、実験場面で作成された一時的な新規集団に対しても生じることを明らかにした。

最小条件集団パラダイムの使用に関して、参加者は絵の好みの判断傾向というささいな基準によって、見かけ上 2 つの集団に分類されている。実験において集団間や集団内の相互作用は一切存在せず、自分の所属する集団名だけが知らされる。このように、本論文のモデルは集団成員性だけが問題となる最小集団状況においても、内集団との連合を強めることが自己脅威の低減につながることを示唆している。したがって、人は脅威にさらされると、それに対処する方略の一つとして、そのときに利用可能な周囲の内集団をもちいて自己を防衛するのではないかと考えられる。

この点について、Halloran & Kashima（2004）は、死の脅威が高まると顕現性が高い内集団を通じて防衛反応が生じることを示している。具体的には、オーストラリア人の学生

の参加者に対して、「オーストラリア人」か「学生」のどちらかのカテゴリーを顕現化させ（それぞれの集団成員がよくおこなうことを記述させる）、平等主義や素直さ、学業達成という価値観に関する態度を測定した。その結果、オーストラリア人のカテゴリーが顕現化した参加者は、死の脅威を受けると、オーストラリア人の典型的な自己概念と一致した平等主義や素直さの項目について賛成度が高くなった。それに対し、学生のカテゴリーが顕現化した参加者は、死の脅威を受けると、学生の典型的な自己概念と一致した学業達成について賛成度が高くなった。したがって、複数の内集団が存在する場合、自己防衛反応は顕現性の高い内集団に対して生起しやすいと推測される。

Halloran & Kashima（2004）の知見をふまえると、最小条件集団のように一時的でささいな基準によって作られた内集団でも、実験操作によって顕現性が高まると、現実に存在する内集団と同様に自己防衛のベースとして作用するのではないかと推測される。つまり、自分にとってなじみのない曖昧な集団であっても、それが自分と関連づけられ、内集団として表象されると、自己脅威を低減するためにもちいられるのである。ただし、自己と内集団の連合を通じて顕在的に自己防衛反応が生起するためには、集団地位が高いもしくは中立である必要がある。反対に、新規集団であっても地位の低さに関連する情報が知覚されると、その内集団との連合を通じた自己防衛反応は顕在的には生じないであろう。

これまでみてきたように、自己と内集団の連合を通じた自己防衛モデルは、自尊心脅威や死の顕現性といった自己脅威の状況、また既存集団や新規集団という集団状況のいずれの状況においても適用できると想定される。その一方で、本論文の自己防衛モデルはあくまで自己と内集団の連合を強めることを通じた選択的なプロセスであり、自己と外集団の連合の強化による防衛反応は生じない（研究 3・4）。外集団は自己との関連性が低く（Clement & Krueger, 2002; Krueger, 1998）、精神状態を向上させることができないと考えられる。したがって、自己と外集団の連合の強化は自己防衛機能をもたず、脅威を受けても外集団との連合は高まらないのであろう。

ところで、本論文で報告した研究はすべて東京大学の学生を対象として実施しているが、ほかの属性をもったサンプルに対しても本論文のモデルを適用できるであろうか。本論文の研究で対象とした東京大学の学生の特徴として、顕在的・潜在的自尊心が一般的に高いと仮定すると、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は生じやすかったのではないかと解釈できる。この点について、先行研究では顕在的自尊心が高い人は親和性の増加を通じた間接的自己防衛が生じやすいことがわかっており（Murray et al., 1998; Park & Maner,

2009)、東京大学の学生は自己と内集団の連合を通じた防衛反応（親和性を通じた間接的自己防衛）を使用しやすかったかもしれない。

しかし、顕在的自尊心だけでなく、潜在的自尊心も高い場合、自己防衛反応は逆に弱くなることが示されている（Jordan et al., 2003; Jordan et al., 2005）。したがって、本論文で得られた知見を東京大学の学生というサンプルの特殊性に帰属することは困難であり、ほかの参加者にも一般化可能であると思われる。さらに、本論文の自己防衛モデルは集団地位の効果をふくんでおり、この効果が操作された実験において明らかにされたことをふまえると、東京大学の学生に限定的な効果であるとは考えにくいであろう。

一方で、先行研究では、抑うつ傾向の強い人や回避型の愛着スタイルをもつ人は自己と内集団の連合を通じた防衛反応が生起しにくいことが示唆されている（Agostinelli et al., 1992; Mikulincer et al., 1998; Pinkley et al., 1988）。そのため、これらの特性的な個人差を事前に測定したうえで、自己脅威が自己と内集団の連合に与える影響を分析することも有用となるであろう。つまり、抑うつ傾向の強い人や回避型の愛着スタイルをもつ人でも自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が生起するかどうか、また生起したときにその防衛反応が抑うつ傾向の弱い人やそのほかの愛着スタイルをもつ人よりも弱くなるかどうかを検討することが望まれる。

7-4. 自己防衛反応の生起のしやすさ

これまで述べてきたように、本論文は自己防衛の研究領域において、自己と内集団の連合に関する統合的モデルを構築することができた。それにくわえて、本論文の結果は自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応と、それ以外の自己防衛反応を比較した相対的な生起のしやすさを示していると解釈できる。たとえば、研究 3 において、参加者は自己と内集団成員、外集団成員の性格評定をおこなっており、自己と内集団成員の類似性を高めるだけでなく、自己と外集団成員の類似性を低下させることや、集団間バイアスを強めることを通じて自己を防衛することが可能であったと推測される。

理論編第 2 部で述べた通り、自己脅威状況における防衛反応には、直接的自己防衛と 3 種類の間接的自己防衛（親和性の増加、攻撃性の増加、回避傾向の増加）が存在している。この枠組みでは、自己と内集団成員の類似性を高めることは親和性の増加、自己と外集団成員の類似性を低下させることは回避傾向の増加、集団間バイアスを強めることは攻撃性

の増加（あるいは、親和性と攻撃性の増加の両方）にそれぞれ対応している。すなわち、研究 3 では親和性を通じた自己防衛反応だけでなく、攻撃性や回避傾向の増加を通じた自己防衛反応が生じる余地があったと思われる。

それにもかかわらず、研究 3 をふくめ、本論文では一貫して内集団との連合を通じた自己防衛反応、すなわち親和性の増加にもとづく自己防衛反応が生じており、それ以外の防衛反応は生起していなかった。先行研究によると、自己脅威状況では、いずれか一つの自己防衛反応が生じると仮定されており（Sherman & Cohen, 2006; Tesser, 2000）、ある特定の自己防衛反応が生じると、別の種類の自己防衛反応は生じなくなる（Fein & Spencer, 1997; Hart et al., 2005; McGregor et al., 1998; Tesser & Cornell, 1991）。よって、親和性を通じた自己防衛反応が先に生じていたために、攻撃性や回避傾向の増加を通じた自己防衛反応は生起しなかったと示唆される。それでは、なぜ親和性を通じた自己防衛反応は、そのほかの防衛反応とくらべて生じやすかったのであろうか。

親和性の増加を通じた自己防衛反応や攻撃性の増加を通じた防衛反応、回避傾向の増加を通じた防衛反応は、いずれも自己脅威による否定的影響を低減するという点で共通している。しかし、外集団成員を否定的に評価したり、外集団成員との接触を回避するなど、攻撃性や回避傾向の増加を通じた自己防衛反応は、その外集団成員や外集団全体との関係性を悪化させたり、翻って外集団からの非難や攻撃行動を引きおこす可能性がある。それに対して、親和性の増加を通じた自己防衛反応は外集団との関係性を悪化させないだけでなく、自己と内集団の良好な関係性の構築にもつながりやすい。

具体的には、脅威状況において内集団に対して好意的にふるまうほど、それ以外の状況でも内集団成員からサポートを得やすくなるであろう。その結果として、自己と内集団の心理的連合は恒常的に強まり、内集団からのサポートをさらに得るなど、自己と内集団の連合の強化によって内集団との関係性はより緊密になると思われる。また、日常生活において、内集団成員は外集団成員よりも一般的に接触の機会が多い。したがって、自己が脅威にさらされたときに、外集団に対する攻撃性や回避傾向の増加を通じた防衛反応とくらべて、内集団に対する親和性の増加を通じた自己防衛反応は利用可能性が高いであろう。このように、親和性を通じた自己防衛反応は肯定的な帰結をもっており、また日常生活において利用可能性が高いため、ほかの種類の自己防衛反応よりも生じやすいのではないかと考えられる。

しかし、親和性の増加を通じた自己防衛反応が優先して生起するのは、最小集団状況に

限定されるかもしれない。本論文は最小条件集団パラダイムを使用した研究 3 と研究 4 において、親和性と攻撃性、回避傾向を通じたそれぞれの防衛反応を比較している。一方、ほかの研究では、自己と内集団の連合を通じた自己防衛、つまり親和性の増加を通じた防衛反応のみをあつかっており、攻撃性や回避傾向の増加を通じた自己防衛反応は検証してはいない。最小条件集団パラダイムでは集団成員性のみを操作しているため、内集団と外集団の差異がかならずしも強調されてはおらず、2 つの集団の間の関係性は対立的ではない。それに対し、内集団と外集団が対立的な状況では、外集団の顕現性が高く、それぞれの集団の差異が強調されやすい。したがって、最小集団状況ではない文脈では、親和性の増加を通じた自己防衛反応よりも、攻撃性や回避傾向の増加を通じた防衛反応が優先して生じる可能性がある。この可能性については、今後あらためて検証する必要があると思われる。

親和性の増加を通じた自己防衛反応に関して、本論文は脅威状況において自己と内集団の連合が強くなると一貫して仮定し、そのプロセスを実証してきた。しかし、本論文の仮定とは反対に、自己と内集団の連合を弱めることも自己防衛反応として機能する可能性がある。たとえば、人間は「他者と似ていたい」という類似性（同化）欲求だけではなく、「他者とは異なる独自の存在でありたい」という差異化の欲求をもつことが指摘されている（Brewer, 1991）。実際に、本論文の研究 1 では、自己と内集団成員の類似性が高い人ほど主観的幸福感は高い傾向にあったが、一部の人は内集団成員との類似性が低くても主観的幸福感は高かった。このように自己と内集団成員の類似性がもともと低い人は、自己脅威を受けると類似性をさらに低くする、すなわち差異化の欲求を満たすことで自己を防衛しているかもしれない。その一方、ふだんは自己と内集団成員の類似性が低くても、自己脅威を受けると類似性が高くなる可能性も指摘できよう。この場合、類似性がもたらす肯定的な効果は、自己脅威状況においてはじめて発揮されることになる。

以上の通り、本論文で示した自己防衛反応には、個人差が存在することも十分に想定できる。しかし、参加者全員のデータにもとづくと、自己脅威状況では類似性（同化）欲求が差異化の欲求よりも優先されることを本論文の知見は示している。合意性に関する先行研究においても、フォールス・コンセンサス効果（自分の態度の共有性を過大に推測する傾向）とフォールス・ユニークネス効果（自分の態度の共有性を過小に推測する傾向）の両方が生じうる状況では、フォールス・コンセンサス効果が生じることがほとんどであると指摘されている（Biernat, 2005）。これらの先行研究や本論文の結果をふまえるならば、一部の人は自己と内集団の連合を弱めることを通じて自己を防衛する可能性は否めないが、

全体として、自己と内集団の連合の強化を通じた自己防衛反応のほうが使用されやすいと結論できるであろう。

いままでみてきたように、自己防衛反応にはさまざまな方略があり、状況や個人に応じて特定の防衛反応が優先して使用されているかもしれない。ただし、人は複数の自己防衛反応をかならずしも意識的に使い分けているわけではない。自己防衛プロセスは非意識的に生じる場合が多く、自身の反応が自己防衛を目的としていることに参加者は概して気づかない（Sherman & Cohen, 2006; Tesser, 2000）。そのうえ、自身の反応が自己防衛に関与することを明示的に告げられると、自己防衛反応は低減する（Sherman et al., 2009）。内集団同一視を強めるなど、親和性の増加自体に自覚的である場合も想定できるが、自己防衛反応そのものは参加者が「脅威から自己を防衛しよう」と意図的に始動させたものではなく、非意図的に防衛反応が始動し、自己脅威に対処しているのである。それゆえ、自己防衛反応の選択も多くの場合は非意識的であり、周囲に利用可能な内集団が存在すると、それがはじめてみる内集団であっても脅威の防衛方略として使用されると考えられる。

このような一連の非意識的な防衛プロセスは、脅威からの防衛システムが自動的に生じ、われわれが主体的に介入する必要性がないことを示唆している。本論文の研究 4 や研究 6 においても、自己と内集団の連合は顕在的なレベルにくわえて、潜在的なレベルで強化されていた。すなわち、自己防衛反応はわれわれに組み込まれた根源的なシステムであり、自己脅威に素早く対処するために、顕在的・潜在的な防衛反応に関する心的メカニズムがデザインされてきたと考えられる。よって、これらの自己防衛反応は自己脅威を受けたときのデフォルトの戦略として存在しているのであろう。

7-5. 自己と内集団の連合の形成過程

前節では、自己と内集団の連合の強化を通じた自己防衛反応がそのほかの防衛反応よりも生じやすい可能性を指摘した。それでは、脅威状況において自己と内集団の連合が強くなることは、どのようなプロセスを反映しているのであろうか。集団内関係（intragroup relationships）の領域では、自己と内集団の連合が形成されるプロセスについて検討がおこなわれている（Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Otten & Wentura, 2001; Simon, 1997; Tajfel & Turner, 1979; Turner et al., 1987）。内集団との連合形成に関して、本論文で示した自己防衛反応は自己が内集団に同化している（ステレオタイプ化;

Simon, 1997; Tajfel & Turner, 1979; Turner et al., 1987)、内集団が自己に同化している（アンカリング; Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Otten & Wentura, 2001)、のいずれかもしくは両方のプロセスを反映していると考えられる。

内集団との連合形成がステレオタイプ化にもとづくと仮定すると、自己と内集団成員の類似性を通じた自己防衛反応は、脅威状況において自己評定が内集団成員の評定に近づくことを意味している。それに対し、アンカリングのプロセスにもとづくと、自己と内集団成員の類似性を通じた自己防衛反応は、内集団成員の評定が自己評定に近づくことになる。一方で、ステレオタイプ化とアンカリングの両方のプロセスが生じている、すなわち自己評定と内集団成員の評定が相互に近づいている可能性もある。概念連合をもちいた研究では内集団との連合形成がどのプロセスにもとづくかを弁別することが困難であるが、類似性の研究では自己と内集団成員の評定値の変化を分析することで、内集団との連合形成が 3 種類のうちどのプロセスを反映しているかを検証することができる。

しかし、研究 3 と研究 5 で自尊心脅威が自己評定と内集団成員の評定値に与える影響について分析した結果、いずれの研究でも自己や内集団成員の評定値は変化していなかった。よって、本論文の結果からは、ステレオタイプ化とアンカリングのプロセスを弁別することが困難であると思われる。ただし、自己評定と内集団成員の評定値は自己脅威の条件間で異ならないものの、事前に評定値の測定をおこなうことで、自己と内集団の連合形成が個人内でどのように変化するかというプロセスを明らかにできるかもしれない。

一方で、研究 3 は最小条件集団パラダイムを使用している。このパラダイムでは、参加者の事前知識が一切存在しない新規の内集団が対象になるため、内集団成員に対する概念や性格認知は実験のその場で形成されていることになる。したがって、研究 3 では、ステレオタイプ化ではなくアンカリングのプロセスが働いていたと考えられよう。すなわち、脅威状況において、内集団成員の評定が自己評定に近づいていたと解釈できる。他方で、研究 5 ではアンカリングだけでなく、ステレオタイプ化のプロセスも生じた可能性がある。つまり、参加者にとって既知の内集団の場合、内集団成員の評定が自己評定に近づくだけでなく、自己評定が内集団成員の評定に近づくことも十分に想定できる。以上の議論から、本論文の知見は、自己と内集団の連合形成が少なくともアンカリングのプロセスをふくむことを示唆している。

このように、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応がアンカリングのプロセスをふくむとすると、内集団が自己に同化していることになる。一般的に自己概念は固定的であ

るため（Krueger, 1998, 2007）、内集団や内集団成員に対する認知を変化させることで自己と内集団の連合を強化しているのであろう。ともすると、自己と内集団の心理的連合は安定しており、実験操作によって変化しない特性的な性質をもっていると考えられるかもしれない（e.g., Gawronski & Strack, 2004; Petty, Tormala, Brinol, & Jarvis, 2006）。しかし、人は脅威にさらされると、自己を防衛するために内集団に対する認知や自己と内集団の連合を柔軟に変化させているのである。以上のように、本論文は脅威状況における能動的な自己の制御モデルを提示したという点でも意義があると思われる。

ところで、本論文の理論編第 1 部では、集団所属や内集団との連合は人間が社会生活を営むうえで必要不可欠であることを指摘した。具体的には、所属集団の数が多く、集団での活動頻度が多い人ほど、健康状態や精神状態が向上する（Argyle, 1987; Boden-Albala et al., 2005; Cohen et al., 2003; Eng et al., 2002; Ertel et al., 2008; Ford et al., 2006; Myers, 1992）。同様に、内集団への同一視が強い人ほど、健康状態や精神状態が向上する（Bailis et al., 2008; Bizumic et al., 2009: Cole et al., 1996; Haslam & Reicher, 2006; Levy et al., 2002; Luhtanen & Crocker, 1992; Platow et al., 2007）。これらの実証的知見にもとづくと、自己への脅威を受けたときに、集団所属もしくは自己と内集団の連合のいずれかを促進することで、自己脅威による否定的影響を低減できると推測される。

しかし、所属集団の数や活動頻度の多さなど、集団所属の変数を実際に制御することは難しいであろう。人は誰しも何らかの集団に所属しているが、所属集団の数を状況に応じて意図的に変化させることは困難である。また、活動頻度や集団とのかかわりあいは、自分だけではなく、ほかの集団成員の考えや行動をふまえなければならない。当然ながら、自己脅威を受けたときに所属集団の数を増やすなど、実際の集団所属を自己防衛のために常日頃もちいることはほぼ不可能に近い。それに対し、自己と内集団の心理的連合を強めることはそれ自体が内集団成員に依存しておらず、自己の状況に応じて制御できる柔軟なプロセスである。たとえば、参加者は所属している東京大学に対して、その成員の性格を自分と同じように変えることはできないが、「自分と東京大学の学生の性格は似ている」と認知を変化させることはいつでも可能である。

これに関連して、ポジティブ幻想に関する研究は、自己評価や能力を現実よりも好ましく認知することで、精神状態が維持されることを指摘している（Taylor & Brown, 1988, 1994）。つまり、自己評価や能力を過大に評価するポジティブ幻想には適応的な側面があり、正確さを犠牲にしても自己の認知にバイアスをかけることによって、心理的安寧が保たれ

ているのである。本論文でも、内集団との連合を戦略的に強めた結果として、精神状態が維持されるという一連の肯定的影響が明らかになっている。したがって、自己脅威状況における自己と内集団の連合の強化も、精神状態を維持するために自己の認知を変化させる適応的なバイアスであると結論づけることができよう。以上のように、本論文は集団内関係の領域において、自己と内集団の連合が状況に依存する可変的な制御プロセスであることを指摘するとともに、その制御プロセスが個人の精神状態の維持を目的とした適応的な認知バイアスであることを解明したという点で重要な意義をもつと考えられる。

7-6. 自己防衛反応の適応的価値

自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、ポジティブ幻想と同様に適応的な認知バイアスであると示唆される。ただし、ここで述べている適応の意味は、理論編で述べた適応の意味とかならずしも同一ではない。そこで、これらの適応の意味を弁別したうえで、本論文の自己防衛反応がもつ適応的価値をあらためて議論する。本論文は理論編第 1 部において、適応論的視点から集団への所属欲求を議論しているが、ここでの適応とは、「ある個体が生存や繁殖で有利な特性をもっている」という進化的適応を意味している。一方、本論文の内集団との連合を通じた自己防衛反応は進化的適応でなく、「精神状態を維持する」という心理的・情緒的意味での適応を意味している。したがって、内集団との連合を通じて自己を防衛するという傾向が、かならずしも個人の生存や繁殖のために有利であるとはかぎらない。また、本論文で対象としている反応は認知的な反応であり、行動ではない。その点でも、行動を対象とする進化的な適応論的視点とは区別されるであろう。

しかし、自己脅威は個人の自尊心や主観的幸福感を低下させており、これらの自己脅威を適切に処理できないと、精神状態だけではなく健康状態も悪化し、日常生活に支障が出ると想定される。場合によっては自殺や殺人など、生死を左右する可能性もあろう。以上のように、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は精神状態を維持することを通じて、日常生活に支障をきたさないよう働きかけていると考えられる。一方で、本論文で提唱した自己防衛反応は、「集団への所属欲求を高める」という意味でも適応的であると思われる。つまり、自己防衛反応それ自体は自己脅威の効果を低減することを目的としているが、同時にその過程において、既存の集団や新たな集団との心理的連合を強めている。その結果、集団との関係性はより緊密になり、内集団からさまざまな恩恵を得ることができる。すな

わち、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、生存確率を高めるという進化的適応にも間接的に寄与する可能性が指摘できよう。今後はこれらの進化的適応の観点にもとづく実証的な仮説について、さらなる検証をしていくことが求められる。

ところで、接触の機会が多い（もしくは多いと予想される）既存・新規の内集団でなく、最小集団状況において自己と内集団の連合を強めることは、どのような適応的価値をもつのであろうか。最小集団状況では対面的な相互作用は一切存在せず、内集団は一時的に作られた人工的な集団に過ぎない。しかし、社会的アイデンティティ理論によると、このような最小限の内集団であっても、集団間バイアスを通じて自尊心を向上することができる。この仮定と一致して、集団間バイアス（もしくは内集団同一視）は最小条件集団パラダイムのもとでも安定して観察されている（Brewer, 1979; Tajfel et al., 1971）。以上の社会的アイデンティティ理論の仮定や実証研究から、自己と内集団の連合は集団間バイアスと同様に、最小集団状況でも自尊心を向上させる機能をもつのではないかと推測される。

また、社会的排斥に関する研究では、孤独感を喚起されると、ほかの人との関連を強めるだけでなく、人間でない物や動物を人のように知覚することが示されている（Epley et al., 2008; Gardner et al., 2005）。このように、人間でない物や動物でも親和欲求を満たすことをふまえると、最小集団状況における内集団も実際の集団と同様に所属欲求を満たすことができると思われる。上記の議論から、最小集団状況における自己と内集団の連合はほかの内集団と同様に、自尊心向上と集団所属の欲求を満たし、「主観的幸福感を維持する」という適応的側面をもっていると示唆される。

他方で、「集団への所属欲求を高める」という点では、最小集団状況において一時的な内集団との関係性を緊密にしても、適応的価値をもたないと推測される。それにもかかわらず、なぜ自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応が生じるのであろうか。これは、脅威状況において「内集団」という手がかりを認知すると、人はそれに対する関係性を強めようと非意識的に反応してしまうからであると考えられる。先述したように、内集団との連合を通じた自己防衛反応は、脅威状況において自動的に作用するよう人間に組み込まれたシステムであると位置づけられる。また、内集団との連合は自己の状況に応じて制御できる柔軟なプロセスであり、「自分と内集団成員の性格は似ている」と認知を変化させることはいつでも可能である。つまり、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応はほとんどコストがかからない。一方で、自己と内集団の連合の強化は主観的幸福感を維持しており、集団への所属欲求を高めるという効果もあわせもつ。これらの特性をもった結果として、

自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は「内集団」を手がかりとして、関係性を緊密にしても恩恵が得られない内集団に対しても自動的に作動（ある意味誤作動）するようにデザインされてきたと考えられよう。

7-7. 今後の展望

最後に、今後の展望について議論する。本論文の自己防衛モデルでは、自己脅威状況で自己と内集団の連合を強めることで、精神状態が維持されると仮定している。実際に、自己と内集団成員の類似性は精神状態を向上させており（研究 1・2)、内集団同一視や概念連合は脅威状況において主観的幸福感を維持する働きをもつことが明らかになっている（研究 6)。もし自己と内集団の連合以外の防衛方略、たとえば攻撃性や回避傾向を通じた自己防衛が使用されたとしても、同様に精神状態が維持されると予測される。しかし、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は脅威状況において精神状態を維持するだけでなく、他者との関係を悪化させないという点で有用であると思われる。

たとえば、自己脅威を受けたときに集団間バイアスを強めると、自己の精神状態を維持できるものの、外集団に対する態度が悪化してしまう。その結果、外集団への偏見や差別など、否定的な行動が生起しやすくなるであろう。さらに、外集団に対する自己の態度・行動が否定的になることで、自己や内集団に対する外集団の態度・行動が否定的になる可能性も高い。場合によっては、集団間バイアスを通じた自己防衛反応によって集団間関係が悪化し、外集団から非難・攻撃を受けるなど、さらなる脅威を招いてしまう恐れもある。それに対して、自己と内集団の連合を通じて自己を防衛しても、自己と内集団という集団内関係に影響を与えるかもしれないが、自己と外集団、もしくは内集団と外集団という集団間関係には直接影響をおよぼさない。実際に、集団内関係に影響を与えていたとしても、脅威状況において内集団に対して好意的にふるまうと予測されるため、他者との関係性は否定的にはならないであろう。

このように、自己と内集団の連合をもちいた自己防衛反応は、個人の精神状態の維持だけでなく、他者との関係性を悪化させないという点でも望ましいと思われる。しかし、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、たしかに直接的には他者との関係性を悪化させないが、間接的には外集団との関係性を悪化させるかもしれない。具体的には、自己脅威状況において自己と内集団の連合を強めることで、外集団や外集団成員に対する態度が

否定的になる可能性がある。この可能性を支持する研究として、Perreault & Bourhis（1999）や Sechrist & Stangor（2001）があげられる。これらの研究は内集団との連合が強いと、外集団や外集団成員への態度が否定的になることを示している。たとえば、内集団同一視が強まると、外集団成員への差別行動が増加しやすい（Perreault & Bourhis, 1999）。一方、自己と内集団の連合を強めても、外集団成員に対する態度はかならずしも否定的にはならないことが指摘されており（Duckitt, Callaghan, & Wagner, 2005; Mummendey, Klink, & Brown, 2001）、場合によっては、自己と内集団の連合の強化を通じて外集団成員への態度が肯定的になることもある。このように、自己と内集団の連合と外集団成員への態度との関連について、先行研究の知見は一貫してはいない。

本論文の研究 3 や研究 4 では、自己脅威を受けても自己や内集団成員、外集団成員の評定値はそれぞれ変化していなかった。さらに、自己と内集団成員の類似性・概念連合と外集団成員の評定値の間に有意な相関関係は観察されていない。したがって、自己脅威状況で内集団との連合を強化しても、外集団成員に対する態度は否定的にはならないと示唆される。ただし、最小条件集団パラダイムや所属大学などの集団状況ではなく、より競争的な関係にある集団状況をもちいた場合は、自己と内集団の連合を強めることによって外集団成員への態度は否定的になりやすいであろう。実際に、過去の研究は、内集団と外集団が対立的であるほど、内集団との連合の強化が外集団や外集団成員に対する敵対的態度を生むことを報告している（Brown, Wohl, & Exline, 2008; Duckitt & Mphuthing, 1998）。これらの先行研究をふまえ、競争的な関係にある集団状況を使用した際に、自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応の結果として外集団成員への態度が否定的になるかどうか、および、実際に態度が否定的になったときに、その影響を低減できるかどうかを検討することが今後の課題として挙げられる。

これまでの全体を通して、本論文は自己と内集団の連合をもちいた自己防衛反応について検証・議論をおこない、それらのプロセスについて説明する自己防衛モデルを提示した。自己と内集団の連合を通じた自己防衛反応は、人間が社会集団のなかで生活することによってはじめて成立する対処方略である。人間は内集団とのかかわりあいを通じて資源を交換し、心理的なサポートを相互に提供している。何らかの理由で自己に脅威が与えられた際には、周囲の身近な内集団との心理的連合を強めることで、自己脅威による影響を緩和することができる。さらに、最小集団状況に代表されるように、仮に集団成員がその場にいなくても、所属集団との連合を喚起させることで、個人の精神状態を維持することが可

能になる。つまり、内集団は集団のなかでの生活という文脈を超えて、目前にほかの集団成員がいなくても、あらゆる場面で影響をおよぼしているのである。このように、本論文のモデルは、われわれの日常生活において内集団が果たす重要な役割の一端を示すことができたと考えられる。

また、本論文の自己防衛モデルに関する心的メカニズムは、状況や対象を問わずに一般化できると思われる。先述した通り、自己防衛反応は日本をふくめた東アジアだけでなく、欧米などの異文化でも生じうる（Hepper et al., 2010; Hepper et al., 2013）。さらに、誰もが自分にとって重要な集団をもっており、その集団との心理的連合を通じて脅威に対処することができる。一方で、自分にとって重要な集団が肯定的な特徴を備えているとはかぎらない。自分にとって重要な集団でも、他者から非難されやすいなど、集団の地位が低い場合もある。このように、仮に内集団の地位が低く、否定的特徴をもっていたとしても、潜在的には防衛反応が生じることを本論文のモデルは示している。つまり、どのような集団との連合でも自己防衛反応として機能する可能性を明示したという点も、本論文の重要な知見である。

本論文はこれまでに、自己と内集団の連合は自己防衛のために存在すると仮定し、それに関連した知見を実証してきた。自己と内集団の連合は自己が脅威にさらされると強くなり、脅威状況において精神的状態を維持する機能をもっている。一方で、当然ではあるが、自己と内集団の連合は自己防衛だけでなく、さまざまな機能をもつと想定される。たとえば、人は内集団との連合を通じて集団の価値を取りこみ、その枠組みのなかで自分自身や自分を取りまく世界を理解している（Tajfel & Turner, 1986）。これらの自己と内集団の連合が果たす機能や、ひいては人間にとっての内集団の存在意義やあり方について、これからも継続的な検討が望まれるであろう。

引用文献

阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊心尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.

Aberson, C. L., Healy, M., & Romero, V. (2000). Ingroup bias and self-esteem: A meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, **4**, 157-173.

Abrams, D., & Hogg, M. A. (1988). Comments on the motivational status of self-esteem in social identity and intergroup discrimination. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 317-334.

Acitelli, L. K., Douvan, E., & Veroff, J. (1993). Perceptions of conflict in the first year of marriage: How important are similarity and understanding? *Journal of Social and Personal Relationships*, **10**, 5-19.

Agostinelli, G., Sherman, S. J., Presson, C. C., & Chassin, L. (1992). Self-protection and self-enhancement biases in estimates of population prevalence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 631-642.

AhYun, K. (2002). Similarity and attraction. In M. Allen, R. W. Preiss, B. M. Gayle,. & N. A. Burrell (Eds.), *Interpersonal communicafion research: Advances through meta-analysis* (pp. 145-168). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Alicke, M. D., & Largo, E. (1995). The role of the self in the false consensus effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, **31**, 28-47.

Alicke, M. D., & Sedikides, C. (2011). *Handbook of self-enhancement and self-protection*. The Guilford Press.

Allen, V. L., & Wilder, D. A. (1975). Categorization, belief similarity, and intergroup discrimination. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 971-977.

Ames, D. R. (2004). Inside the mind reader's tool kit: Projection and stereotyping in mental state inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 340-353.

Argyle, M. (1987). *The psychology of happiness*. London: Methuen.

Arndt, J., Allen, J. J., & Greenberg, J. (2001). Traces of terror: Subliminal death primes and facial electromyographic indices of affect. *Motivation and Emotion*, **25**, 253-277.

Arndt, J., Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1997). Subliminal exposure to death-related stimuli increases defense of the cultural worldview. *Psychological Science*, **8**, 379-385.

Aron, A., Aron, E. N., Tudor, M., & Nelson, G. (1991). Close relationships as including other in the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 241-253.

Baccus, J. R., Baldwin, M. W., & Packer, D. J. (2004). Increasing implicit self-esteem through classical conditioning. *Psychological Science*, **15**, 498-502.

Bailis, D. S., Chipperfield, J. G., & Helgason, T. R. (2008). Collective self-esteem and the onset of chronic conditions and reduced activity in a longitudinal study of aging. *Social Science and Medicine*, **66**, 1817-1827.

Banaji, M. R. (2001). Implicit attitudes can be measured. In H. L. Roedeger, J. S. Nairne, I. Neath, & A. Surprenant (Eds.), *The nature of remembering: Essays in honor of Robert G. Crowder* (pp. 117-150). Washington, DC: American Psychological Association.

Banaji, M. R., & Heiphetz, L. (2010). Attitudes. In D. T. Gilbert & S. T. Fiske (Eds.). *Handbook of social psychology* (pp. 353-393). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.

Barash, D. P. (1977). *Sociobiology and behavior*. New York: Elsevier.

Bargh, J. A. (1989). Conditional automaticity: Varieties of automatic influence in social perception and cognition. In J. S. Uleman & J. A. Bargh (Eds.), *Unintended thought* (pp. 3-51). New York: Guilford.

Bargh, J. A. (1994). The four horsemen of automaticity: Awareness, intention, efficiency, and control in social cognition. In R. S. Wyer, Jr. & Srull, T. K. (Eds.), *Handbook of social cognition* (pp. 1-40). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Baumeister, R. F. (2012). Need-to-belong theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology* (pp. 121-140). Thousand Oaks, CA: Sage Publications Ltd.

Baumeister, R. F., Brewer, L. E., Tice, D. M., & Twenge, J. M. (2007). Thwarting the need to belong: Understanding the interpersonal and inner effects of social exclusion. *Social and Personality Psychology Compass*, **1**, 506-520.

Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Twenge, J. M. (2005). Social exclusion impairs self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 589-604.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.

Beauregard, K. S., & Dunning, D. (1998). Turning up the contrast: Self-enhancement motives prompt egocentric contrast effects in social judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 606-621.

Berg, E. A. (1948). A simple objective technique for measuring flexibility in thinking.

Journal of General Psychology, **41**, 174-181.

Bettencourt, B., & Bartholow, B. D. (1998). The importance of status legitimacy for intergroup attitudes among numerical minorities. *Journal of Social Issues*, **54**, 759-775.

Bettencourt, B., Charlton, K., Dorr, N., & Hume, D. L. (2001). Status differences and in-group bias: A meta-analytic examination of the effects of status stability, status legitimacy, and group permeability. *Psychological Bulletin*, **127**, 520-542.

Biernat, M. (2005). *Standards and expectancies: Contrast and assimilation in judgments of self and others.* New York, NY: Routledge.

Bizumic, B., Reynolds, K. J., Turner, J. C., Bromhead, D., & Subasic, E. (2009). The role of the group in individual functioning: School identification and the psychological well-being of staff and students. *Applied Psychology*, **58**, 171-192.

Blaine, B., & Crocker, J. (1993). Self-esteem and self-serving biases in reactions to positive and negative events: An integrative review. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem: The puzzle of low self-regard* (pp. 55-85). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Blanton, H., & Jaccard, J. (2006). Arbitrary metrics in psychology. *American Psychologist*, **61**, 27-41.

Bliese, P. D., & Halverson, R. R. (1998). Group consensus and psychological well-being: A large field study. *Journal of Applied Social Psychology*, **28**, 563-580.

Boden-Albala, B., Litwak, E., Elkind, M. S. V., Rundek, T., & Sacco, R. L. (2005). Social isolation and outcomes post stroke. *Neurology*, **64**, 1888-1892.

Bosson, J. K., Swann, W. B. J., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revised? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.

Bourgeois, K. S., & Leary, M. R. (2001). Coping with rejection: Derogating those who choose us last. *Motivation and Emotion*, **25**, 101-111.

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Separation anxiety and anger* (Vol. 2). New York: Basic Books.

Brendl, C. M., Markman, A. B., & Messner, C. (2005). Indirectly measuring evaluations of several attitude objects in relation to a neutral reference point. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 346-368.

Brewer, M. B. (1979). In-group bias in the minimal intergroup situation: A cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, **86**, 307-324.

Brewer, M. B. (1991). The social self: On being the same and different at the same time. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **17**, 475-482.

Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love and outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429-444.

Brown, R. P., Wohl, M. J., & Exline, J. J. (2008). Taking up offenses: Secondhand forgiveness and group identification. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 1406-1419.

Buss, D. M. (1990). Evolutionary social psychology: Prospects and pitfalls. *Motivation and Emotion*, **14**, 265-286.

Byrne, D. (1961). Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 713-715.

Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.

Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 659-663.

Cadinu, M. R., & De Amicis, L. (1999). The relationship between the self and the ingroup: When having a common conception helps. *Swiss Journal of Psychology*, **58**, 226-232.

Cadinu, M. R., & Rothbart, M. (1996). Self-anchoring and differentiation processes in the minimal group setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 661-677.

Campbell, J. D. (1986). Similarity and uniqueness: The effects of attribute type, relevance, and individual differences in self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 281-294.

Campbell, W. K., & Sedikides, C. (1999). Self-threat magnifies the self-serving bias: A meta-analytic integration. *Review of General Psychology*, **3**, 23-43.

Campbell, W. K., Sedikides, C., Reeder, G. D., & Elliot, A. J. (2000). Among friends? An examination of friendship and the self-serving bias. *British Journal of Social Psychology*, **39**, 229-239.

Caporael, L. R. (1997). The evolution of truly social cognition: The core configurations model. *Personality and Social Psychology Review*, **1**, 276-298.

Caporael, L. R., & Baron, R. M. (1997). Groups as the mind's natural environment. In J. Simpson & D. Kenrick (Eds.), *Evolutionary social psychology* (pp. 317-343). Hillsdale: NJ: Lawrence Erlbaum

Castano, E., & Dechesne, M. (2005). On defeating death: Group reification and social identification as immortality strategies. *European Review of Social Psychology*, **16**, 221-255.

Castano, E., Yzerbyt, V., Paladino, M. & Sacchi, S. (2002). I belong, therefore, I exist:

Ingroup identification, ingroup entitativity, and ingroup bias. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 135-143.

Chaiken, S. & Trope, Y. (1999). *Dual-process theories in social psychology*. New York: Guilford Press.

Chen, F. F., & Kenrick, D. T. (2002). Repulsion or attraction? Group membership and assumed attitude similarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 111-125.

Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. (1976). Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 366-375.

Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology,* **39**, 279-299.

Coats, S., Smith, E. R., Claypool, H. M., & Banner, M. J. (2000). Overlapping mental representations of self and in-group: Reaction time evidence and its relationship with explicit measures of group identification. *Journal of Experimental Social Psychology,* **36**, 304-315.

Cohen, S., Doyle, W. J., Turner, R., Alper, C. M., & Skoner, D. P. (2003). Sociability and susceptibility to the common cold. *Psychological Science*, **14**, 389-395.

Cole, S. W., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Visscher, B. R. (1996). Elevated physical health risk among gay men who conceal their homosexual identity. *Health Psychology*, **15**, 243-251.

Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, **82**, 407-452.

Correll, J., & Park, B. (2005). A model of the ingroup as a social resource. *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 341-359.

Crocker , J. Major , B. Steele , C. (1998). Social stigma. In DT Gilbert & ST Fiske (Eds.), *The handbook of social psychology* (pp. 504-553). New York: McGraw-Hill.

Cunningham, W. A., Preacher, K. J., & Banaji, M. R. (2001). Implicit attitude measures: Consistency, stability, and convergent validity. *Psychological Science*, **12**, 163-170.

DeHart, T., Pelham, B., & Murray, S. (2004). Implicit dependency regulation: Self-esteem, relationship closeness, and implicit evaluations of close others. *Social Cognition*, **22**, 126-146.

De Houwer, J. (2003). The Extrinsic Affective Simon Task. *Experimental Psychology*, **50**, 77-85.

Devos, T., & Banaji, M. R. (2003). Implicit self and identity. *Annals of the New York*

Academy of Sciences, **1001**, 177-211.

Devos, T., & Banaji, M. R. (2005). American = white? *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 447-466.

DeWall, C. N., Baumeister, R. F., Stillman, T. F., & Gailliot, M. T. (2007). Violence restrained: Effects of self-regulation and its depletion on aggression. *Journal of Experimental Social Psychology*, **43**, 62-76.

Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, **125**, 276-302.

Dijksterhuis, A. (2004). I like myself but I don't know why: Enhancing implicit self-esteem by subliminal evaluative conditioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**, 345-355.

Dodgson, P. G., & Wood, J. V. (1998). Self-esteem and the cognitive accessibility of strengths and weaknesses after failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 178-197.

Dovidio, J. F., Kawakami, K., Johnson, C., Johnson, B., & Howard, A. (1997). On the nature of prejudice: Automatic and controlled processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 510-540.

Duckitt, J., Callaghan, J., & Wagner, C. (2005). Group identification and outgroup attitudes in four South African ethnic groups: A multidimensional approach. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 633-646.

Duckitt, J., & Mphuthing, T. (1998). Group identification and intergroup attitudes: A longitudinal analysis in South Africa. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 80-85.

Ellemers, N. (1993). The influence of socio-structural variables on identity management strategies. *European Review of Social Psychology*, **4**, 27-57.

Ellemers, N., & Barreto, M. (2001). The impact of relative group status: Affective, perceptual and behavioral consequences. In R. Brown & S. L. Gaertner (Eds.), *Blackwell handbook of social psychology: Intergroup processes* (pp. 324-343). Oxford: Blackwell.

Ellemers, N., Doosje, B., Van Knippenberg, A., & Wilke, H. (1992). Status protection in high status minority groups. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 123-140.

Ellemers, N., Van Knippenberg, A., De Vries, N., & Wilke, H. (1988). Social identification and permeability of group boundaries. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 497-513.

Ellemers, N., Van Knippenberg, A., & Wilke, H. (1990). The influence of permeability of

group boundaries and stability of group status on strategies of individual mobility and social change. *British Journal of Social Psychology*, **29**, 233-246.

Ellemers, N., Wilke, H., & Van Knippenberg, A. (1993). Effects of the legitimacy of low group or individual status on individual and collective status-enhancement strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 766-778.

Eng, P. M., Rimm, E. B., Fitzmaurice, G., & Kawachi, I. (2002). Social ties and change in social ties in relation to subsequent total and cause-specific mortality and coronary heart disease incidence in men. *American Journal of Epidemiology*, **155**, 700-709.

Epley, N., Akalis, S., Waytz, A., & Cacioppo J. T. (2008). Creating social connection through inferential reproduction: Loneliness and perceived agency in gadgets, gods, and greyhounds. *Psychological Science*, **19**, 114-120.

Ertel, K. A., Glymour, M. M., & Berkman, L. F. (2008). Effects of social integration on preserving memory function in a nationally representative US elderly population. *American Journal of Public Health*, **98**, 1215-1220.

Farnham, S. D. , Greenwald, A. G. , & Banaji, M. R. (1999). Implicit self-esteem. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity and social cognition* (pp. 230–248). Oxford, UK: Blackwell.

Fazio, R. H., Jackson, J. R., Dunton, B. C., & Williams, C. J. (1995). Variability in automatic activation as an unobtrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipeline? *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1013-1027.

Fazio, R.H., Sanbonmatsu, D.M., Powell, M.C., & Kardes, F.R. (1986). On the automatic activation of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 229–238.

Fein, S., & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through derogating others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.

Florian, V., Mikulincer, M., & Hirschberger, G. (2001). Validation of personal identity as a terror management mechanism: Evidence that sex-role identity moderates mortality salience effects. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1011-1022.

Ford, E. S., Loucks, E. B., Berkman, L. F. (2006). Social integration and concentrations of C-reactive protein among US adults. *Annals of Epidemiology*, **16**, 78-84.

Frey, D. (1981). The effect of negative feedback about oneself and cost of information on preferences for information about the source of this feedback. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 42-50.

Fromm, E. (1955). *The sane society*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Knowles, M. L. (2005). Social snacking and shielding:

Using social symbols, selves, and surrogates in the service of belonging needs. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. Von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying* (pp. 227-241). New York: Psychology Press.

Gawronski, B., & Strack, F. (2004). On the propositional nature of cognitive consistency: Dissonance changes explicit, but not implicit attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 535-542.

Gonsalkorale, K., & Williams, K. D. (2007). The KKK won't let me play: Ostracism even by a despised outgroup hurts. *European Journal of Social Psychology*, **37**, 1176-1186.

Gramzow, R. H., & Gaertner, L. (2005). Self-esteem and favoritism toward novel in-groups: The self as an evaluative base. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 801-815.

Gramzow, R. H., & Gaertner, L., Sedikides, C. (2001). Memory for in-group and out-group information in a minimal group context: The self as an informational base. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 188-205.

Green, J. D., Pinter, B., & Sedikides, C. (2005). Mnemic neglect and self-threat: Trait modifiability moderates self-protection. *European Journal of Social Psychology*, **35**, 225-235.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-207). New York; Tokyo: Springer Verlag.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Pinel, E., Simon, L., & Jordan, K. (1993). Effects of self-esteem on vulnerability-denying defensive distortions: Further evidence of an anxiety-buffering function of self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, **29**, 229-251.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S., & Lyon, D. (1990). Evidence for terror management: II. The effects of mortality salience on reactions to those who threaten or bolster the cultural worldview. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 308-318.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. J. (1994). The role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 627-637.

Greenberg, J., Simon, L., Harmon-Jones, E., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1995). Testing alternative explanations for mortality salience effects: Terror management, value accessibility, or worrisome thoughts? *European Journal of*

Social Psychology, **25**, 417-433.

Greenberg, J., Simon, L., Porteus, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1995). Evidence of a terror management function of cultural icons: The effects of mortality salience on the inappropriate use of cherished cultural symbols. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1221-1228.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In P. M. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp. 61-139). San Diego, CA: Academic Press.

Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L., & Pinel, E. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 913-922.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 1022-1038.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.

Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the Implicit Association Test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **97**, 17-41.

Gunnar, M. R., Sebanc, A. M., Tout, K., Donzella, B., & van Dulmen, M. M. (2003). Peer rejection, temperament, and cortisol activity in preschoolers. *Developmental Psychobiology*, **43**, 346-368.

Halloran, M. J., & Kashima, E. S. (2004). Social identity and worldview validation: The effects of ingroup identity primes and mortality salience on value endorsement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 915-925.

Harmon-Jones, E., Greenberg, J., Solomon, S., & Simon, L. (1996). The effects of mortality salience on intergroup bias between minimal groups. *European Journal*

of Social Psychology, **26**, 677-681.

Hart, J., Shaver, P. R., & Goldenberg, J. L. (2005). Attachment, self-esteem, worldviews, and terror management: Evidence for a tripartite security system. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 999-1013.

Haslam, S. A., & Reicher, S. (2006). Stressing the group: Social identity and the unfolding dynamics of responses to stress. *Journal of Applied Psychology*, **91**, 1037-1052.

Hayes, J., Schimel, J., Faucher, E. H., & Williams, T. J. (2008). Evidence for the DTA hypothesis II: Threatening self-esteem increases death-thought accessibility. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 600-613.

Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, **106**, 766-794.

Heine, S. J., Proulx, T., & Vohs, K. D. (2006). The meaning maintenance model: On the coherence of social motivations. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 88-110.

Hepper, E. G., Gramzow, R. H., & Sedikides, C. (2010). Individual differences in self-enhancement and self-protection strategies: An integrative analysis. *Journal of Personality*, **78**, 781-814.

Hepper, E. G., Sedikides, C., & Cai, H. (2013). Self-enhancement and self-protection strategies in China: Cultural expressions of a fundamental human motive. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **44**, 5-23.

Hogg, M. A., & Abrams, D. (1990). Social motivation, self-esteem, and social identity. In D. Abrams & M. A. Hogg (Eds.), *Social identity theory: Constructive and critical advances* (pp. 28-47). New York: Springer-Verlag.

Hogg, M. A., & Sunderland, J. (1991). Self-esteem and intergroup discrimination in the minimal group paradigm. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 51-62.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to ethnic discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 693-702.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.

Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D., Schwarz, N., & Stone, A. A. (2004). A survey method for characterizing daily life experience: The Day Reconstruction Method (DRM). *Science*, **306**, 1776-1780.

Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.

Karpinski, A., & Hilton, J. L. (2001). Attitudes and the Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 774-788.

北山忍 (1988). 自己と感情：文化心理学による問いかけ 共立出版.

Krueger, J. (1998). On the perception of social consensus. *Advances in Experimental Social Psychology*, **30**, 163-240.

Krueger, J. I. (2007). From social projection to social behaviour. *European Review of Social Psychology*, **18**, 1-35.

Krueger, J. I., Acevedo, M., & Robbins, J. M. (2006). Self as sample. In K. Fiedler & P. Juslin (Eds.), *Information sampling and adaptive cognition* (pp.353-377). New York, NY: Cambridge University Press.

工藤恵理子 (2004). 平均点以上効果が示すものは何か：評定対象の獲得容易性の効果 社会心理学研究, **19**, 195-208.

Lakin, J. L., Chartrand, T. L., & Arkin, R. M. (2008). I am too just like you: Nonconscious mimicry as an automatic behavioral response to social exclusion. *Psychological Science*, **19**, 816-822.

Levinger, G., & Breedlove, J. (1966). Interpersonal attraction and agreement: A study of marriage partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 367-372.

Levy, B. R., Slade, M. D., & Kasl, S. V. (2002). Longitudinal benefit of positive self-perceptions of aging on functional health. *Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, **57**, 409-417.

Luhtanen, R., & Crocker, J. (1992). A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 302-318.

MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, **131**, 202-223.

Maner, J. K., De Wall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the “porcupine problem.” *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 42-55.

Marks, G., & Miller, N. (1987). Ten years of research on the false-consensus effect: An empirical and theoretical review. *Psychological Bulletin*, **102**, 72-90.

Martens, A., Greenberg, J., Schimel, J., & Landau, M. J. (2004). Ageism and death: Effects of mortality salience and perceived similarity to elders on reactions to elderly people. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1524-1536.

Maslow, A. H. (1968). *Toward a psychology of being*. New York: D. Van Nostrand Company.

McGregor, H. A., Lieberman, J. D., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T. (1998). Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview-threatening others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 590-605.

McGregor, I., & Marigold, D. C. (2003). Defensive zeal and the uncertain self: What makes you so sure? *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 838-852.

McGregor, I., Nail, P. R., Marigold, D. C., & Kang, S. J. (2005). Defensive pride and consensus: Strength in imaginary numbers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 978-996.

Michinov, E., & Monteil, J. M. (2002). The similarity-attraction relationship revisited: Divergence between the affective and behavioral facets of attraction. *European Journal of Social Psychology*, **32**, 485-500.

Mikulincer, M., Gillath, O., & Shaver, P. R. (2002). Activation of the attachment system in adulthood: Threat-related primes increase the accessibility of mental representations of attachment figures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 881-895.

Mikulincer, M., Orbach, I., & Iavnieli, D. (1998). Adult attachment style and affect regulation: Strategic variations in subjective self-other similarity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 436-448.

Mlicki, P. P., & Ellemers, N. (1996). Being different or being better? National stereotypes and identifications of Polish and Dutch students. *European Journal of Social Psychology*, **26**, 97-114.

Montoya, R. M., Horton, R. S., & Kirchner, J. (2008). Is actual similarity necessary for attraction? A meta-analysis of actual and perceived similarity. *Journal of Social and Personal Relationships*, **25**, 889-922.

Moreland, R. L. (1987). The formation of small groups. In C. Hendrick (Ed.), *Group processes: Reveiew of personality and social psychology* (pp. 80-110). Newbury Park, CA: Sage.

Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). Ingroup bias as a function of salience, relevance, and status: An integration. *European Journal of Social Psychology*, **22**,

103-122.

Mummendey, A., Klink, A., & Brown, R. (2001). Nationalism and patriotism: National identification and out−group rejection. *British Journal of Social Psychology*, **40**, 159-172.

Mummendey, A., & Otten, S. (1998). Positive-negative asymmetry in social discrimination. *European Review of Social Psychology*, **9**, 107-143.

Murray, S. L., Holmes, J. G., Bellavia, G., Griffin, D. W., & Dolderman, D. (2002). Kindred spirits? The benefits of egocentrism in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 563-581.

Murray, S. L., Holmes, J. G., MacDonald, G., & Ellsworth, P. C. (1998). Through the looking glass darkly? When self-doubts turn into relationship insecurities. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1459-1480.

Myers, D. G. (1992). *The pursuit of happiness*. New York: Morrow.

野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子 (2007). 恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, **23**, 195-201.

Nosek, B. A. (2005). Moderators of the relationship between implicit and explicit evaluation. *Journal of Experimental Psychology: General*, **134**, 565-584.

Nosek, B. A. (2007). Implicit-explicit relations. *Current Directions in Psychological Science*, **16**, 65-69.

Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The Go/No-go Association Task. *Social Cognition*, **19**, 625-666.

Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Math = male, me = female, therefore math ≠ me. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 44-59.

Nussbaum, A. D., & Dweck, C. S. (2008). Defensiveness versus remediation: Self-theories and modes of self-esteem maintenance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 599-612.

Otten, S. (2002a). "Me and us" or" us and them"? The self as a heuristic for defining minimal ingroups. *European Review of Social Psychology*, **13**, 1-33.

Otten, S. (2002b). I am positive and so are we: The self as a determinant of favoritism towards novel ingroups. In P. Forgas, K. Williams (Eds.), *The social self: Cognitive, interpersonal and intergroup perspectives* (pp. 273-292). Philadelphia: Psychology Press.

Otten, S., & Bar-Tal, Y. (2002). Self-anchoring in the minimal group paradigm: The impact of need and ability to achieve cognitive structure. *Group Processes and Intergroup Relations*, **5**, 267-284.

Otten, S., & Epstude, K. (2006). Overlapping mental representations of self, ingroup, and outgroup: Unraveling self-stereotyping and self-anchoring. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 957-969.

Otten, S., & Wentura, D. (1999). About the impact of automaticity in the minimal group paradigm: Evidence from affective priming tasks. *European Journal of Social Psychology*, **29**, 1049-1071.

Ouwerkerk, J. W., Kerr, N. L., Gallucci, M., van Lange, P. A. M. (2005). Avoiding the social death penalty: Ostracism and cooperation in social dilemmas. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The Social Outcast: Ostracism, Social Exclusion, Rejection, and Bullying* (pp. 321–332). New York: Psychology Press.

Park, L. E. (2010). Responses to self-threat: Linking self and relational constructs with approach and avoidance motivation. *Social and Personality Psychology Compass*, **4**, 201-221.

Park, L. E., & Maner, J. K. (2009). Does self-threat promote social connection? The role of self-esteem and contingencies of self-worth. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 203-217.

Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., & Stewart, B. D. (2005). An inkblot for attitudes: Affect misattribution as implicit measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 277-293.

Perreault, S., & Bourhis, R. Y. (1999). Ethnocentrism, social identification, and discrimination. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 92-103.

Petty, R. E., Tormala, Z. L., Briñol, P., & Jarvis, W. B. G. (2006). Implicit ambivalence from attitude change: An exploration of the PAST model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 21-41.

Phelps, E. A., O'Connor, K. J., Cunningham, W. A., Funayama, E. S., Gatenby, J. C., Gore, J. C., & Banaji, M. R. (2000). Performance on indirect measures of race evaluation predicts amygdala activation. *Journal of Cognitive Neuroscience*, **12**, 729-738.

Pinkley, R., Laprelle, J., Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1988). Depression and the self-serving search for consensus after success and failure. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **6**, 235-244.

Platow, M. J., Voudouris, N. J., Gilford, N., Jamieson, R., Najdovski, L., Papaleo, N., Pollard, C., & Terry, L. (2007). In-group reassurance in a pain setting produces lower levels of physiological arousal: Direct support for a self-categorization

analysis of social influence. *European Journal of Social Psychology*, **37**, 649-660.

Pratto, F., & John, O. P. (1991). Automatic vigilance: The attention-grabbing power of negative social information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 380-391.

Predmore, S. J., & Williams, K. D. (1983). *The effects of social ostracism on affiliation*. Paper presented at the Annual Meeting of the Midwestern Psychological Association, Chicago.

Pyszczynski, T., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., & Schimel, J. (2004). Why do people need self-esteem? A theoretical and empirical review. *Psychological Bulletin*, **130**, 435-468.

Pyszczynski, T., Wicklund, R. A., Floresku, S., Koch, H., Gauch, G., Solomon, S., & Greenberg, J. (1996). Whistling in the dark: Exaggerated consensus estimates in response to incidental reminders of mortality. *Psychological Science*, **7**, 332-336.

Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review,* **9**, 32-47.

Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.

Rothermund, K., & Wentura, D. (2004). Underlying processes in the Implicit Association Test: Dissociating salience from associations. *Journal of Experimental Psychology: General*, **133**, 139-165.

Routledge, C. (2012). Failure causes fear: The effect of self-esteem threat on death-anxiety. *Journal of Social Psychology*, **152**, 665-669.

Routledge, C., Ostafin, B., Juhl, J., Sedikides, C., Cathey, C., & Liao, J. (2010). Adjusting to death: The effects of mortality salience and self-esteem on psychological well-being, growth motivation, and maladaptive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **99**, 897-916.

Rubin, M., & Hewstone, M. (1998). Social identity theory's self-esteem hypothesis: A review and some suggestions for clarification. *Personality and Social Psychology Review*, **2**, 40-62.

Rudman, L. A., Dohn, M. C., & Fairchild, K. (2007). Implicit self-esteem compensation: Automatic threat defense. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 798-813.

Sachdev, I., & Bourhis, R. Y. (1987). Status differenttals and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **17**, 277-293.

Sachdev, I., & Bourhis, R. Y. (1991). Power and status differentials in minority and majority group relations. *European Journal of Social Psychology*, **21**, 1-24.

齊藤崇子・中村知靖・遠藤利彦・横山まどか (2001). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化 九州大学心理学研究, **2**, 135-144.

Sanna, L. J., Chang, E. C., & Carter, S. E. (2004). All our troubles seem so far away: Temporal pattern to accessible alternatives and retrospective team appraisals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1359-1371.

佐藤徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.

Schmeichel, B. J., Gailliot, M. T., Filardo, E. A., McGregor, I., Gitter, S., & Baumeister, R. F. (2009). Terror management theory and self-esteem revisited: The roles of implicit and explicit self-esteem in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 1077-1087.

Sechrist, G. B., & Stangor, C. (2001). Perceived consensus influences intergroup behavior and stereotype accessibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 645.

Sherman, D. K., & Cohen, G. L. (2006). The psychology of self-defense: Self–affirmation theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, **38**, 183-242.

Sherman, D. K., Cohen, G. L., Nelson, L. D., Nussbaum, A. D., Bunyan, D. P., & Garcia, J. (2009). Affirmed yet unaware: Exploring the role of awareness in the process of self-affirmation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **97**, 745-764.

Sherman, S. J., Presson, C. C., & Chassin, L. (1984). Mechanisms underlying the false consensus effect: The special role of threats to the self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **10**, 127-138.

Shrauger, J. S., & Lund, A. K. (1975). Self-evaluation and reactions to evaluations from others. *Journal of Personality*, **43**, 94-108.

Simon, B. (1997). Self and group in modern society: Ten these on the individual self and collective self. In R. Spears, P. J. Oakes, N. Ellemers, & S. A. Haslam (Eds.), *The social psychology of stereotyping and group life* (pp. 318-335). Oxford: Blackwell.

Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434-446.

Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multimotive model. *Psychological Review*, **116**, 365-383.

Smith, E. R. (2002). Overlapping mental representations of self and group: Evidence

and implications. In J. P. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *The social self: Cognitive, interpersonal, and intergroup perspectives* (pp. 21-35). Philadelphia: Psychology Press.

Smith, E. R., Coats, S., & Walling, D. (1999). Overlapping mental representations of self, in-group, and partner: Further response time evidence and a connectionist model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 873-882.

Smith, E. R., & Henry, S. (1996). An in-group becomes part of the self: Response time evidence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 635-642.

Smith, E. R., Murphy, J., & Coats, S. (1999). Attachment to groups: Theory and management. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 94-110.

Spencer, S. J., Fein, S., Wolfe, C. T., Fong, C., & Duinn, M. A. (1998). Automatic activation of stereotypes: The role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1139-1152.

Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp. 261-302). New York: Academic Press.

Stroud, L. R., Tanofsky-Kraff, M., Wilfley, D. E., & Salovey, P. (2000). The Yale Interpersonal Stressor (YIPS): Affective, physiological, and behavioral responses to a novel interpersonal rejection paradigm. *Annals of Behavioral Medicine*, **22**, 204-213.

Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.

Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks-Cole.

Taubman Ben-Ari, O., Florian, V., & Mikulincer, M. (1999). The impact of mortality salience on reckless driving: A test of terror management mechanisms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 35-45.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1994). Positive illusions and well-being revisited: Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, **116**, 21-27.

Tesser, A. (2000). On the confluence of self-esteem maintenance mechanisms. *Personality and Social Psychology Review*, **4**, 290-299.

Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance:

Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 561-574.

Tesser, A., & Cornell, D. P. (1991). On the confluence of self processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **27**, 501-526.

Turner, J. C., & Brown, R. (1978). Social status, cognitive alternatives, and intergroup relations. In H. Tajfel (ed.), *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations* (pp. 201-234). London: Academic Press.

Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford & New York: Basil Blackwell.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D., M., & Stucke, T. S. (2001). If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 1058-1069.

Van Beest, I., & Williams, K. D. (2006). When inclusion costs and ostracism pays, ostracism still hurts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 918-928.

Van den Bos, K., Poortvliet, M., Maas, M., Miedema, J., & Van den Ham, E. (2005). An enquiry concerning the principles of cultural norms and values: The impact of uncertainty and mortality salience on reactions to violations and bolstering of cultural worldviews. *Journal of Experimental Social Psychology*, **41**, 91-113.

Vanhoomissen, T., & Van Overwalle, F. (2010). Me or not me as source of ingroup favoritism and outgroup derogation: A connectionist perspective. *Social Cognition*, **28**, 84-109.

Warburton, W., A., Williams, K. D., & Cairns, D. R. (2006). When ostracism leads to aggression: The moderating effects of control deprivation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 213-220.

Wenzel, M., & Mummendey, A. (1996). Positive-negative asymmetry of social discrimination: A normative analysis of differential evaluations of in-group and out-group on positive and negative attributes. *British Journal of Social Psychology*, **35**, 493-507.

Williams, K. D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, **58**, 425-452.

Williams, K. D. (2009). Ostracism: A temporal need-threat model. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp. 275-314). Burlington: Academic Press.

Williams, K. D., Cheung, K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**,

748-762.

Williams, K. D., & Nida, S. A. (2011). Ostracism: Consequences and coping. *Current Directions in Psychological Science*, **20**, 71-75.

Wilson, T. D., Wheatley, T. P., Kurtz, J. L., Dunn, E. W., & Gilbert, D. T. (2004). When to fire: Anticipatory versus postevent reconstrual of uncontrollable events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 340-351.

Wisman, A., & Koole, S. L. (2003). Hiding in the crowd: Can mortality salience promote affiliation with others who oppose one's worldviews? *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 511-526.

Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. (2004). How low can you go? Ostracism by a computer is sufficient to lower self-reported levels of belonging, control, self-esteem, and meaningful existence. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 560-567.

謝辞

本論文の執筆に際して、多くの方々からご指導やご協力をいただきました。指導教員の唐沢かおり先生（東京大学）は「自己防衛」という研究の切り口をはじめとして、本論文の執筆の最後までつねに懇切なご指導を賜りましたことを心より感謝申し上げます。これまで研究を続けてこられたのも、唐沢先生の多大なご尽力とご支援があったからこそです。山口勧先生（東京大学）には修士課程のときから継続して、本論文の各研究について的確なアドバイスをいただきました。村本由紀子先生（東京大学）は論文の構成や内容について重要な示唆をいただき、今後の大きな指針となりました。また、戸梶亜紀彦先生（東洋大学）は本論文をより説得的にするために、多様な観点から鋭いご指摘をいただきました。福島治先生（新潟大学）には学部生のころより親身なご指導をいただき、「自己と内集団の連合」というテーマ選択など、研究を進めていくうえでのきっかけや貴重なご助言を与えてくださいました。これらの先生方に深く感謝いたしております。

本論文における一連の研究の遂行では、ほかにもさまざまな方々からご指導をいただきました。特に、大髙瑞郁さん、白岩祐子さん、橋本剛明さん、櫻井良祐さんは本論文や関連する研究を実施し分析、考察するにあたって数多くの有益なご指摘をいただきました。リサーチ・ミーティングなどの研究にかぎらず大学院の生活でもお世話になり、心よりお礼申し上げます。また、東京大学・社会心理学研究室の福島澄子さん、月元敬さん、品田瑞穂さんには研究生活で全面的なサポートをいただきました。さらに、沼崎誠先生（首都大学東京）、北村英哉先生（関西大学）、藤島喜嗣先生（昭和女子大学）には学会や研究会などで、何度も重要なご助言をいただきました。これらの方々やこれまでお世話になったすべてのみなさまに深く感謝の意を表します。最後に、心理学や「人間」について研究する契機を与えてくれた亡父・俊廣にこの論文を捧げるとともに、いつも支えてくれた母・幸子、姉・千明、妹・千里に心から感謝いたします。

資料

A） 類似性の測定に使用した特性語（研究１・３・5）

ポジティブ特性語

1. 明るい
2. まじめ
3. 良心的
4. 意欲的
5. 思いやりがある
6. 親しみやすい
7. がまん強い
8. きちんとしている
9. 理性的
10. 魅力的

ネガティブ特性語

1. でしゃばり
2. いじわる
3. 感じがわるい
4. なまいき
5. 軽率
6. 軽薄
7. 心がせまい
8. たよりない
9. 意志が弱い
10. 自信がない

*研究 3 はポジティブ・ネガティブ特性語における 1～10 の項目を使用し（合計 20 項目）、研究 1･5 はポジティブ･ネガティブ特性語における 1～5 の項目を使用した（合計 10 項目）。

B) 主観的幸福感の測定（研究 1）

あなたが目を覚ましている時、どのように感じ、どのような気分でいるのかについてお尋ねします。目を覚ましている全ての時間のうち、次の気分でいる時間は何パーセントですか。

嫌な気分	_____%
少し沈んだ　または　いらいらした	_____%
穏やかな楽しさ	_____%
非常に良い気分	_____%
	計 100%

C) 類似性の操作に使用した意見項目（研究 2）

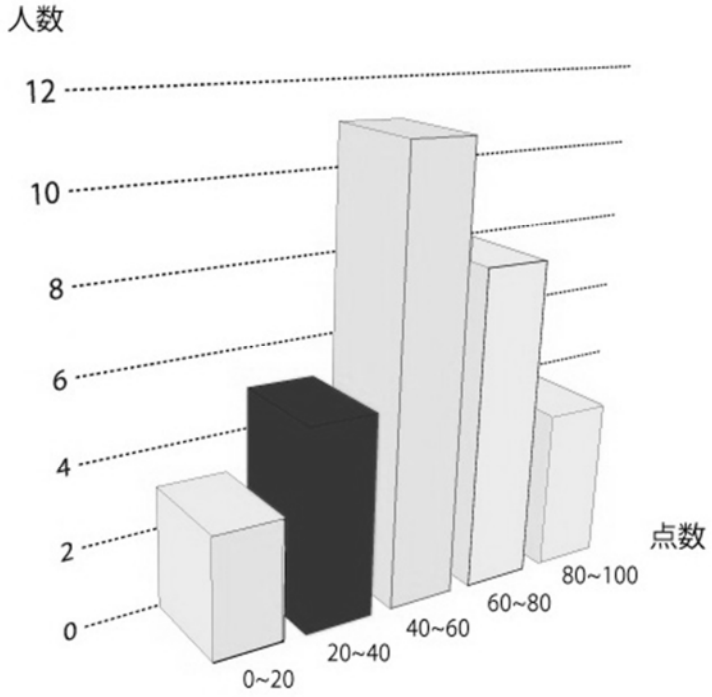
1. テレビでスポーツ観戦をするのが好きだ
   テレビでスポーツ観戦をするのが嫌いだ
2. 結婚した後は、共働きをしたほうが良いと思う
   結婚した後は、共働きをしなくても良いと思う
3. 一般的に、公共の場での喫煙は認められるべきではない
   一般的に、公共の場で喫煙しても良いと思う
4. 健康のために毎日運動する必要があると思う
   健康のためでも毎日運動する必要はないと思う
5. 大学教育は社会で成功するために必要だと思う
   大学教育は社会で成功するために必要ないと思う
6. テレビでお笑いタレントの番組を見るのが好きだ
   テレビでお笑いタレントの番組を見るのは嫌いだ
7. 第 2 外国語は必修科目から外すべきだ
   第 2 外国語は必修科目のままにするべきだ
8. できるだけ離婚は避けるべきだと思う
   離婚を避ける必要はないと思う
9. いつかは海外で暮らしてみたい
   ずっと国内で暮らしたい
10. 小説を読むのが好きだ
    小説を読むのは嫌いだ

D） 主観的幸福感尺度（研究２・6）

「それぞれの質問について、あなたの考えに最も近いものを選んでください」

1. あなたは人生が面白いと思いますか
2. 過去と比較して、現在の生活は
3. ここ数年やってきたことを全体的に見て、あなたはどの程度幸せを感じていますか
4. ものごとが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に適切に対処できると思いますか
5. 危機的な状況に出会ったとき、自分が勇気を持ってそれに立ち向かって解決していけるという自信がありますか
6. 今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる自信がありますか
7. 期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れたと思いますか
8. これまでどの程度成功したり出世したと感じていますか
9. 自分がやろうとしたことはやりとげていますか
10. 自分の人生は退屈だとか面白くないと感じていますか
11. 将来のことが心配ですか
12. 自分の人生には意味がないと感じていますか

E） 自尊心脅威の操作に使用したグラフ（研究３・5）



*実験では参加者に、「黒い部分（実際は赤）があなたの成績を表しています」と教示した。

F) 状態自尊心尺度（研究３・5）

「それぞれの質問について、「いまのあなた」にどの程度当てはまるかをお答えください」

1. いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる
2. いま、自分にはいろいろな良い素質があると感じる
3. いま、自分は敗北者だと感じる
4. いま、自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる
5. いま、自分には自慢できるところがないと感じる
6. いま、自分に対して肯定的であると感じる
7. いま、自分にほぼ満足を感じる
8. いま、自分はだめな人間であると感じる
9. いま、自分は役に立たない人間であると感じる

G） 死の顕現性の操作に使用した質問項目（研究 4・6）

MS 条件

1. 死ぬことはとても寂しいことである
2. 死んでしまえば、もう人生の意義を追究できなくなる
3. 死んでしまえば、自分の力を十分にいかすことができなくなる
4. 今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう
5. 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである
6. 死とは、最後の苦しい瞬間である
7. どれほど苦しい人生であっても自殺するべきではない
8. 死とは何にもまして予測しがたいものである
9. 死ぬことは、愛する人たちを見捨てることになる
10. 人生の計画を立てるにあたって死はたいして重要ではない
11. 死んでしまえば一人ぼっちである
12. 今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬ事になる
13. 脳死状態になったら延命治療はしたくない
14. 死は、複雑な人生の中でも、もっともわかりにくいものである
15. 死とは、未知のことがらである
16. 誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない
17. 死んでしまえば、人は忘れ去られてしまうものである
18. 死とは、もっともつらいものである
19. 暴力によって死んでいくことが心配だ
20. 苦しんで死ぬのが怖い
21. 死ぬことを考えて悩んだりはしない
22. 死体を見たら恐ろしいと思うだろう
23. 私はゆっくりと死んでいくのが怖い
24. 人生は短いと思うと不安になる
25. 私はときどき、人生はなんと短いのだろうと思う

統制条件

1. 子供の頃と比較して、味の好みが変化した
2. 魚料理よりも肉料理をよく食べる
3. 現代の日本では、必要のない人までダイエットしている
4. 週に何度か、自分で料理を作る
5. ファーストフードが好きだ
6. 大学の食堂の料理は、値段の割においしくない
7. 和食よりも洋食が好きだ
8. 食べ物の好き嫌いが激しい
9. 幼い頃の食事の内容が、成長後の味の好みを決める
10. 朝食を食べないことが多い
11. 週に 1 度は酒を飲む
12. コンビニエンスストアでよく食べ物や飲み物を買う
13. 食事のマナーには気をつかっている
14. 大学に入ってから外食する機会が増えた
15. 甘いものが好きだ
16. スパイスをきかせた料理は苦手だ
17. マナーの悪い人とは一緒に食事をしたくない
18. 清涼飲料水を売っている自動販売機をよく利用する
19. 運動より食事制限の方がダイエットに効果的だ
20. よく間食する
21. 比較的決まった時間に食事をとっている
22. 市販の菓子類をよく食べる
23. 朝昼晩の 3 食を欠かさずにとっている
24. チーズやヨーグルトなどの乳製品をよく食べる
25. 私は小食だ（食事量が少ない）

H） 概念連合の測定に使用した特性語（研究 4）

ポジティブ特性語

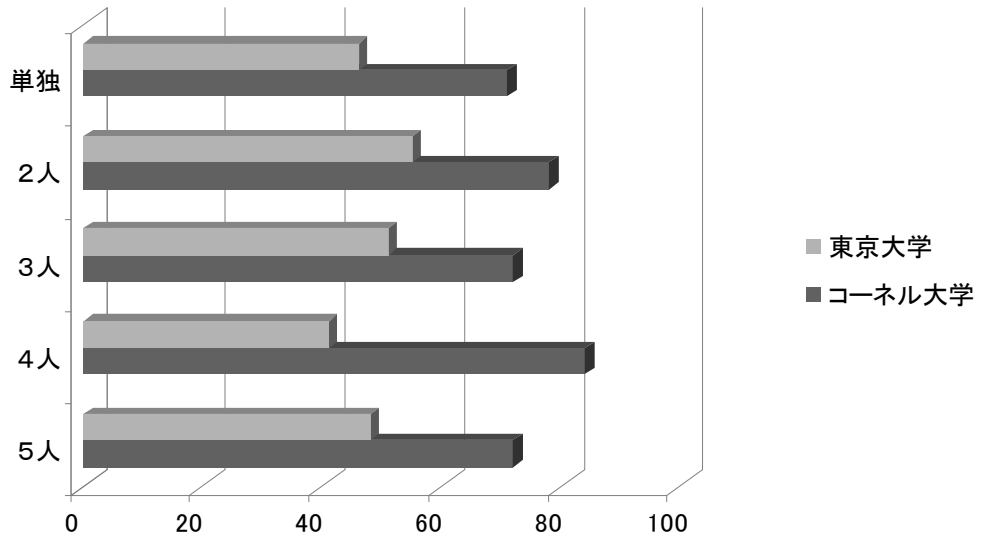
1. 陽気
2. 話好き
3. 社交的
4. 外向的
5. 活動的
6. 多才
7. 進歩的
8. 頭の回転が速い
9. 独創的
10. 洞察力がある
11. 飲み込みが速い
12. 想像力がある
13. 臨機応変
14. 好奇心が強い
15. 美的感覚が鋭い
16. 興味が広い
17. 独立している
18. 協力的
19. 良心的
20. 親切
21. 寛大
22. 温和
23. 勤勉
24. 計画性がある
25. 几帳面
26. 正直
27. 思いやりがある
28. 誠実
29. 理性的
30. 洗練されている

ネガティブ特性語

1. 冷たい
2. 弱い
3. くどい
4. 感情的
5. 無頓着
6. でしゃばり
7. 勝手
8. 粗略
9. 消極的
10. 聞き分けがない
11. 汚い
12. 臭い
13. ずぼら
14. 飽きやすい
15. 頑固
16. 行儀が悪い
17. 指導力がない
18. 神経質
19. うるさい
20. 付き合いが悪い
21. 独りよがり
22. のろま
23. KY
24. 落ち着きがない
25. 一貫性がない
26. 感じがわるい
27. 軽率
28. 意志が弱い
29. 貧乏
30. 不幸

I)　集団地位の操作に使用したグラフ（研究 5・6）

低地位条件



*研究 6 では、コーネル大学の代わりに早稲田大学を使用した。また、研究 6 の高地位条件では、大学名を記したラベル（東京大学・早稲田大学）を入れ替えている。

J） 日本語版 PANAS 尺度（研究 6）

「それぞれの項目について、現在の気分にどの程度当てはまるかをお答えください」

ポジティブ感情

1. 活気のある
2. 誇らしい
3. 強気な
4. 気合いの入った
5. きっぱりとした
6. わくわくした
7. 機敏な
8. 熱狂した

ネガティブ感情

1. びくびくした
2. おびえた
3. うろたえた
4. 心配した
5. 苦悩した
6. ぴりぴりした
7. 恥じた
8. いらだった

K） 内集団同一視尺度（研究 6）

「あなたと東京大学との関係について、最もよく当てはまるものを、それぞれ 1 つずつ選んでください」

1. 「あなたは典型的な東大生だね」と言われたとしたら、その表現は当たっている、つまり適切にあなたのことを表現していると思いますか？それとも、外れている、適切でないと思いますか？
2. あなたは他の人から、どの程度典型的な「東大生」と思われていると思いますか？
3. 「あなたは典型的な東大生だね」と言われたら、良い感じがしますか、それとも悪い感じがしますか？
4. あなたの東京大学に対する所属意識は強いほうですか、弱いほうですか？
5. あなたは東京大学にプライドを感じますか？
6. あなたにとって本当に大切な友人は、東京大学外、東京大学内のどちらに多くいますか？
7. あなたの考えや行動に影響を与えた人が、東京大学内にはどれくらいいますか？
8. 「自分は東大生なんだなあ」と実感することがありますか？
9. あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が東大生であることに、よくふれる方ですか、ふれない方ですか？
10. あなたは東京大学にどれくらい愛着を感じていますか？
11. あなたは、ほかの東大生のメンバーが、好きな方ですか、嫌いな方ですか？
12. あなたは、ほかの東大生のメンバーに、どれくらい親近感を感じますか？